鎌岡―鎌倉

はき―佩用し

遠かたや―祝詞の句

田の縁起を、社僧江戸へ持下りしを見侍る。神功皇后の縁起二卷、譽田の宗廟の縁起三卷、永享年中普廣院寄進せらる。五卷ともに土佐が繪にて、宗廟の三卷は、普廣院親筆に事書をうつされけり。唯今爰の八幡を見て、かの縁起の事を思ひ出し、聊しるし侍る。

無方變化本非恒　五彩靈鳩金色鷹　神不惑人人却惑
唯嫌巫祝有依憑

## 久佐奈岐

延喜式に、駿河國草薙神社といへるは是なり。むかし日本武尊、吾嬬國に下り給ひし時、この所にて夷賊おこり、原野に火を放ちて尊を燒殺さんとしければ、尊はき給へる劍をぬき、遠かたやしげきがもとをやい鎌の利鎌をもちて打はらふ事のごとくと、唱へ祓ひて、劍をふりたまひければ、あたりの草盡くなぎはらはれて、夷賊の方へ烟なびきて、尊は恙もましまさず。さてこそ初は天のむら雲の劍と申せしを、草薙の劍とは名づけけれ。尊これより奥へ下りて、東夷をたひらげ、のぼり給ふ時に、かの劍を熱田の神宮へをさめ給ふ。我國歴代傳寶の三種の神器の其一なり。其尊を燒むとしける所をば、

燒津―今音便て「やいづ」と呼ぶ、燒津は靜岡の西にあり、草薙は靜岡の東にあり、共間相距る五六里、古來此事に關し諸說紛々たり

倒懸―非常の苦しみ

歌―「駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」伊勢物語

明日香川ならねど―「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬となる」

燒津と名づけ、草をはらひたまふ所をば、草薙と名づけて、何れも駿河國にあり。

欲爲黎民解倒懸　東征到處幾山川　腹間一自蛇龍動
雲氣吹消蔓草烟

## 宇都山

在原業平この山を過ぎし時、蔦楓いとしげりて道もなし、修行者にあひて、歌をよみて言傳てける事、人のあまねく知れる事なり。俗者内屋ともかけり。

山中回首費吟呻　遺愛蔦楓秋又春
業平謂後更無人　今古冥々名與境

## 大井川

大井河は駿河と遠江との境なり。明日香川ならねど、霖雨ふれば淵瀨かはる事たびくなれば、東の山の岸を流れて、島田の驛河原の中にある事あり、西の方に流れて、金谷の山にそふ事もあり、一すぢの大河となりて、大木沙石を流す事もあり、あまたの枝流

徒杠與梁―徒杠は徒歩して渡るべき橋、與梁は車輿の通るべき廣き橋、孟子「歳十一月徒杠成、十二月輿梁成、民未病涉也」賣炭翁―白居易の詩に出づ

掲厲―もすそをかゝげて徒渉すること

圓位法師―西行いのちなりけり―上句「年を經てまた越ゆべしと思ひきや」詩に西行壽とあるはこの歌をいふ也

となりて、一里ばかりが間にわかるゝ事もあり。さればいにしへより、徒杠輿梁もなり難き故に、往來の人馬、川の瀬を知らざれば、金谷に待つもあり、島田にとどまるもあり、渡りかゝりて溺るゝ者もあり、辛うじてむかひの岸に至るもあり。島田の民おのが家は漂ひ流るれども、旅客の囊をむさぼる故に、洪水をよろこぶ。賣炭翁が單衣にして、年の寒きを待つが如し。河水の家を流し、田をそこなふ故に、防鴨河使、防葛野河使を置かれし昔の事も、唯今思ひ出でざらんや。

尋常掲厲必過腰　叱馬呼奴魂欲銷　來往就中何處苦
無舟無筏復無橋

## 小夜中山

圓位法師が、「いのちなりけり佐夜の中山」と詠ぜしは爰にての事なり。

坂道升降是早天　夢殘馬上不成眠　此山無限西行壽
能使詠歌千古傳

かてゝ―加へて　茯神―茯苓をいふ、本草に「多年樵砍之松根之氣味抑鬱未絶精英未淪其精氣盛者發泄於外結爲茯苓故不抱根離其本體有零之義也精氣不盛上爲付結本根既不離本故曰茯神」　芒碭―山の名、前漢書高帝紀に「隱芒碭山澤間」

## 西坂

西坂を新坂とも書けり。此所の民、わらび餅を賣る。往還のもの飢をすくふ故に、いにしへより、新坂のわらび餅とて、其名あるものなり。或は葛の粉をまじへて蒸餅とし、豆の粉に鹽かてゝ旅人にすゝむ。人その蕨餅なりと知りて、其葛餅といふ事を知らず。諸越に、茯神を買うて老芋を得たる人もありけるとかや。

婆叫焦兮婦喚烘　停人鄙食在途中　憑誰救得西山餓
馬首吹來餅餌風

## 中泉

見附、濱松の間に、中泉といへる所は、鳧雁の多き所にて、遊獵によろしき地なれば、大相國年毎に放鷹せさせ給ひてありしが、余も御供に待りしに、「芒碭雲一去。鴈鶩空相呼」と、此たび打誦すべしとは思ふべしやは。駿遠二州、今は中將殿の知らせ給ふ國なれば、封建のむかしも、今にあらざらめかも。

決雲兒―鷹

湯谷―文熊野、侍從と號す龍を平宗盛に事らにせり本文矢島大臣といふは即ち宗盛

春蒐冬狩跡猶遺　霜露凄々野草衰　鴻鴈自來還自去
更無人放決雲兒

## 池田

美濃の青墓、遠江の池田、駿河の手越、いづれも長者遊君ありて、むかしは往還の武士、輕薄の少年、鞍馬を門につなぎ、千金笑ひを買ふ所なれば、かの江口の津にも、いかで劣り侍らん。矢島大臣のめされし湯谷も、此池田の宿のむすめにてはんべる事、世にかくれなし。今は此宿、天龍の河の東のはたに、形ばかり殘りて、わづかなる小民ども、渡りを守りて居侍りける。大天龍小天龍とて、二の河ありけるが、新田左中將の、尊氏と戰ひ負けてのぼられける時、うき橋の桁のなかりけるを、飛越えられけるも、爰のことなり。江都が輕捷の有りけるにや。濱松のそばなる細流を、小天龍の事なりと、今ぞいふめる。

池田驛長本倡家　處子嬋娟天下誇　腰似楚王宮裏柳
面如巫女廟前花　古今不盡洪河水　淵瀨相移兩岸沙



治亂興亡非我事　征鞍暫憩且嘗茶

## 今切

遠州荒井の濱より奥の山、五里ばかり海となりて、大船も出入る事、むかしは山に續きたる陸地なりしが、中比山より法螺の貝おびたゞしくぬけ出でて海へ入りける。其跡かくの如く海となりて、今切と名づくるよし、古老言ひ傳へたり。我國は、伊弉諾伊弉册のうみ給ひ、大巳貴、少彦名の造られけるといへば、其むかしはいかゞ侍りけむ。もろこしの華山を、巨靈が擘開して、水をやりける事も侍るにや。

一葉扁舟寄旅身　瀨波通信遠州濱　海山何借巨靈手
我國元來造化神

## 潮見坂

白須賀より西のかたへのぼる一の坂あり、大洋眼前にあれば、潮見坂となづく。余嘗て詩を作りて云ふ。

山看の韻―山は刪、看は寒の韻
三百篇―詩經
楚人の詞―楚辭
八句―律詩

波浪雲天俱一色　東南溟海更無山　聖門有術人何敢
潮見坂頭停馬看

律にかゝはらず、快活のやうなれども、山看の韻、世俗の思ふ所、通韻は廣きが故に易く、切韻は狹き故に難しとなん。三百篇、楚人の詞には、協韻のみ多かり。いかんぞ聖人の刪修、屈宋が文を慕はずして、沉約江老のいやしきを學ばむとや。世間流布の韻鏡にも、協通の音を專とし、洪武正韻、洪武韻府にも、むかしにかへり、中比の韻をあらためたらず。志あらん人の、いかでか我に同じからざらん。しかはあれど、初學の律偶に拘る者は、先なやみて後に得べき事とおぼえ侍る。されば不律にあらんよりは、先づ律をまもるべし。絶句を學ばむよりは、先八句を作るべし。意到らず、風高からざれば、古にあらず。句到らず、情深からざれば、律にあらず、是詩學の捷徑なりと、さる人の語りしは、誠にげにもとおぼしくて、耳にとどまり侍る。

天地豈識幾層瀾　舒卷古人方寸端　滿目不遮潮見坂
大鵬飛盡水漫々

菅野眞道が史―續日本紀也、眞道は山守の子、百濟辰孫王の後也、其續日本紀を修して奉りしは延曆十六年伊勢守の時にして、仁の始め參議常陸守に至りて致仕す　翠華―鳳輦をいふ

周處が云々―周處は三國時代の人、甚だ粗暴なりしが、父老が南山の白額の猛虎と、長橋下の

## 三河國

しほ見坂より二河の間に、纔なる溝あり。是なん遠江三河の境なりといふ。いつぞや菅野の眞道が史を見侍りしに、持統天皇、三河國行幸ありとしるせれど、いづれの村里といふ事を知らず。眞道は光仁桓武の時なれば、世久しく知らざるにや、づれの村里といふ事を知らず。口惜し。事略して書きもらせるにや、

先王若要慰民生　定有壺漿簞食迎　遺恨翠華巡狩跡
未聞行在頓宮名

### 吉田

江戸より京までの間に大橋四あり。武藏の六郷、三河の吉田、矢矧、近江の勢多なり。ひとり矢矧のみ土橋なれば、洪水によりて絶ゆる事もあり、此比新に板橋となりけるにや。爰にしも、誰か周處が三害をやめて、留侯が一篇を傳へむや。

行々何日窮　相送數州風　馬過曉霜上　龍橫道路中

蛟と、子（周處を指す）と幷せて三害となすと歎ずるを聞き、虎と蛟とを殺し、自ら善行を積めりといふ

留侯が一篇―留侯張良子房が下邳圯上にて黄石より一篇の兵書を傳へられし故事

甘棠意―後人が遺德を慕ふをいふ、周の太保召公奭南方を巡行して文王の政を宣ぶる時甘棠（コリンゴ）樹下に宿りしが、後人召王を慕ふ餘り其樹きて愛したる故事

昆吾―古への名劍の名

失桑榆―日暮に失ふ、後に失ふ、後漢書「失之東隅收之桑榆」の飜案

川流無晝夜　人物有西東　一枕還鄕夢　家書久不通

長澤

昔在轅門見玉鞍　豈圖今日淚闌干　林間應是甘棠意

遺愛歲寒千百竿

矢矧

矢矧は岡崎の西一里ばかりにあり。建武の時、足利氏鎌倉にありて、天子の命に違ひしかば、新田氏節刀使を奉りて東征し、此所にて鎌倉の軍兵と戰ひ勝ちて、鷺坂まで逃るを追打つて、官軍利を得し所なり。後に箱根、竹下の戰に、官軍敗績して、中書王の走り給ひし事こそ、まことに不幸ならずや。

森々白刃是昆吾　波激河邊千萬夫　恩賜旌旗如日色

東隅雖得失桑榆

在五中將の歌―伊勢物語「かきつばたのころもきつゝなれにしつましあればはるゝばるゝきぬるたびをしぞ思ふ」八橋にて業平がかきつばたの五文字を頭に置きて詠める歌　六々歌中―三十六歌仙中

おほやう―概ね

八橋

三河國八橋は、杜若の名所なる事、在五中將の歌にてかくれなし。今岡崎より池鯉鮒にいたる道より、北の方一里ばかりに、それなんむかしの八橋なりとて、所の人、遙かに指をさして教へ侍る。久しく田となりて、今は杜若なし。三四年前、余が作りける詩にも、「古人遺跡鐵鑪步。只有三河杜若名」となん。

六々歌中第幾仙　風流千歲慕幽玄　世間一瞬皆陳迹

杜若爲薪澤作田

熱田

日本武尊、東よりかゝり給ふ時、尾張の稻種宿禰かむすめ、宮簀媛が家に宿しましまするより、此社の神といはひ申すなり。然るに世俗の說に、熱田を蓬萊といふなれば、楊貴妃を祭るといふ。されば宋大史が日東の曲にも、國に楊妃が祠ありといへり。此社のみならず、巫覡の託宣、世間の傳說は、おほやう覺束なき事多かる。

東征功就凱旋時　宿所曾徴宮簀姫　誰道馬嵬坡下鬼
一朝來レ此立二靈祠一

## 桑名

熱田より海路七里渡りて、伊勢國桑名に至る。むかし清見原天皇、吉野より潛幸ありし時、皇后も伴ひたまひて、天皇は此所より美濃國不破關に赴かせ給ひ、皇后は此地に留まり給ふ。天皇大友の王子と位を爭ひ、不破の關にて、東西の兵相戰ひしに、天皇利を得させたまひて、位につかせ給ふ、天武天皇是なり。皇后は天智天皇の娘、大友王子と連枝にてまします。女主にて、後に持統天皇と申しょなり。桑名におはせし頓宮、今はいづれの所なる事を人に問へども、知れる者なし。又聖武天皇の時、藤原廣繼、西國にて野心をおこすと聞えければ、官軍をつかはし、退治し給ふ。天皇は伊勢太神宮に參詣ましく〳〵て、祈らせ給ひ、それより此桑名に渡御ありて、美濃にかより、近江路を經て還幸なりぬ。その間に、廣繼伏誅のよし、捷書を馳せて奏しける。日本紀續日本紀を見侍りし事を、聊か爰にしるしける。

馬嵬坡下鬼―楊貴妃の靈魂、貴妃馬嵬山下に殺されたるよりいふ
清見原天皇―天武天皇
連枝―御兄妹
頓宮―かりみや



曾聞二帝此停レ車　憾在二吾邦未見書一　今問二先蹤一人不レ識
誰庚二風土一補二方輿一

## 石藥師

四日市場より三里ばかり西に、藥師の石像ある所を、石藥師と名づく。余が心に不圖思ふやう、浮圖をかさね、五輪をきざみ、退凡下乘をたて、佛菩薩を石にて造るは、所々多けれど、碑銘墓誌石表などは一もなし。嵯峨の二尊院に、源空沙門が行狀なりとて、苔蘚の間に、文字纔に殘りて侍る。誠に今の人の祖先を問ふに、曾高の名をだにも知らず、遠きを追ふの心なきこそ、かなしき事なれ。諸州諸郡をありき見侍りしに、寺院佛閣は、いかなる小民村里にもあまた侍れども、庠序學黌とては名をだにも聞かず、まして むかしの礎もなし。延天の比までは、都には大學を建て、國郡には國學を立て、二仲の釋奠行はれしに、いつの時にかかく捨れけるぞや。足利の學校さへ、近比まで誰にても得業の人居侍りしに、此四五十年より、僧法師の住所のやうになりぬ。浮圖五輪のために石を刻まんよりは、螭首龜趺を建てよかし、蕃神黠胡の爲に堂を造らむよりは、精

方輿―土地、地は方にして物を載するの義
浮圖―塔
退凡下乘―卒塔婆也、徒然草に「外なるは下乘、内なるは退凡」
曾高―曾祖父、高祖父
庠序學黌―共に學校の稱
延天―延喜天曆、醍醐村上兩皇の年號
二仲―春秋二期の中日
螭首龜趺―支那の古制による墓碑をいふ

腹ふくるゝ云々―徒然草「ものしき事いはねば腹ふくるゝわざなれば」

輪子のせい―輪子は絹布の名、せいは精巧の略稱か

伏波―馬援也、南土の薏苡を一車に載せて還る事後漢書馬援傳に見ゆ

苞苴―いへづと、みやげ

廬家塾をせよかしと、心あらん人の腹ふくるゝほどに思へども、いひ入るべき穴をはらずや。

一地衆生承顧恩　温公曾比藥師尊　若磨此石作鍼去
甘草人參不足言

## 庄野

石藥師の西、龜山の東に、庄野あり。此所の民家に、火米をちいさき俵に入れて、毎戸ならべておく。其俵の大さこぶしの如く、又は槌の如くなるもあり。輪子のせいに包み、縛へてあるを、旅人買取りて、家づとにすといふ。先年余が僮僕、馬のあとにかけて來りしを見て、昔の伏波は薏苡を一車にのせ、伯顔は梅花を檐頭に挿みしに、今此小俵あまた取來るこそ、ほゝゑむばかりをかしくて、彼法道仙人越智の大德が俵米を飛せし事も、思ひ出られてありしが、今又都にのぼり、苞苴の物とし　我をまつ小兒の歡笑を見むとのみにて行きぬ。

唐人詩句漢人書　記得燒耕火米畬　可慰孩提求口實

鈴鹿御前―坂上田村麿勅を奉じて鈴鹿の山の鬼女を征し囚としが後山に逃げ入りしを田村麿追到して夫婦になる、この鬼女即ち鈴鹿姫なりとの俗傳

白波―河の波に盜賊の意を兼ぬ

終朝咀嚼齒牙餘

## 鈴鹿

關地藏より鈴鹿の坂の下まで、あまたの河あり、八十瀬の河とは是なり。爰にまします明神は、天武天皇の行逢ひたまへる老人にて侍らん。世の婦人小子の口遊める鈴鹿御前の物語とやらむは、おぼつかなし。此所にありし鬼を、苅田丸が討從へたりといふ、是も又おぼつかなし。むかしより山賊ある所と言ひ傳ふれば、それを鬼とは言ふにや。伊勢三郎も鈴鹿の山賊なりけるとなむ。

九折盤紆鈴鹿坂　行人征馬恐蹉跎　秖今四海恩風遍
八十瀬河無白波

## 土山

土山といへど山はなし。鈴鹿より西の坂を下りて、二里ばかりにあり。釋詁毛傳などに山を土の山とよみ、土山をいしの山とよむ事を思ひて、

崔嵬―山路の險しき形容

學而の篇―論語の最初の篇

行李東西久旅居　風光日夜憶鄕閭　梅花繫馬土山上
知是崔嵬知是岨

## 水口

去歲八月四日、大相國二條の御所を出御ありて、翌日此所に著かせ給ふ。其日より打續き雨ふりければ、三日逗留ましゝけるに、夜更るまで御前に余も侍りし時、學而の篇をよめと仰せければ、跪づき開きはんべりしに、「能竭其力。能致其身」とある所を、みづから御讀ありて、能といふ字に心をつくべきなり、なほざりにては忠孝たち難し、親には力をつくし、君には身をいたすといつぱ、いづれかまされるといふ評論あるべしと仰せけるに、余もかの趙苞が故事を引て答へ奉りしが、只今忘れ難くて、すゞろに袂をしぼり侍る。

愛生從子親　義立自君臣　侍讀古年雨　淚痕今日人

## 草津

方壺―海中にある仙山、列子に見ゆ

蒙塵―天子戰亂を避けて京師の外に出で給ふこと

内相―惠美押勝

大弟―大海人皇子、後に天武天皇

石部より草津にいたりしに、馬につきたる奴隸共の語りしは、近江國は本より相撲の者多く有りて、石部、草津、出合ひ相撲をとるに、石部勝つ時もあり、草津勝つ時もありといふを聞きて、事のおこりを人の尋ねしかば、當麻の蹶速、野見宿禰より初めて、那都羅、善雄力を比べ、俣野、河津に至るまで、其名聞え侍る、年中行事にも、相撲の節會とて、内裏にも行はせ給ふなど、やう〳〵物語りし行くほどに、勢田になりぬ。相撲の詩を作れと、人のいひければ、

氣似烏兎出野堺　力如鼇背戴方壺
聞否少年相撲徒　龍紋絕膜今猶古

## 勢田

勢田は古戰場なり。承久の役には、皇輿の敗績して、外に蒙塵ありし事を悲しみ、孝謙の御宇には、内相が奔らんとするに橋絕えて、高島にて亡びし事を喜ぶ。是のみならず日本紀を見れば、天智帝崩御あらむとする時、大弟は沙門とならせ給ひて、吉野山に入らせ給ふ。大友皇子その時は太政大臣にてありしが、天智の讓をうけられしに、大弟吉

野より潛に出でて、和州、伊賀、伊勢を過ぎ、濃州不破關にて尾州の兵を召集め、皇子の兵と戰勝ちて、近江の瀨田まで攻のぼり給ふ。皇子みづから此橋の邊に陣をとつて合戰ありしが、大弟の兵勝つに乘りて、皇子敗北して、竹中に入つて伯林雉經の跡をふめり。大弟は淸見原天皇是なり。壬申の亂とは此時の事をいふなり。懷風藻は勝寶年中に編集せしが、其中に、「大友皇子は天智帝の長子なり。壬申の役に、天命遂げずして薨じぬ」といへり。舍人親王は、皇考王父のために文を婉して、南董が筆をいかど思ひけん。懷風藻は、親王の時を去る事遠からざれば、其事の實を隱さるゝにや。近比大明に、燕王が建文を殺して、白帽子を戴けるも、異域同日の物語なるべし。

伯林雉經―伯林は晉太子申生をいふ、雉經は首をくくりて死すること

南董が筆―董孤が筆と同義なるべし、歷史を掌るものゝ直筆して忌み憚るなきをいふ

勝敗興亡憂更憂　千年人事落棊楸
都入勢田橋下流

## 比叡山

湖水の邊より比叡山を見て、いつぞや人の和韻をし侍る詩を、爰にしるして云ふ、「興公昔作四明遊、能使遺文後世留、杉洞窟深蛇蟒動。竹生島泛浮萍幽。三朝烟草君王殿、雲湖影日悠々」一一、公が天台山の賦の詩を作りし時は、余が年二十八にてやありけん。久しく公務の暇なくて、吟咏する事もなし。古人三日の間にも舌本こはしとこそ言ふに、まして余が筆硯塵積りて年經ぬれば、口中のむばら、いかでか詞林にまじはらむ。しかれども江山のたすけもあれかしと思ふ心のゆくにまかせて、紀行の詩、今日までにて若干首に成りぬ。

舌本こはし―したの根のこはばるをいふ、世說文學下篇に「口日不讀道德經便覺舌本間強」

むばら―うばら、荊棘

江山のたすけ―自然の景が咏懷を誘ふをいふ

東西南北人―四方周遊の人

夜風波內相舟。只有
用ひ、三四は登覽の景

艮嶽從來守紫宸　先王立作國家鎭　雲波五色三津浦
星斗千年七社神　湖水朦朧空得月　山櫻寂寞自過春
好風美景非無意　吾亦東西南北人

## 大津

大津をすぎて相坂にいたり、肩輿より淸水の流を見て、

九陌大津隈　忽々繁往來　一亭群馬聚　十里遠帆開
鮒上任公釣　鱠傳張翰盃　潺湲相坂水　烏帽掃塵埃

張翰―晉の吳縣の人、洛に在りて秋風に故鄕の鱸魚膾を思ひ家に歸りし有名の人

元和二年十一月日

暮雪浮子



# 野ざらし紀行

松尾芭蕉

千里に旅立ちて路粮をつゝまず、三更月下無何に入るといひけん、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を立ちいづる程、風の聲そどろ寒げなり。

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせ却りて江戸をさす故郷

関越ゆる日は、雨降りて山みな雲に隠れたり。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

何某千里といひけるは、此度路の助となりて、萬いたはり心をつくし侍る。常に莫逆の交深く　朋友信ある哉、此人。

深川や芭蕉を富士に預け行く　千里

路粮を云々―江湖風月集三山優遷聞和尚の偈「路不資粮笑復笑、三更月下入無何」江上の破屋―深川芭蕉庵　秋十とせ―賈島の詩「客舎幷州已十霜、歸心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、却望幷州是故郷」莫逆の交―心持のしつくりと合ふつき合ひ

富士川の邊を行くに、三つばかりなる捨子の哀げに泣くあり。此川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨置きけん、小萩がもとの秋の風、今宵や散るらん、明日やしをれんと、袂より喰ものなげて通るに、

猿を聞く人すて子に秋の風いかに

いかにぞや　汝父ににくまれたるか、母にうとまれたるか。父は汝を憎むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。只是天にして、汝が性のつたなきを泣け。

大井川越ゆる日は、終日雨降りければ、

秋の日の雨江戸に指折らん大井川

千里

馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり

二十日あまりの月かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬上に鞭をたれて、數里いまだ雞鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りて忽ち驚く。

馬に寐て殘夢月遠し茶のけむり

松葉屋風呂が伊勢に在りけるを、時は指折れて、十日ばかり足をとどめ侍る。時雨に打たれて、

小萩がもと―源氏物語桐壺「宮城野の露吹きわびぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」

性のつたなき―うまれつきの不運

杜牧が早行―「垂鞭信馬行、數里未雞鳴、林下殘夢醒、霜凝孤廟鈴、月照遠山明」（傳灯伝燈録）



俳諧、禮に、猶をかけて、手に十八の珠を撫ぶ。世に慎て暫あり、偏に慎て暫なし。其仏にあらずといへども、浮屠の屬にたぐへて、神前に入る事をゆるさず。暮れて外宮に詣で侍りけるに、一の華表の陰ほのぐらく、御燈處々に見えて、また上もなき峯の松風、身にしむばかり、深き心を起して、

三十日月なし千とせの杉を抱く嵐

西行谷の麓に流あり、女どもの手洗ふを見るに、

手洗ふ女西行ならば歌よまんを

其日のかへるさ、或茶店に立寄りけるに、てふといひける女、あが名に發句せよと云うて、白き絹出しけるに、書付け侍る。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

閑人の茅舍をとひて、

蔦植ゑて竹四五本のあらしかな

長月の初、古郷に歸りて、北堂の萱草も霜枯果て、今は跡だになし。何事も昔にかはりて、はらからの髮白く、眉皺よりて、只命ありてとのみ言うて、詞はなきに、兄の守袋

浮屠―塔婆の梵語。特に仏舎利の意に用ふ。一本浮屠の上に「髮なきものは」とあり

西行ならば云々―西行江口の遊女との唱和をいふ

古郷―伊賀

北堂の萱草―母も死して亡きをいふ。詩經「焉

をほどきて、母の白髮拜めよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと、暫く泣きて、

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

大和國に行脚して、葛城の郡竹の内といふ所は、彼の千里が舊里なれば、日頃とどまりて足を休む。藪より奥に家あり。

綿弓や琵琶に慰む竹の奥

二上山當麻寺に詣で、庭上の松を見るに　凡そ千年もへたるならん、大さ牛をかくすともいふべけん。かれ非情と雖も、佛緣にひかれて、斧斤の罪をまぬかれたるぞ、幸にして尊し。

僧あさがほいく死にかへる法の松

獨よし野の奥にたどりけるに、誠に山深く、白雲峯にかさなり、烟雨谷を埋んで、山賤の家處々にちひさく、西に木を伐る音東に響き、院々の鐘の聲は、心の底に答ふ。昔より此山に入つて、世を忘れたる人の多くは、詩にのがれ歌にかくる。いでや唐土の廬山といはんも、亦たゞならじやゝ。故郷に一夜をかりて、

牛をかくす―大木の形容　斧斤の罪―伐採の厄

廬山―白鶴天の草庵を營みて住みし有名の地

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方、二丁ばかり分け入る程、聖人の通ふ道のみはつかに有て、さかしき谷を隔したる、いと尊し。彼とくゝの清水は、むかしに變らずと見えて、今もとくゝと雫落ちける。

露とくゝ試みに浮世すゝがばや

若是扶桑に伯夷あらば、必ず口を嗽がん。もし許山に告げば、耳を洗はん。

山を登り、坂を下るに、秋の日既に斜になれば、名ある所々見殘して、先づ後醍醐帝の御廟を拜む。

御廟年を經て忍ぶは何をしのぶ草

大和より山城を經て、近江路に入つて美濃に至る。今須山中を過ぎて、いにしへ常盤の塚あり。伊勢の守武がいひける、義朝殿に似たる秋の風とは、何れの處か似たりけん。

我もまた、

義朝のこゝろに似たり秋の風

不破、

廬山―白鶴天の草庵を營みて住みし有名の地

聖人―白居易「廬山草堂記」より　陽院などいへる黒僧の寺ありとぞ」

とくゝの清水―西行「とくとくと落つる岩間の苔清水くみはすれども飽もなき住吉かな」　扶桑―日本

義朝殿に云々―守武千句に「月見てや常盤の里へ歸るちん」といふ前句に「義朝殿に似たる秋風」と附けたるをいふ

秋風や蚊もはたけも不破の關

大垣に泊りける夜は、木因が家をあるじとす。武藏野を出づる時、野ざらしを心に思ひて旅立ちければ、

死にもせぬ旅寐の果よ秋のくれ

桑名本當寺にて、

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

草の枕に寐あきて、まだほのぐらき中に、濱のかたに出でて、

あけぼのや白うを白き事一寸

熱田に詣づ。社頭大いに破れ、築地は倒れて草村に隱る。かしこに繩をはりて、小社の跡をしるし、爰に石をすゑて、其神と名のる。蕉しのぶ心のまゝに生ひたるぞ、なかなかに日出度よりも、心とまりける。

しのぶさへ枯れて餅かふやどり哉

名護屋に入る。道の程諷吟す。

狂句　風の身は竹齋に似たる哉

一寸―抄に「按ずるに杜子美白小詩に天然二寸魚、されば一寸は多なるべし」なか〳〵に云々―弼美を極めしより、愛ろこの荒涼の景に心とまれり

竹齋―至て貧しく狂歌を樂しみたる醫師といふ

狂句風の―抄に「狂句は字治りにゞ、といふに依れば、これにて一句

市人よ云々―笠はかぶり蓋、傘はさしがさ、「笈日記に掬月亭と蕉翁記に、市人にいで是うちん登の雪、蓑に酒の戸たゝく鞭の音、かれ編、掬月、と脇あり」と抄に見ゆ

うしの年―貞享二丑年

二月堂―四組堂院と號し、本尊は觀音にて若狹の井あり、若狹の國遠敷明神に寒る水を汲む、一年早して水なく、荒僧井のは草まくら犬もしぐるゝか夜の聲

雪見にありきて、

市人よ此笠うらう雪の傘

旅人を見て、

馬をさへながむる雪のあした哉

海邊に日を暮して、

海くれて鴨の聲ほのかに白し

爰にわらぢを解き、かしこに杖を捨て、旅寐ながらに年の暮ければ、

としくれぬ笠著て草鞋はきながら

といひ〳〵も、山家にとしを越して、

誰が聟ぞ齒朶に餅おふうしの年

奈良に出づる道のほど、

春なれや名もなき山のうすがすみ

二月堂に籠りて、

水取や氷の僧のくつのおと

京に登りて、三井秋風が鳴瀧の山家をとふ。

梅林

梅白しきのふや鶴をぬすまれし

樫の木の花にかまはぬすがた哉

伏見西岸寺任口上人に逢ひて、

我衣にふしみの桃のしづくせよ

大津に至る道山路を越えて、

山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

辛崎の松は花よりおぼろにて

昔の休らひとて、旅店に腰をかけて、

躑躅生ひてその陰に干鮭さく女

吟行

とりにて若狭に向ひ新りしに水田でし故郷により、翌年二月十二日の夜水取の式ありといふ

氷の僧―一本「こもりの僧」

鶴をぬすまれし―休和尚の梅園鶴子の故事による





蒙島に花見顔なる雲かな

水口にて、二十年を經て故人にあふ。

命ふたつ中に生たるさくらかな

伊豆の國蛭ケ小島の桑門、是も去年の秋より行脚しけるに、我名を聞きて草の枕の道連にもと、尾張の國より跡をしたひ來りければ、

いざともに穂麥くらはん草枕

此僧われに告げて曰く、圓覺寺の大顛和尚、ことし睦月のはじめ、遷化したまふよし、まことや夢のごとちせらるるに、先づ道より其角がもとへ申しつかはしける。

梅戀ひて卯の花拜む涙かな

杜國におくる

白芥子にはねもぐ蝶の形見哉

二たび桐葉子がもとに在て、今やあづまに下らんとするに、

牡丹蘂深く分け出る蜂の名殘哉

甲斐の山中に立よりて、

圓覺寺―鎌倉、大顛和尚は俳名を幻住といひ、其角が師とする所といふ

海戀ひて云々―大顛師の遷化は一月にて芭蕉が之を聞き得たるは四月なれば此句あり

ゆく駒の麥になぐさむやどり哉
卯月の末庵にかへり、旅のつかれをはらすほどに、
夏衣いまだ虱をとりつくさず



# おくの細道

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり、予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取る物手につかず、股引の破をつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかかりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅にうつるに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸置き、彌生も末の七日、明ほのの空朧々として、月は有明にて光を

月日は云々―李白、春夜宴桃李園序「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客」
江上の破屋―江戸の芭蕉庵
道祖神―みちを守る神
三里―膝の側なる灸穴の稱
面八句―連歌百韻の懷紙の第一面の八句の稱
彌生も末の七日

—三月二十七日　いつかは—いつかは再び眺むべき

吳天云々—三體詩「五天到日頭應白」の句に出でたるべく、吳天冥地と相對したる用例もあれど、こゝは五天の誤か

身すがら—身一つ、著のみ著のまゝにさりがたきはなむけ—餞別物　わりなけれ—つまらぬ話なれ　曾良—信州諏訪の人、芭蕉が門人　無戸室に入て云云—日本紀神代

室は出入口なき家　詠習し—室の八島のけぶりと歌に詠み習はし　桑門—沙門、僧　剛毅云々—論語「剛毅木訥近仁」　此御光—德川家康公の威光　八荒—八方荒遠の地

さまれるものから、不二の峯かすかに見えて、上野谷中の花の槍、又いつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、船に乘りて送る。千住と云ふ所にて船をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝぐ。

行春や鳥啼き魚の目は泪

是を矢立の初として、行く道なほすゝまず。人々は途中に立ちならびて、後かげの見ゆる迄はと見送るなるべし。今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮のうらみを重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ、若し生きて歸らばと、定めなき頼みの末をかけ、其日漸く早加といふ宿にたどり著きにけり。痩骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴かた雨具墨筆のたぐひ、あるはさりがたきはなむけなどしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

室の八島に詣づ。同行曾良が曰く、此神は木の花さくや姫の神と申して、富士一體なり。無戸室に入りて燒給ふ誓のみ中に、火々出見尊生れ給ひしより、室の八島と申す。又煙を詠習し侍るもこの謂なり。はたこのしろといふ魚を禁ず。緣起の旨世に傳ふ事も侍るなり。

三十日、日光山の麓に泊る。あるじの云ひけるやう、我名を佛五左衞門と云ふ、萬正直を旨とする故に人かくは申し侍るまゝ、一夜の草の枕も打解けて休み給へと云ふ。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなすことに心をとどめて見るに、唯無智無分別にして正直偏固の者也。剛毅木訥仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此御山を二荒山と書きしを、空海大師開基のとき、日光と改め給ふ。千歲未來をさとり給ふにや、今此御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵のすみか穩かなり。猶憚多くて筆を擱きぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

黑髮山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

剃り捨てゝ黑髮山に衣がへ　曾良

曾良は河合氏にして總五郎と云へり。芭蕉の下葉の軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松しま象潟の眺共にせんことを悅び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立

つ曉髪を剃て黒染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍て黒髪山の句有り。衣更の二字力ありて聞ゆ。

二十餘丁山を登りて瀧有り、岩洞の頂より飛流して、百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入りて瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申し傳へ侍るなり。

暫時は瀧にこもるや夏のはじめ

那須の黒羽と云ふ所に知る人あれば、是より野越にかゝりて、直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行くに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこに歎きよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず、いかゞすべきや、されども此野は縱横にわかれてうね〳〵しき、旅人の道ふみたがへんあやしう侍れば、此馬のとゞまるところにて馬を返し給へと、かし侍りぬ。ちひさきものふたり馬の跡したひて走る。獨は小姫にて、名をかさねと云ふ。聞きなれぬ名のあやしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし

頓て人里に至れば、あたひを鞍壺に結付けて馬をかへしぬ。黒羽の館代淨坊寺何がしの方に音信る。思ひかけぬあるじの悅び、日夜語りつゞけて、其弟桃翠などいふが、朝夕勤めとぶらひ、自の家にも伴ひて、親屬のかたにもまねかれ、日をふるまゝに、一日郊外に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて、玉藻の前の古墳をとふ。夫より八幡宮に詣で、興市が扇の的を射し時、別しては我國氏神正八幡とちかひしも、此神社にて待ると聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。暮るれば桃翠宅に歸る。

修驗光明寺と云ふ有り、そこにまねかれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途かな

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚の山居の跡あり。

堅横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と、松の炭して岩に書き付け侍りといつぞや聞え給ふ。其跡見んと、雲岸寺に杖を曳けば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人多く道のほど打さわぎて、おぼえず彼麓に至る。山は奥あるけしきにて、谷道遙かに、松杉黑く、苔したゝりて、卯月の天今なほ寒し。十景盡る所、橋をわたりて山門に入る。さてかの跡はいづくの程にやと、後の山によぢのぼれば、

夏―結夏の略、結制又は安居とをいひ、舊四月十五日より九十日間僧の籠り居て修行すること

いかゞすべきや―やゝためらふ語吻か、以下返し玉へまで野夫の語

うね〳〵しき―道のうね〳〵と曲りたること、那須野の道多きは古來有名也、一本「うひ〳〵しき」とあり、下に續けてなれぬ旅人の意に解す

獨―一人

玉藻の前―和漢三才圖會に詳也

修驗―山伏

足駄を拜む―行者堂は役小角を祀る所、小角の像は必ず木履を帶けたる形に作る也

佛頂和尚―もと東那深川長慶寺に住し、後此雲山寺に隱棲せる禪僧

おくある―奥深き

石上の小庵、岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室をみるがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に残し侍りし。是より殺生石に行く。館代より馬にておくらる。此口付のをとこ、短冊を得させよと乞ふ。やさしき事を望みはんべるものかなと、

野を横に馬ひきむけよ郭公

殺生石は温泉のいづる山かげにあり、石の毒氣いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ、眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水ながるゝの柳は、蘆野の里にありて、田の畔に残る。此所の郡守戸部某の、此柳見せばやなど折々にのたまひ聞え給ふを、いづくの程にやと思ひしを、今日此柳のかげにこそ立ちより侍れ。

田一枚植ゑて立去る柳かな

心許なき日かず重なるまゝに、白川の關にかゝりて、旅心定りぬ。いかで都へと、便求めしもことわりなり。中にも此關は三關の一にして、風騒の人心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣装を改めし事など、清輔の筆にもと

妙禪師云々―菅弧抄に「妙禪寺は中華宋朝の僧にて、高峯と云ふ山に處り、生涯戸を閉ぢて出でず　法雲は法華の師なるべし、石室に籠り、馬糞を焚き、芋を煮て食ひし僧云々」

殺生石―玉藻前となりし狐義明に射殺され、後百年餘にして其靈化してなりたりといふ石、其石に觸れば生物皆死す、蓋し硫石の類なるべしといふ

清水ながるゝの柳―西行「濱の邊に清水流るゝ柳かげ暫しとてこそ立ちとまりつれ」いかで都へと―拾遺集「便あら

かさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」

十編菅菰―方角抄「みちのくの十ふの菅菰七ふには君をしなして三ふに我れん」

壺碑―一本、下に「市川村多賀城にあり」の句あり

數里―里數の誤か

猶―惠美の朝臣名は朝獦（アサカリ）

師堂天神の御社など拜みて、其日はくれぬ。猶松島鹽釜の所々畫に書きて送る。且紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。されば、こそ風流のしれもの、爰に至りて其實を顯す。

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行けば、おくの細道の山際に十編の菅あり。今も年々十編菅菰を調じて國守に獻ずと云へり。

壺碑

つぼの石ぶみは高さ六尺餘、横三尺計歟。苔を穿ちて文字幽也。四維國界之數里をしるす。「此城神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣獦修造也十二月朔日」と有り、聖武天皇の御時に當れり。むかしよりよみ置ける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至つて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一德存命の悅び、羇旅の勞をわすれて、泪落つるばかりなり。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて、末松山といふ。松のあひあ



欠

はねをかはし云云―長恨歌「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」つなでかなしも―實朝「世の中は常にもがもなぎさこぐあまの小舟の綱手悲しも」

九仞―仞は八尺、甚だ高き形容あちた―あちたか

和泉三郎―名は忠衡、秀衡の三男にて、よく父の遺命を守り、義經に從ひて高館に戰死す

誠に云々―六韜「勵道可操義名亦從之」ことふりにたれど―事新しくいふ迄もなき事なれど扶桑―日本

ひ皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくの如きと悲しさも增りて、鹽がまの浦に入相のかねを聞く。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に、籬が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて、肴わかつ聲々に、つなでかなしもとよみけん心も知られて、いと哀なり。其夜目盲法師の琵琶をならして、奥淨瑠璃と云ふものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕ちかうかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。早朝鹽釜の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仞に重り、朝日あけの玉がきをかがやかす。かゝる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ我國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寶燈有り、かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進と有り。五百年來の佛、今目の前にうかびて、そゞろに珍らし。渠は勇義忠孝の士也、佳命今に至りてしたはずといふ事なし。誠に人能く道を勤め義を守るべし、名もまた是にしたがふと云へり。日既に午にちかし、船をかりて松島にわたる。其間二里餘、雄島の磯につく。

抑ことふりにたれど、松島は扶桑一の好風にして、凡洞庭西湖に恥ぢず、東南より海を入れて、江の中三里浙江の潮をたゝふ。島々の數をつくして、欹つものは天を指し、ふすものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから矯たるがごとし。其氣色窅然として美人の顏を粧ふ。ら

はやぶる神のむかし、大山ずみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきて、海に出づる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有り。將松の木蔭に世をいとふ人も稀に見え侍りて、落穗松笠など打ちけぶりたる草の庵閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく、立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求れば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり。原安適松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解いてこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり。

浙江―支那錢塘に在り、水勢曲折して湖頭に激起するを以て此名ありといふ、こゝは比喩として用ひたる事元より也

窅然―深遠なる貌、美人の形容

大山ずみ―正しくは大山つみ、大山祇神とて山を掌る神の名

江上―江のほとり

見佛聖―元享釋書「見佛居=奥州松島=(中略)精勤苦練一十二年、其間誦=法華=萬六萬部=、其後不計數、躋顯=靈鷲=云々」
雉兎蒭蕘―獵人や草刈り木こり、孟子「文王之囿方七十里、芻蕘者往焉、雉兎者往焉」
こがね花咲く―萬葉集、大伴家持「すめらぎの御代栄えんとあづまなるみちのく山にこがね花咲く」
まどしき―貧しき
三代―清衡、基衡、秀衡
金鶏山―秀衡建立の伽藍の地
義臣―鎌倉より義經追伐の際、秀衡の遺子國衡、康衡、忠衡のよく父の遺命を奉じ難に殉じたるをいふ
國破れて―杜甫春望詩「國破山河在、城春草木深」
兼房―増尾十郎といふ、義經記に「十郎櫛頭兼房白き直垂に褐の袴着て白髪まじりのもとゞり引き颯し」云々
封人―境を守る役人
よしなき―つまらぬ

十一日、瑞岩寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。其後雲居禪師の德化に依て、七堂甍改りて金壁莊嚴光を輝し、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

十二日、平和泉を心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兎蒭蕘の往きかふ道、そこともわかず、終に道ふみたがへて石の巻といふ濱に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金花山、海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ちつゞけたり。思ひかけず斯る所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸うまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又しらぬ道まどひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まゝの萱原などよそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふところに一宿して、平泉に至る。其間廿餘里程とおぼゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野に成りて、金鶏山のみ形を殘す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。康衡が舊跡は衣ヶ關を隔てゝ、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。

國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時の過るまで泪を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

兼ねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢と成るべきを、四面新に圍んで、甍を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨のふり殘してや光堂

南部道遙にみやりて、岩手の里に泊る。小黑崎みつの小島を過ぎて、なるこの湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす。此道旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸うとして關をこす。大山に登つて日既に暮れければ、封人の家を見かけて舍をもとむ。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿するまくらもと

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を賴みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を賴み侍れば、究竟の若者、反脇指を

雲端につちふる―杜甫「已入風磯雲端」旋風などの土を巻上げて降すをいふ

不用―不用心、山賊などの害をいふ

ねまる―寢はちぼふ、但此國にてはすわる義といふ

かひや―諸説あれど、こゝは飼屋にて、蠶室の義なるべしといふ。萬葉「朝霞かひやが下になく蛙忍びつゝありとつげんともがな」

まゆはき―草の花（うまごやし）と女の化粧道具の名とを匂ぬ

よこたへ、樫の杖を携へて、我々が先に立ちて行く。けふこそ必ず危き目にもあふべき日なれと、辛き思をなして後について行く。あるじの言にたがはず、高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて、夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分け〳〵、水をわたり、岩に躓いて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう、此道必ず不用の事有り、恙なうおくりまゐらせて仕合したりとよろこびてわかれぬ。跡に聞きてさへ、胸とどろくのみなり。

尾花澤にて清風と云ふ者を尋ぬ。かれは富める者なれども、志いやしからず、都にも折々かよひて、流石に旅の情をも知りたれば、日比とどめて、長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまるなり

這出でよかひやが下の蟾の聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがたかな

山形領に立石寺と云ふ山寺あり、慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地也、一見すべきよし、人々のすゝむるによりて、尾花澤よりとつてかへし、其間七里ばかり也。日いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年古り土石老いて、苔滑に、岩上の院々扉を閉ぢて、物音きこえず、岸をめぐり、岩を這うて、佛閣を拜し、佳景寂莫として、心すみ行くのみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

最上川をのらんと、大石田と云ふ所に日和を待つ。爰は古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔をしたひ、蘆角一聲の心を和げ、此道にさぐり足して、新古ふた道にふみ迷ふと雖も、道しるべする人しなければと、わりなき一卷殘しぬ。このたびの風流爰に至れり。

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。ごてん、はやぶさなど云ふおそろしき難所あり、板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをや、いな船とはいふならし。白糸の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人堂岸に臨みて立ち、水みなぎりて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黑山に登る。圖司左吉と云ふ者を尋ねて、別當代會覺阿闍利に謁す。南谷の

のらんと―舟に蘆角一聲―古風の俳諧をたとふ

いな船―古今集「最上川のぼれば下るいな船のいなにはあらず此月ばかり」

あるじ―饗應

月山、湯殿―月山は頂上にて、西の中腹庄内の方なるをば羽黒山、東の中腹最上の方なるを湯殿山といふ

木綿じめ―紙撚にて作りたる修驗袈裟

龍泉に云々―史記註の晉大康地理記に「汝南西平縣有龍淵水可以用淬刀劍」

別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。四日、本坊におひて俳諧興行。

有りがたや雪をかをらす南谷

五日、權現に詣づ。當山開闢能除大師はいづれの代の人と云ふ事をしらず。延喜式に羽州里山の神社と有り。書寫黑の字を里山になせるにや。羽州里山を中略して羽黑山と云ふにや。出羽といへるは、鳥の毛羽を此國の貢に獻ると風土記に侍るとやらん。月山、湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯かゝげそひて、僧坊棟をならべ修驗行法を勵し、靈山靈地の驗効人貴び且恐る。繁榮長にして、めでたき御山と謂ひつべし。

八日、月山にのぼる。木綿じめ身に引かけ、寶冠に頭を包み、强力と云ふ者に導かれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏んでのぼる事八里、更に日月行道の雲關に入るかとあやしまれ、息たえ身こゞえて、頂上に臻れば、日沒ちて月顯る。笹を鋪き篠を枕として、臥して明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば、湯殿山に下る。谷の傍に鍛冶小屋と云ふ有り。此國の鍛冶、靈水を選んで爰に潔齋して劍を打つ。終に月山と銘を切て世に賞せらる。彼龍泉に刃を淬すとかや、干將莫耶のむかしをしたふ、道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰をかけて、しばしやすらふほどに、三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積む雪の下に埋れて、春を忘れぬ遲ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかをるがごとし。行尊僧正の歌の哀も、爰に思ひ出で、まさりて覺ゆ。惣て此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとゞめて記さず。坊に歸れば、阿闍利の需に依て、三山順禮の句々短冊に書く。

干將莫耶―古への二名劍

歌の哀―金葉集「行尊大峯にて思ひかけず櫻の咲きたりけるを見てよめる、もろ共に哀と思へ山櫻花より外に知る人もなし」

錢ふむ―發孤抄「此山中の法にて地へ落ちたるものを取る事能はず、故に道者の投擲せし金銀は小石の如く錢は土砂にひとし、人其上を往來す」

涼しさやほの三日月の羽黑山
雲の峯いくつ崩れて月の山
語られぬ湯殿にぬらす袂かな
湯殿山錢ふむ道のなみだかな

羽黑山を立て、鶴ヶ岡の城下長山氏重行と云ふものゝふの家にむかへられて、俳諧一卷有り。左吉も共に送りぬ。川舟に乘つて酒田の湊に下る。淵庵不玉と云ふ醫師の許に宿とす。

あつみ山や吹浦かけてゆふすゞみ

曾良

方寸を責め―管弧抄に方寸は出地などはかる語、責むは爭ふ意にて、はるばるの旅路もはや、行先象潟ばかりに成りたりとの意と解せり

闇中に莫作―暮、紫の誤か、くらがりにてさぐり知る意

雨も又奇云々―東坡西湖の詩「水光欲滟晴偏好、山色空濛雨又奇」の句

花の上こぐ―西行「きさがたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり船」

西施―支那の古美人、東坡西湖の詩下の二句に「欲把西湖比西施、淡粧濃抹兩相宜」はぎぬれて―脛濡れてなるべし

一ぶり―一鞭、兩越の境、越後に屬し高田侯の封

六日云々―七月七日七夕の前夜の感じ

寐たるにの下―一本「一間を隔てて表の方に若き女」とあり

暑き日を海にいれたり最上川

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責め、酒田の湊より東北の方、山を越え磯を傳ひ、いさごをふみて、其際十里、日影やゝかたぶく比、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蜑の苫屋に膝をいれて、雨晴るゝを待つ。其朝天能く霽れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟をうかぶ。先づ能因島に舟を寄せて三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干滿珠寺と云ふ。此處に行幸ありし事いまだ聞ず。いかなる事にや。此寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其陰うつりて江にあり。西はむやゝ〳〵の關路をかぎり、東に堤を築いて、秋田に通ふ道、遙に海北にかまへて、浪打入る所を汐こしと云ふ。江の縱横一里ばかり、俤松島にかよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭禮　曾良

象潟や料理何くふ神まつり　美濃の國の商人　低耳

蜑の家や戸板を敷きて夕涼

岩上に鵰鳩の巣を見る　曾良

波こえぬ契ありてやみさごの巣

酒田の餘波日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞く。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國一ぶりの關に到る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜にはあらず

荒海や佐渡によこたふ天の川

今日は親しらず子しらず、犬もとり、駒返など云ふ北國一の難所を越えて、つかれ侍れば、枕引きよせて寐たるに、西の方に若き女の聲二人ばかりときこゆ、年老たるをのこの聲も交り物語するをきけば、越後國新潟と云ふ所の遊女なりし。伊勢參宮すると

て、此關迄をのこの送りて、あすは古郷へかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやる也。白波のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定なき契、日々の業因いかにつたなしと、物いふをきくまゝ寐入りて、あした旅立つに、我々にむかひて、行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍らん、衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結緣せさせ給へと、泪を落す。不便の事には侍れども、我々は所々にてとどまる方おほし、只人の行くにまかせて行くべし、神明の加護かならず恙なかるべしと云捨てて出でつゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

白波の云々―古今「白なみのよする汀に世をすぐすあまの子あれば宿も定めず」あまの子は遊女の稱、子より此と接して世のあさましうと續けたる也　衣の上の云々―芭蕉等が僧形なるを見て依頼也

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば、書きとゞめ侍る。くろべ、四十八ヶ瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、那古と云ふ浦に出づ。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと、人に尋ぬれば、是より五里、磯傳ひしてむかふの山陰にいり、蜑の苫ぶき幽なれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじと、いひおどされてかの國に入る。

わせの香や分入る右は有磯海

くろべ―黒部川、越中三日市と魚津との間を流る　擔籠の藤浪―擔籠は多古、多胡とも書く、名所也、拾遺集、人丸「多胡のうらの底さし匂ふ藤波をかざして行かん人見ぬ人のため」

すける名―風流人といふ名

實盛―又眞盛とも書く、篠原の合戰に討死したる齋藤別當

卯の花山、くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日也。爰に大阪よりかよふ商人何某といふ者あり、それが旅宿を共にす。一笑と云ふものは、此道にすける名のほのぐゝ聞えて、世に知る人侍りしに、去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに、

塚も動け我泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中吟

あかゝと月は難面もあきの風

小松と云ふ所にて

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

此所の太田神社に詣づ。實盛が甲錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝朝臣より賜はらせ給ふとかや。げにも平士のものにあらず、目庇より吹返しまで、菊から草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打たり。實盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて此社にこめられ侍るよし。樋口の次郎が使せし事ども、まのあたり緣起にみえたり。

むざんやな甲の下のきりぎす

山中の溫泉に行くほど、白根が嶽跡に見なしてあゆむ。左の山際に觀音堂あり、花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付け給ふとや。那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さまざまに、古松植ゑならべて、萱ふきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風

溫泉に浴す。其功有馬につぐと云ふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ

あるじとするものは衆之助とていまだ小童也。かれが父俳諧を好み、洛の貞室若輩のむかし、爰に來りし比、風雅に辱しめられて、洛に歸りて貞德の門人となつて世に知らる。功名の後、此一村判詞の料を請ずと云ふ。今更むかし語りとはなりぬ。

曾良は腹を病みて、伊勢の國長島と云ふ所にゆかりあれば、先立て行くに、

ゆきくてたふれ伏すとも萩の原　曾良

と書置きたり。行くものの悲しみ、殘るもののうらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふが如し。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此寺にとまりて、

終宵秋風聞くやうらの山

と殘す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞きて衆寮に臥せば、明ほのの空近う讀經の聲すむまゝに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前の國へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとまで追來る。折ふし庭中の柳ちれば、

庭掃いて出でばや寺に散る柳

とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨てつ。

越前の境、吉崎の入江を舟に棹さして、汐越の松を尋ぬ。

終夜嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松　西行

此一首にて數景盡きたり、もし一辯を加ふるものは、無用の指を立つるが如し。丸岡天龍寺の長老、ふるき因あれば尋ぬ。又金澤の北枝と云ふもの、かりそめに見送りて、此所までしたひ來る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞

むざんやな甲の下のきりぎす　曲「あなむざんやな齋藤別當にて候ひけるぞや」の句に取る　大慈大悲―觀世音菩薩

此一村云々―貞室成功の動機が衆之助の父にある事を思ひ、特に此一村の人に對しては點料を請けずして俳諧の判を爲したりと也

雙鳧云々―前漢書蘇武別李陵詩「雙鳧俱北飛、一鳧獨南翔、子當留此館、我當歸故鄉」

書付―笠に同行二人など書くをいふなるべし

鐘板―又雲板ともいふ、金銅に作り形屯雲の如く、禪家にて食時のしらせにうつもの

終夜―此歌運如上人の歌なるべき由曾孤抄にいへり

無用の指―莊子「所謂枝於手者樹無用之指也」

五十丁―寺領の入口より山中の寺迄の行程
邦機千里―機は畿の誤、京都の地をいふ、經詩「邦畿千里維民所止」

そこ〳〵―住所をいふ也

名月は云々―八月十五日の夜は敦賀湊にて賞せんとて旅立つ
あさむつ―淺生津又淺水とも書く、今麻生津といへり

ゆ。今既に別に望みて、

物書いて扇引きさく餘波かな

五十丁山に入りて、永平寺を禮す。道元禪師の御寺也。邦機千里を避けて、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆゑある事とかや

福井は三里ばかりなれば、夕飯したゝめて出づるに、たそがれの路たど〳〵し。爰に等栽といふ古き隱士有り、いづれの年にか江戸に來りて予を尋ぬ。遙十年餘り也。いかに老いさらぼひて有るにや、將死にけるにやと、人に尋ね侍れば、いまに存命して、そこそこと教ふ。市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顏へちまのはひかゝりて、雞頭箒木に戸ぼそをかくす。さては此うちにこそと、門を叩けば、佗し氣なる女の出でて、いづくよりわたり給ふ、道心の御坊にや、あるじは此あたり何がしと云ふものの方に行きぬ、もし用あらば尋ね給へと云ふ。かれが妻なるべしと知らる。むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れと、頓て尋逢ひて、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにとたび立つ、等栽も共におくらんと、裙をかしうかゝげて、路の枝折とうかれ立つ。漸白根ヶ嶽かくれて、比那ヶ島あらはる。あさむつの橋をわたりて、玉江の蘆は穗に出

歸山―本名瑞路山なるを海路と誤り、遂に轉じて歸山と稱すとぞ
明夜の陰晴云々―孫明復八月十四日夜詩「銀漢無聲�втнуа暗垂、玉蟾初上欲圓時、清樽素瑟宜先賞、明夜陰晴未可知」

ますほの小貝―ますうの貝にて赤き貝の汎稱、西行「汐そむるますうの小貝拾ふとて色の濱とはいふにや有るらん」色の濱は即ち種の濱也

でにけり。鶯の關を越えて、湯尾峠を越ゆれば、燧が城、歸山に初雁を聞いて、十四日夕ぐれつるがの津に宿をもとゞ。その夜月殊に晴れたり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路のならひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて、松の木の間に月のもり入りたる、おまへの白砂霜を敷けるがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、泥濘をかわかせて、參詣往來の煩なし。古例今にたえず、神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると、亭主かたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず雨降る。

名月や北國日和定めなき

十六日、空霽れたれば、ますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云ふもの、破籠小竹筒など、こまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹著きぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、佗しき法華寺あり、爰に茶を飲み酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしき感に堪へたり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋
浪の間や小貝にまじる萩の聲

其日のあらまし、等栽に筆とらせて寺に殘す。路通も此みなと迄出むかひて、美濃の國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合せ、越人も馬をとばせて如行が家に入り集る。前川子、荆口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふが如し。且悅び且いたはる。旅のものうさも未だやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮をがまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

おくの細道　終

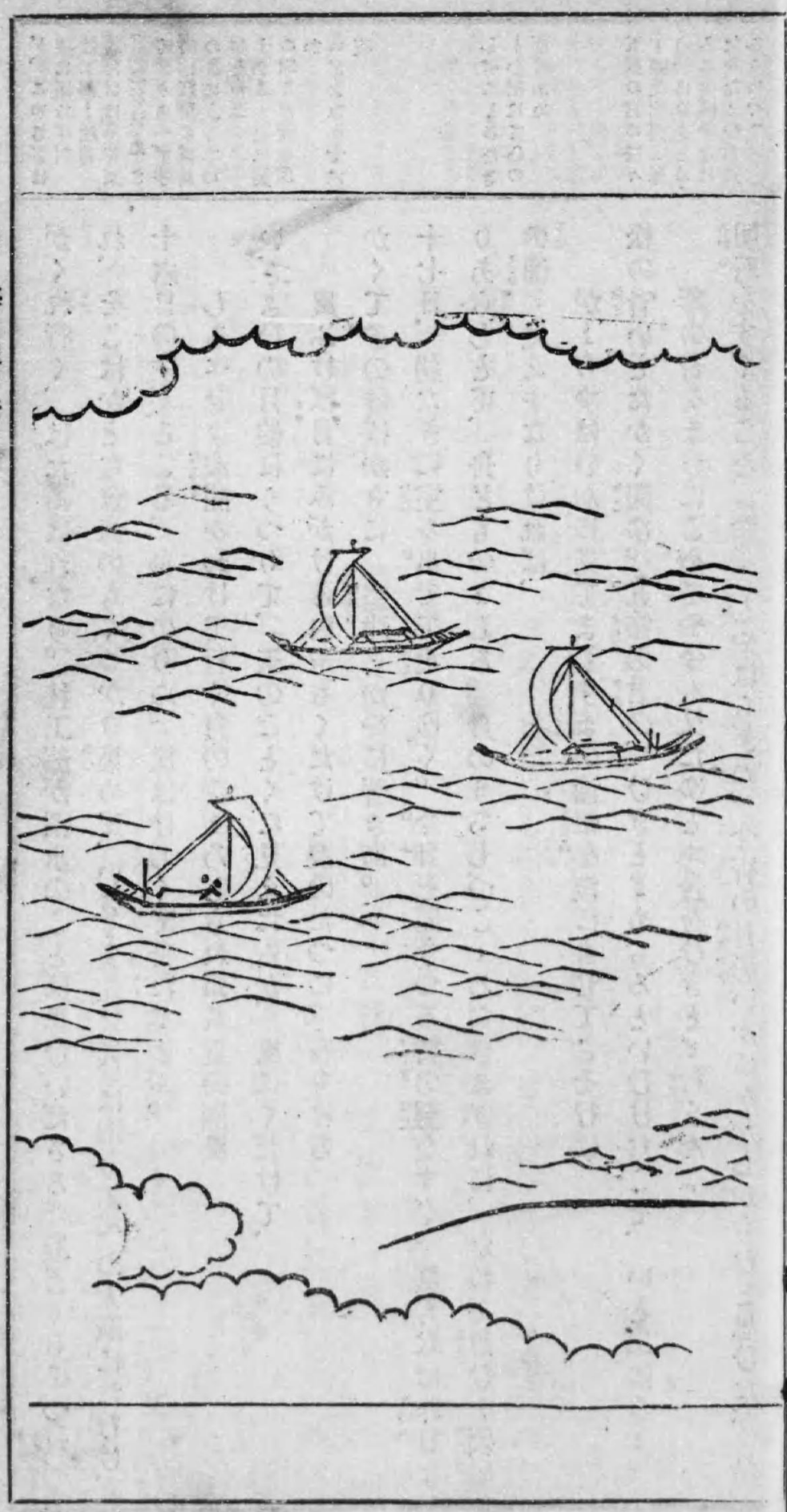
寂しさや―謠曲「そも〳〵此すまの浦と申すは寂しき故に其名を得る」といふに趣を取れり
路通―美濃の人一旦乞食の境界に落ちしを、芭蕉取立てて僧とし、門人となしたり
越人、如行、前川、荆口―何れも門人の名
伊勢の遷宮―二十一年目の九月晦日の夜に行はる

# 東海紀行

## 井上通女

天のやはらぐ始のとし、霜をふみて、かたき氷にいたる比ほひなれば、年ふる丸龜を舟よそひして、あづまの方におもむく。難波へとて漕ぎ出る。親はらからよりはじめ、友とせし人など集りゐて、ころもでの上たどならぬ理なり。されどかうかしこく忝き君の召にしたがふなれば、何か別れのかなしからむ。しかのみならず、御いつくしみ有る仰ごとのかず〳〵、身におはねば、ころもにも堪へざる心地す。かぞいろよくその身をいたせなどの、身にしみて、つたなく愚かなる心のかぎりを盡さんとぞおもはるゝ。父親をもてくだり給ふなれば、長き途もうしろやすく、太山によりかゝりたるとかやいふなるべし。いつしかとくはだつる心のみさきだちて、こゆるぎのいそぎに、あらき波風をしのぎて出づれば、たどよひながらいと走りゆきて、故郷の方はや遠ざかり、しま

天のやはらぐ始のとし―天和元年
霜をふみて云々―詩經「履霜堅冰至」の句による、舊曆霜月即ち十一月頃の謂
ならん
ころもでの云々―袖に涙のかゝるも理なり
かぞいろ―父母などの―などのたまふ言の葉の父親をもて―父親をもての誤寫か
いそぎ―磯、急



ぎ、こゆるぎは磯に係る序詞　杜工部―杜甫　此たびは―菅家「此たびはぬさも取りあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」の句を用ふ　すぐる―上に霊の字など脱せるか　いざよひ―十六夜

しづこゝろなき―心配にて心の落著かぬ

五節の君の云々―源氏物語「琴の音にひきとめらるゝ綱手なはたゆたふ心君知るらめや」

がくれ行く、はたあはれなり。杜工部が渭水のことば思ひいださる。浪まくらのつれづれ、そこはかとなき海のもくづかき集めて、いさゝか此たびは取りあへぬ太麻にたむけ、十六日のすぐるころ、舟にのりぬ。風はげしくて舟たゞよふ。

しるべせよ浪間をわけて行く舟のこゝろしられぬ八重の潮風

いざよひの月浪にうつりて、玉のごとくに見えたるが、風にくだけて、

風ふけば月にみがける白玉もくだけて浪のたつにぞ有りける

かくて子の時ばかりに、室津とかやに著きぬ。

十七日、朝なぎに室を出でて走りゆく。今日ぞ聞きつる響の灘をすぐ。風もなほ昨日よりあらしとて、舟どものゝしる。舟のうちしづこゝろなきまぎれに、かねて思ひし須磨の浦も見えずなりければ、

かゝらずばいかに見てましすまの浦恨を波によせてこそ行け

松の音いとたかく聞ゆ。五節の君の、ひきとどめらるといひけむこそ、いと思はるゝ。

琴の音をまつにこめてや今も又たゆとふ舟をひきとどむらん

明石をすぐるころ、風すこしやはらぎぬ。今宵の月影いかにをかしからむと思ひながら、

牽紘―和名抄に「音支訓豆奈天挽船繩也」

かけても思はざりしに―兼ては見べきものと思ひも掛けざりしに　しほむかひぬ―潮に向ひて舟進み難しの意なちん

蓬窓―舟のまど

灘波津―大阪みつの浦―見つの意に古名三津を掛く　かれ殘りたるよし―「津の國の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり」新古今、西行

こぎ行く舟の牽紘なれば、

所がらさぞな今宵はあかしがた月にぞをしむ舟の牽紘を

かれは淡路島と、人のいふを聞きて、

時しあればけふみて過る淡路島あはれかけても思はざりしに

申の時ばかりに、兵庫につきぬ。まだ日も高きといへば、唯今行けばしほむかひぬとて、錨をおろして泊りぬ。聞きなれぬ浪の音も、怖しくあはれにて、

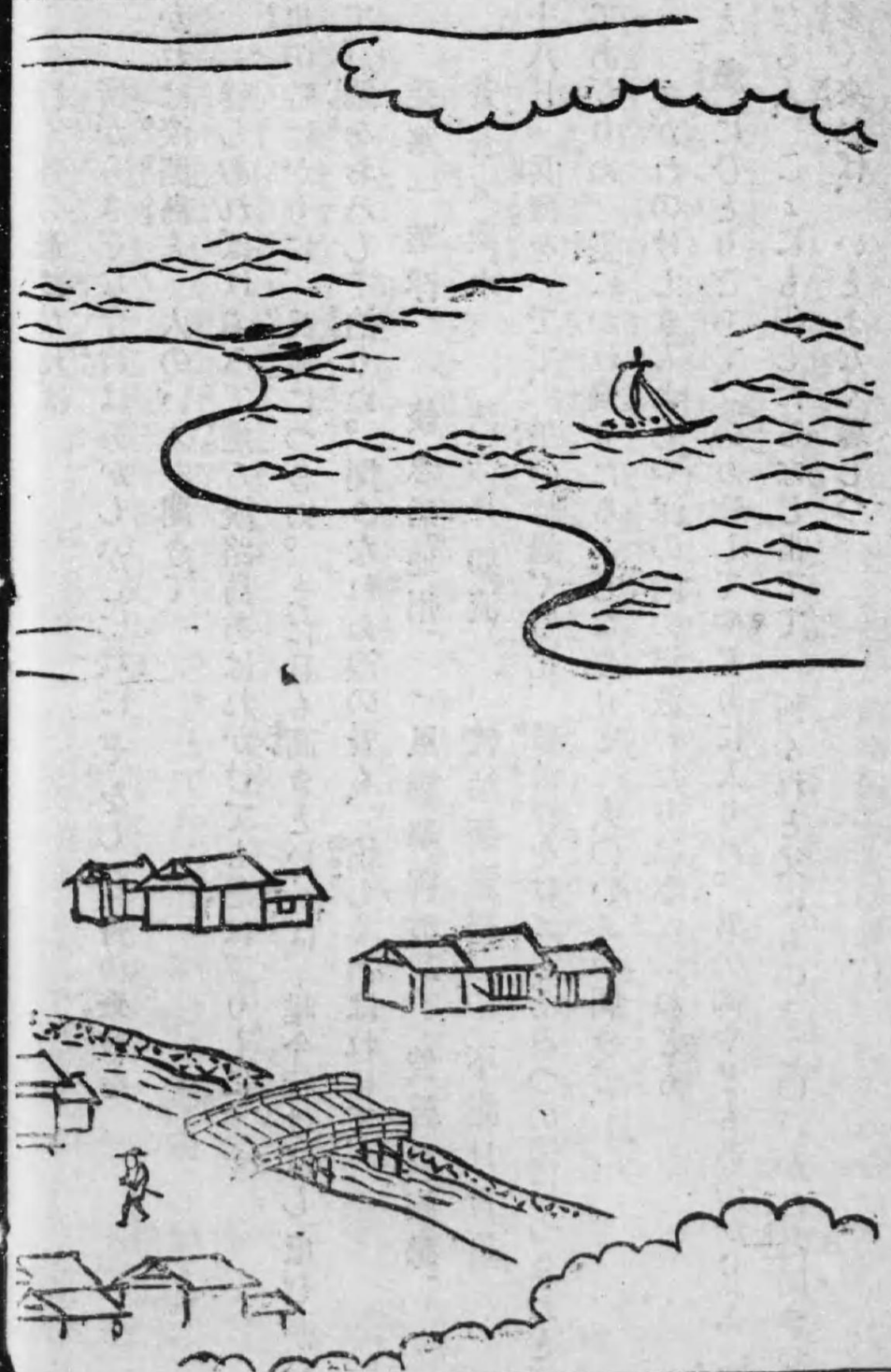
乘寒一葉浮　倏忽過他州　風響驚鄕夢　波聲動旅愁

蒼蒼天與水　浩浩月如流　枕袖蓬窓裡　不能只自羞

十八日、兵庫をいでて、午の時過ぐる比、難波津をけふこそみつの浦につきぬと、悅びてあがりぬ。爰にかれ殘りたるよしなめりと、人のいふを聞きて、

冬がれのけしきもよしや津の國の難波わたりは春ならねども

と戯にひとりごちて、のり物してやどりに入りぬ。君の御やどもあづかりて、父の友なる人、こゝにものしたるなど出でて、何くれと父にものきこゆ。かれ是聞きつけて、多く來れば、いとまなく暮しつ。



いとまなしと云云―休む暇もなき樣に見ゆれど、兎角上り兼ぬるものなれば

さし―指定し

戀塚―小枝の淨禪寺にあり、羅山撰文の碑銘に「吁節婦兮、惟孝惟義、石可泯兮、貞名不已」詩は此文によれり、俗に袈裟御前の墓をいふ

心がらにや―氣のせいにや、

雁塔―塔

つま―端

いふもさらなりや―いふ迄もなき事なり

關所の御しるし給はらんとて、爰に二日ありて、二十日の未過ぐるほど、河舟にてのぼり、さしひくさをも牽紋も、いとまなしと見ゆる物から、上りかねたる習ひなれば、二十一日の晝頃、淀までからうじていたりぬ。

夜もすがらさをさす舟にさへられて枕のしたにこむせぶ川波

伏見までとさしけれど、あまりに舟に佗びて、淀よりあがりぬ。それより鳥羽にかゝる。秋の山をすぐるとて、

いたづらに過ぎぬる秋の山おろし音も烈しくなりにけるかな

鳥羽の戀塚にて、

停駕猶憐戀塚前　貞名勤石艸芊々　若人自是再難得

天命如何使渠然

夕べがかりて都にいる。木草の色まで、心がらにや、めづらかに見え渡さる。東寺よりいるなれば、雁塔のけはひ、いとけざやかにて、名に高きもげに理とみゆ、つきぐしく立てならべたる家どもの軒のつまうるはしく、出入る人もおのれ〳〵とほこりかに賑はしきは、をさまれる御代のさま、いふもさらなりや。三條河原町といふ所にやどりぬ。こゝにも又御家のあづかり出できて、何やかやとねぎらふ。彼方へのものことづて、馬人などの事いひ紛れくらしつ。しれる人かれこれ來て、かゝるついでに物見などいとよき事なりなどそゝのかせど、行先おほく、心は思ふ方にのみさきだちぬれば、かかる旅ぢにて、さることといと心も長閑ならじ、まづ此度はなどいひて赴かず。それもことわりなれど、かゝる序もいとかたき事なればほいなし、かしがましきまでにいふめる。

さること云々―物見なども氣が落著くまじ、まづ此度は見合せんほいなし―つまらぬ、下になどと補ひて見るべきか

役―集韻に「同役」

二十三日、朝ぼらけに京都を立ちて、粟田口にいで、瀨田の橋をわたりて、行く〳〵見る。草津を過ぎて、いしべとかや、里の名さへ睦じからぬたびね、いとわびしきや。けふは逢坂の關もすぎぬといふ。

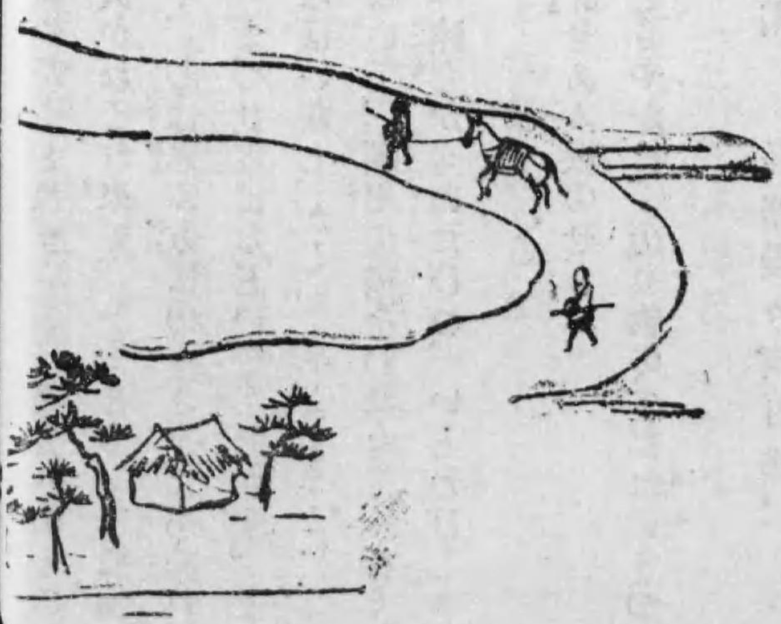
へだて來し古鄕人をこふる夜のゆめぢは許せあふ坂のせき

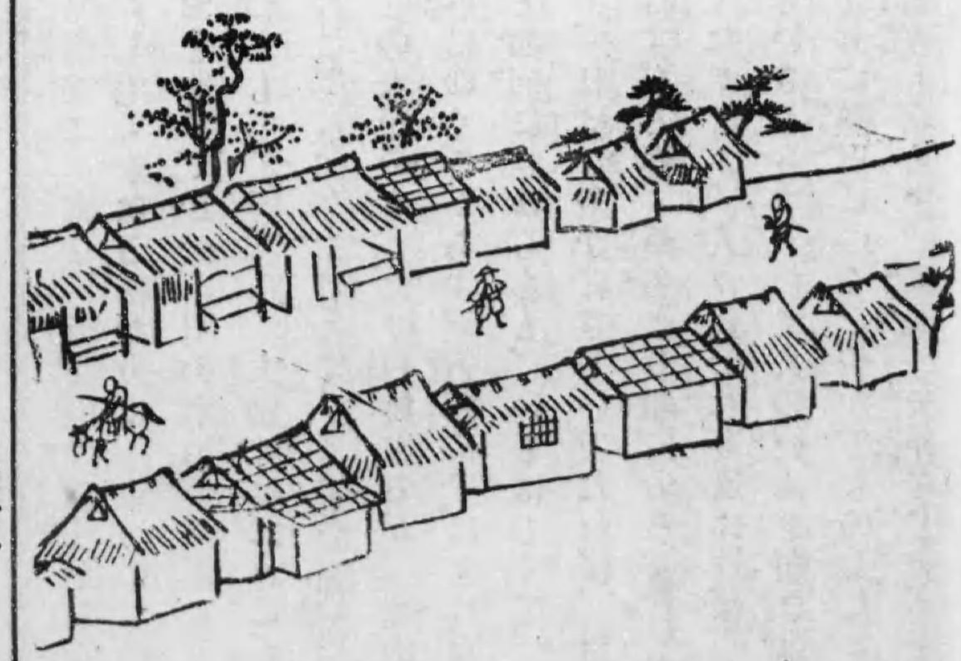
二十四日、五更に出でて行く。殘りたる月いとさやかに、のり物のすだれにうつりたるも、めなれぬ事なればいとあはれなり。

鷄鳴旅店役行裝　殘月含寒映曉霜　長路漫々何日盡

朝々暮々是他鄕

水口より土山を過ぎて、鈴鹿の坂をこゆ。雪水に道なめらかにて、馬も人もわびしげな





おともすどか―音も鈴の如くなる鈴鹿
ついまつ―たいまつ、炬火
はだれに―まだらに
あやうき家―あやしき家の誤か、あやしきは賤しき意
さゆらん―つめたき事ならん
いとはしく―いとはしくてとある方普通のいひざまなるべし
いさしらず―いさは否の意の副詞、情みて讀むものしたゝめ―食事をすまし

すどか山雪さへふりぬ我こまの黒かりし毛もかはるばかりに

あらし吹く谷のいはまにむせびつゝおともすどかの山川の水

二十五日、まだ夜ふかく出でぬ。ついまつともして行くに、大路ははだれに、雪今もふり、二里ばかり行きて、夜もほの〴〵と明けぬ。松の上などはさらなり、刈田の跡、あやうき家のかきさへ、いとをかしと見ゆ。このもかのも、たゞ白妙なるが、朝の光にまじはりあひたる、たとへん方なく、我世の外にゆくこゝちす。古郷にてはまれなる雪ぞかしと、珍かなるものから、從者のあしもと如何にさゆらんと、いとはしくて、とく晴れよかしと思はるゝ。巳過ぐる頃、雪やみて、日はなやかにさしいでたれば、道もいとくかわきぬ。皆々よろこびてゆく。申の時すぐる程、桑名より船にのる。暮れかゝりて、星の光あざやかになるに、黒き雲むら〳〵たゞよふ。人々此わたり風ふけば、あやふしとて、空をみつゝこがれ行く。我は何事もいさしらず、たゞ人のいふを聞き臥せり。風もいでこず、いとのどかにて、子の時ばかりに熱田につく。やがてものしたゝめなどして、宿をいでゆく。まだ夜ふかければ、何方もみえず。鳴海、矢作などいふを聞きすぎぬ。夜あけていとよく晴れわたりたるに、昨日の雪にやあらん、むかふなる山の峯々いと白くみゆ。八橋は爰わたりとこそ聞きつるにといへど、從がふ者ども、さ承りしは、一里程あなたに、澤ははたけのやうになり、橋はくひばかり殘りて、杜若もいづちいにけん、ゆかりの色もなければ、御覽ずべくもなしといひしが聞きし。さる跡こそなほゆかしけれと思へど、かくいへば見ずして過ぎ行きぬ。岡部を過ぎて來るほどに、竹のあるもとに、幼き子ども集りて、あそびゐたるを見て、

杜若―伊勢物語に出でて以來、八橋と杜若とは必ずつきものとなりたる也
ゆかりの色―紫色、杜若の花の色をいふ
いひしが聞きし―原本の句讀による、これ迄從者の言葉と見るべく、或はいひしがにて句、聞きしさるあとと接續するか、何れにても多少の誤あるが如し
よゝ―泣聲に節節の意を掛く、竹の子、よゝ、ね、凡て緣語
こゝもと―こゝちあたり
少女と云々―袖のあけたるとつ

うき節もまだしらなくに竹の子のよゝとは何をなくねなるらん

赤坂にとまりぬ。うちとけ寐られざりければ、

ふしわびぬよひ〳〵毎のやどかりて夢もむすばぬ草のまくらに

二十七日、曉いで行く。けふは潮見坂とて、遠江の灘など見ゆる、いとおもしろき所をこそ過ぐるなどいふめれど、物へだたりたれば、いとよくも見えわかず。高師山、濱名の橋など、音に聞きつる、こゝもとにやと覺束なきものから、誰にかは問はん。未の時ばかり、荒井にやどかりて、難波にて賜りし御印、關所に奉りしに、わきあけたる少女と書きわくべき事を、えしらで、たゞ女とのみ書きて奉り、扨御印のことばにも、女との

めたるとにより て、手形に女と少女と區別して認むべく、筆者は少女なるを知ちずして單に女と書きし故通行の許可を得ざりしと也

心もとなき―待遠しく氣にかゝる

我來し方―今迄自分が旅行し來りし道程

いばえて―嘶きて

取り集めて―何もかも一所にあ

み有りければ、ゆるし給はで、空しくもとのやどりに歸りぬ。いかゞ悲しくつらくて、いかでさる事しらざりけんと、我身さへ恨しくて、

たびごろもあら井の關をこえかねて袖による浪身をうらみつゝ

自經萬里走君命　今日已來荒井關　未識少長因袖分

空留旅館我心艱

急ぎ使したてゝ、御印取りかへ給はらんと、難波へいひやる。爰にみな〳〵とゞまりて待つ程、心もとなき事數しらず。我來し方をおもふに、さかしき道も多かりき、かの使いかで怖しきめにやあふらん、やすらかにいつか歸り來んなど、しづこゝろなく思ひつづけらるゝ。もし事たがうて、是より歸りなば、いかにうからまし、はる〴〵來しかひも無くやなんど、おもひつゞくれば、そゞろに涙落ちて、燈さへ暗くおぼゆるに、雨いといみじく降りて、よろづ物わびしさ、いはん方なし。大路もほどなければ、五更より旅人うちむれ行くおとして、かれこれよびかはし、馬のいとたからかにいばえて、くつはづらの音などきこえたる、羨しく、たゞ何につけても、女の身のさはりおほく、はかなき事ども、今さら取り集めて過すほどに、明暮もおもひわかず。かくて幾日過ぎぬ

りて心をなやまして

心ならぬ―意のまゝならぬ

胸うちつぶれて―胸がどき〳〵して

奉り―其書付を關所の役人に

袖にふけ―新古今、下の句「思ふ方より通ふ浦風」

しはぶきやみ―咳嗽、せき、風邪か喘息なりしなるべし

るもしらず、けふは師走の三日に成りぬといふ。いとよく晴れて鮮かなる日のかげ、障子にうつりたるを見て、かゝるをり道ゆかばよかるべきに、心ならぬ宿かなといふ折ふし、使かへり來れり。いとゞはやかりしなど、くち〴〵にいふ聲す。とく出でて見よといふほども、心もとなしや。かぎりなく嬉しき物から、なほいかならむと胸うちつぶれて、文箱あけたるに、いさゝかの咎もなく、よく書きかへて賜はれり。かゝる苦みおぼしやりたるにやと、其方にむかひて喜ぶ。扨奉りたれば、此たびはたがふ所なければ、とく〳〵と許さる。いとうれしくて、此程思ひ暮しぬる、心ひらけたる心地して、いそぎ舟にのりぬ。風もあらけれど、近きわたりなれば、何ともおもはず。舟よりあがりて、今宵濱松にとまりぬ。なほ今朝の事いひて悅ぶ。此程の事ども、とり〴〵言ひあへり。

いさめしを袖にはふかくうちよする浪にこたふる濱松のかぜ

彼定家卿の、「袖にふけさぞな旅寐のゆめもみじ」といへるを、ふとおもひ出でて、かくいへり。

四日、五更出でて、明け離るゝほどに、天龍の川舟にてわたる。それよりしはぶきやみに懸りて、ものかくこと父のいさめければ、筆もとらずなりぬ。

東海紀行終

享保二年丁酉八月

京書林衣棚二條下町　山形屋善兵衛
江戸日本橋南一丁目　小川彦九郎

# 歸家日記上

井上通女

武蔵鐙―古へ武蔵より産したる名物、かけはなるといふに掛けたる文飾

おぼしわきて―思ひ分け給ひて

思し至らぬくまなく―御考の屈かぬ限もなくになう―二つなく、此上なく

年なみの云々―月日の經過したるも

別れ奉り―元祿二年二月三日、使者養性院の逝

年經てすみし武蔵鐙、さすがにかけはなるゝ東路のなごりをしく、かなしさをかきあつめて見むもよしなしや。一とせ故君の仰を承り、御言の葉のふかきめぐみによりて、身の拙きをも思ひわかで、はるけき海山のさかしきをしのぎてまゐれる心ざしを、淺からずおぼしわきて、御側にのみ朝夕ならさせ給ひて、よろづに御心をくはへて、思し至らぬくまなくいたはり仰せらるゝをば、いかでかはいとどおろかにも思ひ奉らむ。いとになう賴みきこえ奉りて、十とせにちかき年なみの立ち重なれるも、たゞ昨日今日の心地ぞする。飽く世なうれつかうまつりし御かげに、かく〳〵俄なるやうにて別れたてまつりしかば、夢うつゝの境も思ひわかたれず、いとどうき身を用なきものに思ひすて侍るを、とゞまらせ給へる御子達、御はらからを始めまゐらせて、有りし御心に叶ひてお

去をいふ　夢うつゝの云々―夢やら現やらその區別もつかず　有りし云々―亡き方の御氣に入りなりし者ぞとて、特に態にいろいろ仰あり　おもだたしき云云―自分の面目を施す樣に御とりなし下さる御惠　かきくらし―涙にくれて　せちに―切に　久しきながめも―久しき間ながめ暮したるも、ながめは「我身世にふるながめせしまに」などの例と等しく物思に沈むをいふ　卯月の云々―四月の二十日頃より五月の晦頃迄れい待たせ給ふ

ほしめしつるものをとて、かたじけなく懇に仰せまつはして、何事をも、おもだたしきさまに、おほしおきてたる御惠を見奉るにつけても、なほ來し方のかへらぬ昔となりぬる儚さのみ、かず〳〵に思ひつゞけられて、かきくらしつゝ過すほど、月日のうつりかはりて、わかれ奉りしをりのへだたり行くも、かなしくおぼえらる。親の年老いて、いとせちにこひしと覺ゆめるは、げに周公の聖にてだに東山の三年をなげき給ふ、ましておろかなる心のやみに、九とせの久しきながめもことわりに悲しくて、古郷をかへりみんと思ひなりぬるを、止めまほしく思ほしたる御かたぐ〳〵の、御心どもの淺からぬ御言の葉のなさけも、かず〳〵に忘れがたきふしども多かれば、草まくら思ひたちぬる御なごりをしみまゐらせんと、彼方此方に、四日五日のほどと思ひてまゐるに、今一日今一日と、せちにとどめさせ給ひて、卯月の二十日頃より皐月のつごもりつ方まで、外にさぶらふ。れい待たせ給ふらんと思ひ奉る主君もなければ、家路忘れて斧の柄くたしけん人の心地して歸るを、こなたにも獨り御心ぼそくてながめ給ふ女君、おそかりつと待ちうらみさせ給ふ。故君の御はかに參りて、是やかぎりと御いとま申す程のいと悲しさ、物にも似ず。この御國にだに侍らましかば、かくかひなき御跡にも、たえず詣でまゐりて、なほそのかみ御前に侍ひし心地のし侍るべきを、女にてさへあれば、一つ心にまかせぬぞかなしき。

―例の如く我を待ち給ふ　斧の柄云々―晉の王質山に入りて仙人の棋を圍むに見とれ遂に斧の柄をくさらせたりといふ故事　一つ心云々―自分一人の思ふまにもならず　あとをだに云々―跡を來て見る事も出來ずとは思ひも掛けざりき

あは雪のきえにし君があとをだに來つゝ見じとは思ひかけきや

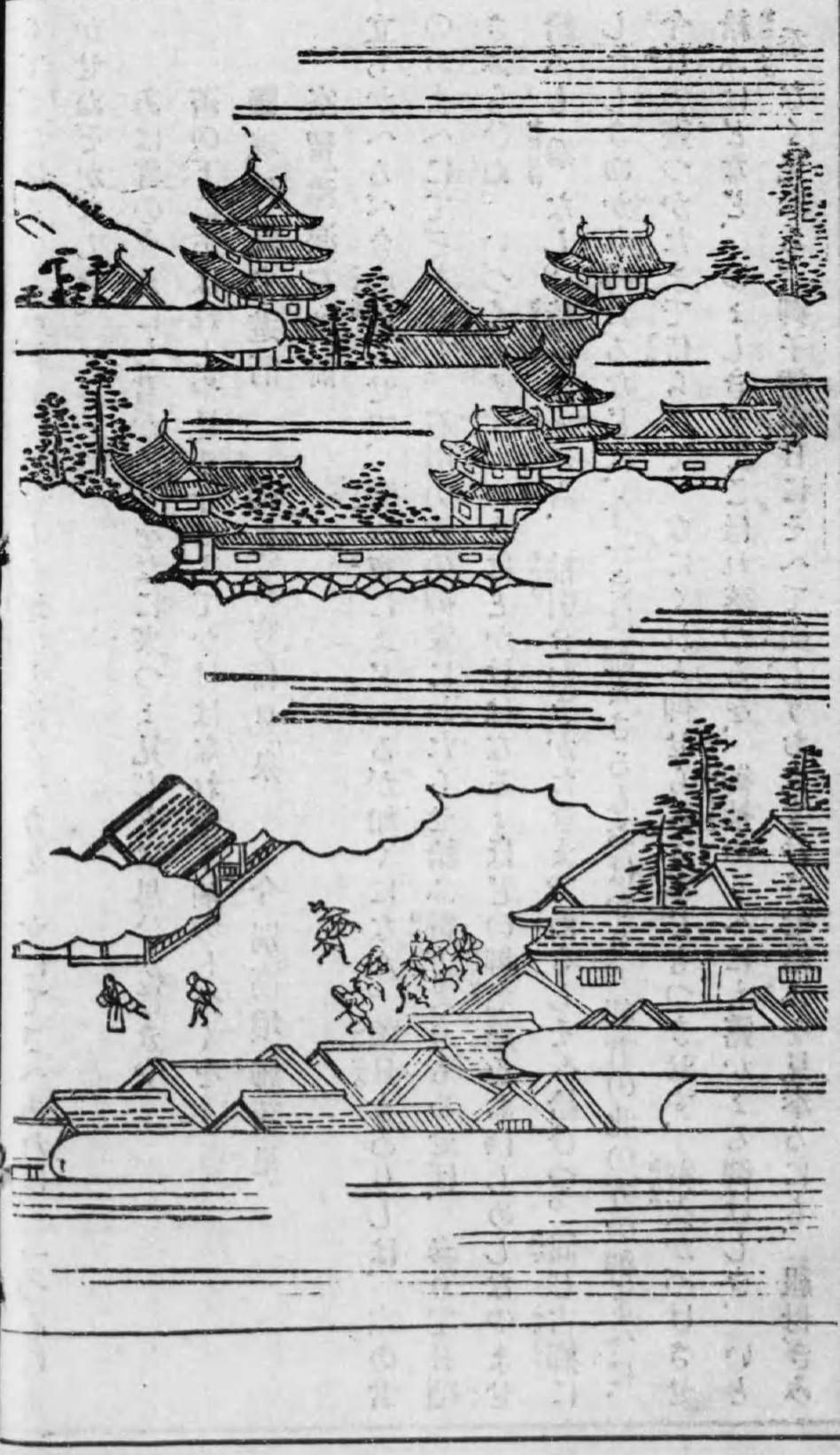
苔の下にあはれとや見る今はとてかけはなれゆく袖のしづくを

靈魂何處去遊衍　仰見蒼穹俯見泉　今別高墳歸舊里

空留涕淚石碑前

立ちかへるべき心地もせず、闇き夜にまどへるが如くになん。頃日まゐりしは、宗の君のおまへにてぞありし。石川の君の御家にわたらせ給ふ御方よりもめせば、參りて日頃さぶらひぬ。いづくも〳〵、いまはとかけはなるゝほどの御名殘をおほしめしなやませ給ふも忝なし。侍らふ人々も、袖引きわきがたきまでぬらしそへ給ひつ。同じ古郷にしたしきゆかり持たるなどは、今一きは瀧まさるもおほかり。邦君の北の方の御まへに、今日の晝つかたまで侍らひて、なにくれと仰せらるゝ事どもつきせず、御衣かづけさせ給ふほどなど、ゆゝしきまでこぼれ落つるを、御袖のうへにも露かゝる御けしき、いと忝なく見奉る。御子達の日にそへて美しうおよすけさせ給ふを見奉るにも、祖母ぎみ

同じ云々―我と同郷に親しき緣故ある人などは今一層涙を流すも多かり　ゆくしきまで云云―涙のあまり思々しき程こぼるゝをあもすゞ―成人



のいかばかり大事とおぼしかしづきつるものを、かく人とならせ給へるを御覽ぜさせたらましかばと、おもひ出で奉れば、いとど別れまゐらせなん事、あかず口をし。侍らふ人々に、

恩情何淺九年好　別恨難堪萬里身　想見歸家隔山海

月前相望涙痕新

ふる里にひとりかへらばしまつ鳥うきねをのみぞ鳴きわたるべき

をさなくより仕うまつりて、かしらの雪となるまで、かた時さらず頼みきこえまゐらせし老びと、それより若きも、法の道に心ざし、あるはかゝるみぎはによをうみのあまとなりて、心ふかく行ひ居たまへるなどぞ、ことに妾が別をもかなしみ給ひて、かゝるはかなき言草をいひすて侍るを見ても、いとど苦の衣の袂はかわきだにせず、心よわきけしきもあはれなり。其外日頃おなじみやづかへにてなれ睦じかりつる人々の、おのがちりぢり行きあがれぬるなど、俄にかくと聞きて、驚き思ひて出できたる、そこら集ひて、とり〴〵にうしろみ物したゝめ、何くれといとなみ出でたる、いと嬉しくだのもし。今宵はかなたこなたと文どもおほく、御歌の御返しなどつかうまつる。かしこければこゝにはもらしつ。夜ひとよ認めて、曉がた、名殘をしとて、一ところにより臥すほどもなく明けぬれば、いそぎ起出でて、旅衣さうぞきかへ侍るほど、かたみの袖の雫は、かきながすもたましひの消ゆる心地すれば、其ほどの事ども、皆とゞめつ。妾をゐてのぼるは、弟の益本なれば、萬にうしろやすく頼もしき事限りなし。是も君の惠によらずば、いかでかは。まだ明けはてぬ程に來て案内して、とくたち給ひねといそがし侍れど、上下のある人々馬のはなむけとて、盃出して、とり〴〵に名殘つきせずしたひ給ふめれば、すが〴〵しく出もやられず、馬のたかくいばえたるなど、はなやかに聞ゆる物から、いとかなし。

昔是來時飛雨雪　旅人墮指望江東　今將歸日苦炎熱

匹馬回頭斷暑風

たび衣わかるゝ袖に雲のなみけぶりの浪をたちやかさねん

女のひざうをいましめ給ふなる箱根、今切二ところの關通すべきよしの御しるし、きのふ益本に下し賜りぬ。元祿二年己巳夏、六月十一日出でたちて、とほき古郷にとて歸り侍る。御門出づるほどなど、物もおぼえず、みな簾のもとによりて暇乞し給ふ。芝のさと品

しまつ鳥―うに掛る枕詞

よをうみの云々―世を厭ひて尼となりて、海士と海、海士と尼と掛けたり

苔の衣―法衣

ものが云々―めいめい散り〴〵に分れ行きたる人々

そこら―澤山

うしろみ―旅立の世話燒き

かしこければ―畏多ければ其御歌はこゝに略す

さうぞきかへ―着かへ、さうぞきは裝束の動詞

益本―井上市兵衛の諱

いかでかは―如何で斯る便宜を得んや

馬のはなむけ―餞別

すが〴〵しく―さつさと

聞ゆる物から―聞えはするものの

ひざう―非常

打驚きて―ふと目覚めて

おましし―座敷

むかふざま―向ふの方

末の松山―「君をおきてあだし心を我が持たば末の松山浪もこえなん」

素餐―徒に祿を食みて何の功も

川とかいふ驛に出づ。しれる人々自ら送り給ふも有り、人おこせたるもあり、うちつれていづる。商人の家ども、町たてわたし、作りならべたるあたりを打過ぎゆけば、海の面はるゝと見やらるゝ、いとめづらかなり。送の人々にも、是より歸り給ひねといふも、又逢見る事も有るまじくやと、いと名殘をし。益本に物聞えかはして、是よりみな歸り給ひぬ。晝つ方、ゆくゝうち眠られたるに、なほ有りし御かたゞの、御そばにさぶらふと覺えて打驚きて、「心ばかりや通ふらし」の御言の葉も、忘れがたく思ひやりまるらせて、此方をおほしめしおこせるにやと、

したひくる君がこゝろか止め來しわがたましひか通ふまぼろし

晝つかた立寄りたる宿いと涼しげなり。おくなるおましに居て、外のかたを見やれば、雲につらなりたる海原、むかふざまにたかく見えて、げに末の松山をもこえつべく、浪のたちかへるなど面白くて、爰に住む人さへぞ羨しき。それよりいで行けば、さつき頃早苗とりつらんと見ゆる田面に、綠の稻葉いとうるはしく、まだ穗に出でぬほどなり。草ぎる者の笠のみ見ゆ。田歌いとをかしく歌ふ。げになりはひのたやすからぬ營みも、見るごとには一しほに思ひ知られて、素餐のとがおそろし。又山際に畑うつ者の、身の色は

欠

恐き女、女子が男子と鬩りて關を越ゆる事ありしを改むるための老女なるべし

だみたる聲―よこなまりたる聲

かくする―とかくするのと字脱か

三島の―見て三島の

かしこにのみあくがれ―富士にのみ奪はれ時しらぬ―「山

かにより來て、だみたる聲にて物うちいひ、かくするも、こゝろづきなく、いかにする事にかと恐ろし。居ならびたる人々、老女にくはしく問ひ聞きて、御印にたがふことなしとて、益本に關とほしぬるよしのたまふ。げにいづくもあやまりなしとおもふ物から、かくいかめしきあたりに立ち出でぬれば、なほ如何ならんと、胸つぶるゝ心地しつるに、いとうれしくて、人々よばせて過ぎぬ。峠にいたりて髪あげぬ。やゝ下り行く坂になりぬるもうれし。三島を過ぐるとて、明神の御前にしばしやすむ。

誠あるこゝろばかりを手向くるをぬさと三島の神やうくらん

今宵は沼津にとどまる。

十四日、明がたにやどりを出づ。家々旅人の朝たつけしきしるく、女どもの立出で送るなど見ゆ。馬どものいばえわたしたるに、殘りの夢もさめぬ。浮島が原に出でて、

不二のねは夏なき山か吹きおろす朝かぜ寒しうきしまがはら

江戸を出でてより、日ごとに見やらるゝ富士の高根の、うすみどりにて、たぐひなき山の姿の、はるかに雲を出でたるが、我がゆく方に相向へる、心はかしこにのみあくがれつゝ、今日はいとど近づきもて行くまゝに、はれ〴〵しく目をそらになして、時しらぬ



欠

は富士のねいつとてかかのこまだちに雪の降るちん」伊勢物語

みな月の一萬葉「富士のねに降り積む雪はみなづきのもちに消えては其夜降りつゝ」

かげろふ―かげる、雲にてかくる

さへ上―さへぎりかくせよ

と昔の人の詠めけん雪さへ今も見ゆれば、其世のふるごともいとゆかし。

いづくよりふる白雪のつもりけん雲もおよばぬ富士の高根に

降りかふるほどや來ぬらんみな月のもちにも近きふじの白雪

仰見士峯高倚天　雲端玉立德容鮮　千秋雪色映東海

一抹烟光讓淺間　神秀豈爭他列嶽　仙蹤猶在我危巔

鄕人若問途中事　好把此山比聖賢

高根よりこなたに横たはれるは、足高の山といふ。かく名高くはれぐしきあたりに、いかではひよりけんとをかし。富士山神蹴くづし給ひたるとか、かたはになりては立てるかひなくこそ。けふは日照りていと暑し。峯のごとくなる雲、とほく見ゆめれど、かげらふべくもなし。

やくかごと苦しかりけりみな月のてる日をさへよ夕立のくも

足柄山に雲のかゝれるも見ゆ。

よそにして過行くせきの跡なれや雲のみこゆるあしがらの山

富士河舟にて渡る。水いとはやくしてあやふげなり。

時しらぬ高根―富士、前の引歌による

ひとりどり―一人一人か

ゆきかひ―往返

しほたるゝ―見すぼらしく暮す、海士の縁語

みし人の面影とめよ―新古今、下に「清見潟袖にせきもる浪の通ひ路」

富士河のみなぎる浪は時しらぬ高根の雪や今もとくらん

其後また少し小き河をわたる。是を問へばうる井川といふ。蒲原、由井をすぎて薩埵山をこゆ。中比まで、此あたりこよなう険しく、かたつかたは壁のごとく立ちたる山の、かたつかたは海にて、唯ほそき道一つなれば、人も馬も、わづかにひとりどりならでは通り難し。親しらず子しらずとかいひて、親子といへど、相かへりみる事あたはざりしといふ。然るを近き世に、此山をかくひらき平らげさせ給ひて、萬の人のゆきかひたやすくなれるは、道廣き御めぐみなりかし。田子の浦にしほたるゝあまの家ども、まばらにあやしげなる戸口より立出でて、磯邊にながめ居たる、汐汲まむとにやと見るに、さもせず、貝拾ふにこそ。げにさまぐ〳〵いとまなきしわざもあはれなり。沖津にいたり、清見がたを過ぎて、こゝは昔の人の心とどめし、から歌やまと言の葉のすぐれてたへなる多ければ、なか〳〵拙き言の葉の見苦しからむをば、打寄する沖津なみもすゝぎがたくやと、引きこめて、たゞみし人の面影とめよと、ひとりごとして過ぎ侍るまゝ、心のうちに、

いのちあればけふ又こゝにきよみ潟浪たちかへる汀をも見つ

むづかし―面倒臭し

翩躚―天人の舞を形容せる也

とぞふと思はるゝ。清見寺の門の前におろしたてゝしばしいこふ。益本よりきて、寺に入りてみ給ひなんや、いとよき景色なりなど聞ゆれど、のぼる事もむづかしければ、此すだれごしに、わづかに門より見入れ侍るのみ。むかひの家々膏藥うる所おほし。これよりなほ山路をわけ行くに、三保の松原はるかに見ゆ。あまつ乙女の羽衣かけしといふあたりもゆかしく、げにや天人もかけりつべき所のさまなり。

山行直下海邊好　三保松原與浪連　仙女羽衣空去後

斜陽掛處憶翩躚

うどはまの疎くは人にみえじとやたつ白浪のまなくよすらん

伊原川とかいひて、ちひさき川をわたる。江尻にいたりて宿をかる。

府中―今の静岡
おりはへて―織り延べて
待つらんさと―我を待つらん里、故郷
すぎやう者云々―伊勢物語に宇都の山にて修験者に逢ひ都へ手紙を事づてし事
見ゆ
しとぎ―米の粉にて作れる餅
はやく―昔

# 歸家日記中

十五日、江尻を出でて行き、狐崎を過ぎて、梶原がむかしをかなしむ。府中よりまりこに行くとて、あべ川といふ川渡る。しづはた山を見て、

なつ衣たれきて見よとおりはへて賤はた山にかゝるしら雲

鞠子河の橋わたりて、宇都の山にのぼるほど、待つらんさとを思ひやりて、

古郷のおやの夢にやかよふらん今日こえかゝるうつの山みち

すぎやう者にことづてけん、はるけき古のあとと思ふもなつかし。

つたかへでそれとはなしに夏草のこずゑもしげるうつの山越

坂くだるほどに、十團子といふ物を家々の軒のつまにかけならべて賣るなり。しとぎのちひさき丸を、十づついとに貫ぬけるは、玉を綴りたらんやうなり。旅人買ひもていきて、わらはべに取らするとぞ。はかなげなる物から、はやくよりする事にて、今にかはらぬ樣なるもあはれなり。畫たちよるやどは岡部なり。

おのがどち―自分同士
聞きわたる―兼ね兼ね聞きたる
さらん時―其樣なる時
くれぬ影―つき
従ふ影―もりかねて人だのめなる―月影の漏りて人にたよりになる
思あちしむる

うつの山ふもとに秋のちかければ露もをかべの里といふなり

せとの染飯とて従者ども取りもたり。藤枝ときけど、紫に匂ふ花もなし。嶋田を志して行く。早苗のみどり色まして、見るまゝに秀でゆくを、輿かく者ども、おのがどちいふを聞けば、今年のなりはひこそいとよく侍れ、雨風の時に順へばなるべし、刈りをさめん秋の稲穂もたのもし、かくゆたかなる年に逢ひ侍らんは、我等が幸なりなど、よろこびつゝ行くをきくも、いと嬉しくめでたし。聞きわたる大井川にもいたりぬ。頃日は水あせ石出でて、河原のみおほく續きて、なほ廣く見ゆ。さいつ頃の長雨に、嶋田、金谷までで、ひとつになりて、水のたゝへたるなどかたるを聞く。さらん時のさま思ひやるもいとおそろし。瀬ふたつ渡りて、むかふの岸に著きぬ。

東路のなごりはいとゞ大井川このせや渡るかぎりなるらん

今宵は金谷にやどる。日は入りぬれど、なほ暑ければ、庭に水そゝがせなどして、障子あけて見出せば、月いとよく差入りて、たびの空にもおくれぬ影あはれなり。つき山のかたこぐらくしげりたる、もりかねて人だのめなるにも、住み來しかたのみ面影にたつ心地して、

こうじにて―困りきり
三井寺―謡曲
ねびまさりて―大人ぽくなりて
半蔀、うき舟―材を源氏物語に取りたる謡曲
あたらしき―惜き
命なりけり―西行「年をへてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山」
つれなく過ぎし―命をもちこたへて無事に過ぎし
所せく―あたり狭きまで

いとゞなほ月に昔を思ひ出でてすみこしかたの影ぞわすれぬ

よしあしもおもひわかれず。益本にも、此月のおもしろくあはれなるに、詩一つ作れと硯ざし出でてすゝむれど、馬上にていたくこうじにて侍れば、ゆるし給へ、其かはりにはとて、拍子とりて、三井寺うたふも、珍らしく面白し。はやくまどの内にすみける程、をり〳〵聞きしが、其ころはまだわらはにてぞ有し。いたう聲もねびまさりて、年月の隔りし、いとゞ思ひしらる。源氏物語ぞ猶えんに面白きといへば、半蔀、うき舟など謡ふ。聞きもわかぬ従者どもは、はやくいね給ひねかし、明日は又とく出で立ちなんをと思ふべかめればとて、あたらしき夜のさまかなといひつゝ寐ぬ。

十六日、金谷の宿を出でて、菊川と聞くも、其かみの事おもひながさるゝあたりなり。佐夜の中山にかゝりては、まづ命なりけりといひけん、げにさもこそありけれ。我も武藏野の露とや消えんと、いとはかなく心細かりつる身の、十とせばかりのほど、つれなく過ぎし月日の、けふまた爰を經て、ふたゝび古郷に歸り侍るにつけても、なほ過ぎさせ給ひしきみの御言の葉のみ、かず〳〵思ひつゞけらるゝこと多くて、袖のみ濡るゝ折しも、村雨さへふり出でて、木々の下露も所せく落ちそひたり。

ふり―古り、降り
西山の飢―伯夷叔齊が首陽山に入りて蕨を採りし故事
其所の物―其地の名物
かくと―乞食して親を養ふ孝行の者なりと

雨さへやかさねて袖を絞るらんふりにしかたをしたふ涙に

むら雨のすぎゆく跡を山かぜのはらへば落つる松の下つゆ

かりねせしふもとのさとの草枕夢ぞ残れるさよの中山

なほ険しきをのぼりくだるに、このたびは日坂といふ。蕨もちひ家毎に賣るは、西山の飢をたすけんとにや。むかしより其所の物となれるをば、何にてまれ買ふものなりとて、をのこども食ふめり。掛川にいたる。是は井伊伯耆守殿の領じさせ給ふ所なり。大手の門などきら〳〵しく見ゆ。此北の方は、故君の御妹の姫にてわたらせ給ふ。あづまにて、近き頃まで見え奉るたびには、いと御なさけ有りて、おほせられつる事ども思ひ出で奉る。畫袋井といふ所にしばし立寄りてやすむ。さきにのり物のすだれの前にはしり行きて歌うたふ者あり。物狂にやと見れば、皆いふ、かれがやうに乞食しても、親をば養ふ、我等にはまされり、孝の志を感じさせ給ひて、此あたりを過給ふ國々の君などまで御覽じつけて、かくと聞かせ給ふは、みな物たまはらせらる、さればこの里の内をはなれずして、おや子のかて、心やすくて過しぬるなといふを聞きて、あはれなれば、物とらせて過行きぬ。誠におほくの行きかふ人、貴も賤も、おやに孝なると聞きて、感じて物と

民の云々―詩經大雅蒸民篇「民之秉彝、好是懿德」

やをち―靜に

厲揭―原文に註せる如く詩經に「出てたる句にて、厲は衣を持ちて深き處を涉るをいひ、揭は裾をかゝげて淺瀬を涉るをいふ」―ゆやが言の葉―「如何にせん都の春もをしけれどなれしあづまの花や散るらん」

らせ待るは、民のつねをとれる此懿德をよみすとかや、いとたふとし。見附に往くほど、橋どもおほく渡る。坂も又多し。

人しれぬかよひ路ならば東路のみつけの里の名をやいとはん

今宵は濱松にやどらむとて行く間に、天龍川ふたつ有りて、まづ舟にて渡る。水淺くて船行なやみければ、皆おりたちて、舟ばたをとらへておし出す。やをらふかき所に浮み出でて心よく渡りぬ。後の河は徒わたりなり。鳳凰臺に題せし詩を思ひ出でて、をこがましけれど、

天龍河上天龍去　龍去河留二水流　二水中分成二大小一

小斯厲揭大斯舟　詩匏有苦葉篇深則厲淺則揭

池田の宿とかや。長者のすみけんむかしの跡も、此ちかきあたりと聞けば、ゆやが言の葉おもひ出でて、

我も又なれしあづまのはなのはる春におくれて今かへるなり

橋ども有りてわたる。濱松にやどりぬ。

はま松のかはらぬ色をみても猶かれにし君が蔭ぞかなしき

かゝるすぢ―亡君を偲ぶ事　前坂―舞坂　新居―荒井

ぐせる―供に連れたる

とほつあふみ―遠江

景色―傍訓原本による　吉田―今の豊橋

たくみ―大工

とよみ―大きわぎし

なほかゝるすぢの事のみ、先ふとうちおぼえらるゝまゝに。

十七日、明けはなるゝ程に宿を出づ。前坂といふあたりを行き、新居へとて、今切のわたり舟よばせてわたる。風いとはげし。ほどなく岸にいたりつきて、爰にても又番し給ふ所によりて、御印奉り、例の女よび出でて、我もぐせる女も、髪ねんごろに見せて、いづくも違ひなしとて、益本が姓名などたづね聞きて　とほし給ひつ。濱名の橋は名のみして、今は渡るべき橋もなし。松左右にうゑられたる山道をゆく。高師山もこゝなり。

高師山松ふく風のおとゝほく聞きし濱名の橋も絶えけり

白須賀といふあたりを過ぐれば、なほ山路なり。汐見坂をこゆるに、とほつあふみの海原はるゝと見わたさるゝ景色いと面白し。畫のほどしばし休む所、二川といふ。吉田の市店を過ぎて、いと長き橋に至る。只今わたるはし、漸古くなれりとて、作りかへらるゝなり。大きなる木ども引きかけ、けづりまろばして、たくみどもをはじめ、人多くつどひて、とよみあへり。いま渡る橋にも、人々集りて是を見る。御油より赤坂にゆく。客亭いとにぎはゝしく立並びて、家々の女ども旅人を呼びいれとゞむる聲喧しく、小田の蛙の夕暮になく心地す。

すきもの―風流人

せちにゆかしがれば―無性に見たがりほしがれば

思の外なる云々―思ひ掛けぬ所に縁づいて

むかしの跡―伊勢物語、業平「かちころもきつゝなれにし妻しあればはるゝ〳〵来ぬる旅をしぞ思ふ」の舊跡

過きがてに―心ひかれて行過ぎ難く

強呼二旅客一家々女　紛面朱唇巧納レ交　寓舍今宵何處好

共言有レ酒有二嘉肴一

今宵は赤坂にやどる。あるじの女房すきものにて、我何となく硯にむかひて、物かきすさむをゆかしがりて、人靜まりて、若き女の宵より來りてつかふるに案内させて出でたりぬ。なにやかや物語りして、手習の反古どもをせちにゆかしがれば、詩や歌や書いてやる。喜ぶことかぎりなし。其身の有樣など語りて、はやうかゝる事ども、及ばずながら心よせ侍りつるを、思の外なるよすがにつきて、かくかしましき市の中の住居、ほいにもあらず思ひ侍るなどいふ。おやの里はいづくぞといへば、三河の國八つ橋のあたりと答ふ。今もむかしの跡はありやと問へば、八つ橋の柱にやかたばかりに殘れるを、其跡と申しつたへ侍る、業平の塚も侍るとかたる。業平はそこにて終り給ひしとも見えざめるを、さる人の過ぎがてにながめ給ひけん跡なれば、後の世までのしるしにし置き侍るにやと思はる。やゝありて歸りぬ。鳥もほどなくあかつきを告渡れば起出でて。

十八日、例の明ほののころほひ、やどりを出づ。よべの女ども、名殘惜めり。ひぢ河といふ里の名を聞渡りて、岡崎にいたる。この國の御城うるはしく見ゆ。驛亭長くつゞきて、

あき物―商ひ物

みかは―見、三河

はま楸―海邊に生ずる一種の植物、普通「久し」の緣語にいへど、こゝは「しをれ」の緣とせり、原本「しは」の假名を用ひ、汐にいひ掛けたる心なるべけれど、しをるの假名は「を」也

音もたてつべし　聲を立ててないまい泣き出しさう也

逆旅―やどや

わびて―閉口して

町たてわたしたる、あき物する家どもも、さま〳〵行きかふ人の目とどむべき物どもかざり置きて、いみじう賑しきあたりなり。矢矧を過ぎて、よべ聞きし八つ橋もちかきほどと聞く。

いにしへの跡とみかはの八つ橋に其名ばかりを戀ひや渡らむ

池鯉鮒より鳴海にいたる。

はま楸しをれしたびの衣手にうたてなるみのうら風ぞ吹く

日頃むつまじかりつる女どちのあたりもなつかしく、はるかにもへだたりつるかな、又いつか逢見るべきなど思ひ出づるに、音もたてつべし。

別れこしほどもはるかになるみ潟なきて千鳥の友したふなり

今宵はあつたの宮の逆旅にやどかる。小刀やうのものもてきて賣る者おほし。十九日、しばし行きて舟にのりて、桑名に至るほど七里なりといふ。追風吹きてとくつきぬ。又かりそめの宿に立ちいる。家作いとおもしろし。水に臨みてたてたる所なれば、行きかふ舟を見おろして、すどしげなり。城もむかふざまにまぢかく見ゆ。されど海より吹來る風のなまぐさきにわびて、とく爰を出なんといふ。所の肴はまぐりなど調じて

もの―食膳

わたり―あたり、邊

民の―市のの誤か、毎日立ちながら四日市とはとれ如何にとの洒落

つと―土産

名高き地藏―關の地藏

いくそ―幾十

澤山

おもの出す。やがてこゝを出でゆけば、板橋土橋小川など多かるわたりなれど、此頃のてる日に水みなかわきたり。四日市といふ所にやどる。日毎にたつ民の、など四日とかぎりてつけたるさとの名ぞ。

二十日、四日市を出づ。つゐつきといふ坂をすぎて、石藥師にいたる。ぐしたる女などまうで侍るなり。それよりおりて庄野といふ。こゝに小き俵をかしげにむすびて、燒米すこしばかり入れて、童べのもてあそびに賣るを、そのかみ家に在りし時、あづまのつとに人の得させたる、今思ひ出づれど、今日はさる物もみえず。いとながき橋を渡る。龜山を過ぎて、城いときよらに見ゆ。ゆき〳〵て鈴鹿の關にいたりて、晝の程しばらくいこふ。今は關の戸ざしもなくて行きかふめり。名高き地藏ありとて、人々詣でぬる、みづからは心もおもむかねば、物ごしにみやりて過ぎぬ。坂の下より、すどか山のけはしきを登る。河音さやかなるは、八十瀨の浪のこゆるにやとおもはる。田村堂のあたりといふ頃、おもき荷どもおほく擔ひもてくる人々に行逢ひたる、せばき道なればいとあやふし。

鈴鹿山こえていくそのとし月をふりにし道にまたかへるらむ

人生何事多艱險　千里往來山又河　九載遠親今漸近
再經鈴鹿思蹉跎

さ月―五月

なつ衣―たつの枕詞

めもあやなり―美しくて目もちらつく程也

玉も石も云々―書經胤經「火炎崑岡ニ玉石俱焚」

まだあづまに侍りしさ月の中ごろ、佐渡守殿御國へ歸らせ給はんとて、對馬守殿の御前に御暇乞とて入らせ給ひしをりに、妾もかしこに侍ふときかせ給ひて、めし出でて、過ぎにし方のこと、歌の御物語など仰られたるついでに、古鄕に歸り侍るときくは、いつ頃とさだめぬるぞと問はせ給ひたるを、秋の頃にてや侍らんと申したりし、思ひの外にいそぎ立ちて、けふ其御國の近きあたりを過ぐれば、

なつ衣たつ日をはやくしらませば秋とは君に答へざらまし

かにか坂とかや、山の中をめぐり行きて、土山に至りて、今宵はこゝに宿かる。

二十一日、水口の市店に出づれば、商人の家々、いとうるはしき組裳籠の調度ども多く並べ置きたる、めもあやなり。小さくをかしきを少しかひ得て、みつゝ行く。石邊とかいか所に、畫のほど立ち寄る。此逆旅過ぎし卯月の頃、おほくやけ侍りといふ。げに皆かりそめに圍ひたる所のみ、長くつゞきて、あはれに見ゆ。よき家どもはみなやけぬ。小家がちなる所のみ殘りて、僅に人とゞめ、もの商ふなり。げに玉も石もともにやくるといへば、山ならねど此さとにもゑ出でて、かくあさましく、灰になしけるよ、恐ろしき物は火なりと思へば、水と風とも又おそろし。人をすくふものといへど、過ぐれば又人をそこなふめり。三上山のあたりをみやりつゝ、草津川を渡る。草津の驛にいたりて今宵はこゝにかり枕の夢をむすぶ。

# 歸家日記 下

紫式部の云々―式部石山寺に籠り湖上の秋月を見て源氏物語を書けりとの傳説による

みねど―峯、見ねど

もゝひ―喪

山よりふかく云云―續古今十六「都にて待つべき人も思はへず」

廿二日、朝たちて、野路の篠原の名もなつかしく行過ぎぬ。

いとはやも露ぞこぼるゝ秋立つときのふか聞きし野路の篠原

勢田の長橋を渡るほど、左のかたなる石山を見やりて、ゆかまほしき心地す。紫式部の物語かき給ひけん、はるかなる昔なれど、おもひ見る程は、今其をりの目のまへに浮べるやうにおぼえて、

勢多橋上輿簾裏　遙見石山思古人　紫式部名高且遠
光源氏語麗還新　殘峯秋月浮華洛　巡麓江湖通大津
天色水容明若鏡　客心對此洗埃塵

世に殘すことをしきけば石山のみねどこひしきいにしへの人

行成卿の女のおもひにて、かしこにこもり給ひし頃、「山よりふかく入りやしなまし」となげき給ひけん。われは我君の三日月とともにかくれさせ給ひし、見るだにこたび見え

たけく―心儲く、立派に

今井―兼平、義仲の最後に殉じたる忠臣とぢめ―最後の場合

えんに―艷につややかに景氣―けしき、別にけいきと原本に振假名せりえならぬ―言ふにいはれざる

ふし見―臥、伏見

させ給はましかば、いかならん巖をもたけく分けのぼらましと思ふにも、

石山のやまより深くいりてだにかくれし月をまた見ましかば

粟津の森とかや聞きて、木曾義仲の討取られたまひけん昔をさへおもひやらる。今井が塚とて松一もと見ゆ。さるとぢめに至るまで、心をかへずして、ともに亡びけん、ものゝふの本意なるべし。君をいさめて正しき道におもむかしむるは、なほいと難きわざにこそ。比叡の山見ゆ。三井寺も近きあたりにありといふ。膳所とかや、河水に影うつせる城いとうるはしく、日にかゞやかされたる汀をまぢかく過ぎ行く。水の面廣々として、近くなるまゝに、いひ知らずえんに面白き景氣をふくめる事、かず〳〵なり。日もいとよく晴れわたり、秋のなかばの月かげ此水にうつりたらんほどを思ひやるさへ、えならぬ心地す。

行くさきのまだ遠ければ草枕ふし見のさとに夢もむすばず

大津より伏見にいたるほど、商家軒をならべて、家々におとらじと、かず〳〵の物どもをかけ並べて賣る。あづま人を惑すべき、たくみなるうつは物ども多きもをかし。晝やどる所に、物うる女ども多くつどひ來りて、なに〳〵めせなど勸むるも賑はし。物縫

ちから車―荷車

ゆふつけ鳥―鶏、此歌清少納言の「夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ」による

心ゆく云々―思ふ存分御馳走したきもの也

ふべき針など殊におほかるは、是ぞ女の目とどむべき所なる。繪をかく者どももあまた見ゆ。ちから車にかけたる馬牛、隙なく行逢ひたる、うるさくいぶせし。こゝは逢坂山といふ名、何となくなつかしく覺ゆるにも、例の、

逢坂のせきならなくに今は世をへだてはてぬる君ぞかなしき

關の戸もさゝで行きかふ逢坂はゆふつけ鳥のそらねだになし

なほしばし行く。舟どもおほく浮べ、あるひは岸によせたる堤を過ぎて、かりに宿りに入りて、舟にのるべきよそひして、これより河舟にて下る。夕つかた淀のわたりを過ぐ。こゝは石川主殿頭殿の御領なり。此御よめの君は、過ぎにし我君の御子と聞えさせて、故日向守殿の北の方にてわたらせ給ふが、男君はやくかくれさせ給ひて、今は御子達などの、おとなびさせ給へるを、御なぐさめにて、すぐさせ給ふ。ちかき比までまゐりなれて、御心ざしことに、御惠ふかゝりしも、露わすられず。かねて此あたりを過ぎなん事をおぼし宣はせて、思ふまゝなる世ならましかば、諸共に行きて、心ゆくばかりあるじせばやなど、さま〴〵に語らはせ給ひたる、おもひつゞけられて、こぎ行く舟もしばしよどみなむと、いと御なごりをし。水車のめぐりて、御城の内へかけられたる筧に、水

「われも浮世に―金葉集、行雲早き瀬にたえぬばかりぞ水車われも浮世にめぐるとぞ知れ」

しぞく―退く

むつかし―氣がくさ〳〵する

よきよ―よけよ、避けよ

秋の水云々―朗詠「秋水猥來船去遠、夜雲收盡月行遲」

あるじ―饗應

えさらぬ―止むを得ざる

あさて―明後日

目もおどろかる―見てもびつくりする

こゝら―澤山

さなん―左樣に

をまき入るゝが巧みなるも、いみじう面白し。われも浮世にめぐるとぞいはまほしき。むげに近きほどを漕ぎゆけば、いとよく見ゆ。岸のうへに御家の士など番する所にや、りんどうの御紋の幕うちて、ならびゐたるもあり。御城は河水に臨みて築かれたるそこなれば、浪のおし動すやうなるも、たぐひなく見所おほきあたりなり。浪にひかれて下り行くまゝ、岸のうへなる家ども、あとの方にしぞく樣なるもをかし。商人の家、民の家ども、町をたててはるかに續きたり。暮れ行くほどに、火の光星のごとくにて、松の間よりみえかくれす。かなたこなたと、里の名ども聞過ぎぬ。八幡山もまぢかく仰がれさせ給ふ。わが氏の御神と心に仰ぎ奉る。あつかりし名殘むつかしければ、河水をくませてのむに、猶ぬるければ捨てつ。舟のそよ〳〵となるを聞きて、戸を開きてみれば、蘆の茂りたるを分け行くなり。月はまだ出でざれど、星の光にていづくもよく見ゆ。帆かけたる舟ども、おほく引きのぼすが、こなたざまにくるをば、よきよとにや、舟人のたがひに呼ばはりたるも、なに事をいふならんとおそろし。蚊のいとおほくて、扇をはなたず手馴しをれば、打ちまどろむべき暇もなし。益本は積みたる物どもの上にのぼり居て、秋の水みなぎり落ちてと靜にうたふほど、山の端ならで出づる月影も澄みわたりて、心ぼそく哀れなり。かくてとらの時すぐるころ難波につきぬ。舟とめて、こゝに君の御家あづかりたる人のかたへ、かくと案内きこゆるに、きのふ今日かねて待ち居侍るとて、こなたへと有れば、いとうれしくて、乘物して、此人のかたに至りぬ。待ちとりて、夫婦もろ心にいたはり、あるじしていこはせらる。

廿三日、けふはえさらぬ事あれば、あす舟にのるべしとて、今宵はこゝにやどる。益本は隣なる屋に、壁ひとつ隔てゝやどれり。あづまに遣すべき文ども書くと聞きて、わらはも只一つ急ぎ書きてやる。此所までたひらかにまゐり著きぬるよしを聞え奉るなり。あさてなん此近きあたりなる天滿天神の祭なり、こよひより御試樂にわたるありといふ。夕かゝりて、あるじの女房のさそはるゝにより、我もつねに仰ぎ奉る御神なれば、いとよき事なりとおもひて、ともに詣で侍る。さをさしのぼるほど、面白きわたりにて、ころ慰むわざなり。目もおどろかるまでおほかる舟ども、かなたこなたの岸によせならべて繫ぎ置きたる、よきもあしきも、大きなるも小さきも、こゝらつどへる中をこぎとほる。こなたの舟は逍遙の爲に作れる、やかたなどちひさくをかしげなれば、かしこにもさなん思ふらんかし。なには橋とかや、さま〴〵なる名の橋ども、かず〳〵多かる

こちたきまで―仰山なほど
うちがはしく―亂雜にて
こたみ―この度
そこ〳〵―どこそこ、何々の殿樣

下をゆくは、柱にさはりもやせんと危けれど、近くなるまゝに、廣らかに見えて、安くとほりぬ。やゝこぎわたりて、心ざす岸につけて、皆おりぬ。宮居も程ちかければ、すなはち詣でて神樂奉る。いまだ火ともさぬ燈籠ども、こちたきまで懸けならべたり。まゐる人男女いとおほし。明後日わたりぬべきよういして、やかた車などはしらせて、童べおとなども、あまたひきゐありく、いとらうがはしく、傍にさけて是を見つゝ、元の舟に乘る。こぎ歸りつゝ見渡せば、なほ岸の上に在りつる人ども多く車のつなに取りつきて引くめり。これよりよき物見なりとて、其かたにしばらく舟とめて見やれば、童べのさかしき、太鼓うついとはやき拍子にのりて、さま〴〵に物狂はしきまで、をどりさわぐを、大人など居てはやし興ずるなり。やゝ久しく奏でて、もとの道に引き入るゝけしきなれば、こなたも舟こぎ出して、こたみはもときし中島のうしろのかたを漕ぎかへるといふめれど、水のうへはたゞ同じ雲の浪とのみおぼえて、いづち行くらんもおもひわかたず。西の國々領じ給ふ君々の御屋敷ども、岸にならべてさし出引入り、とり〴〵に作られたる、きら〴〵しく嚴重に見ゆ。そこ〴〵の舟ども、御みづからのめすなどは、なほうるはしく、幕のもん鮮やかにいちじるし。暮れかゝるまゝに、おほくの舟どもに火

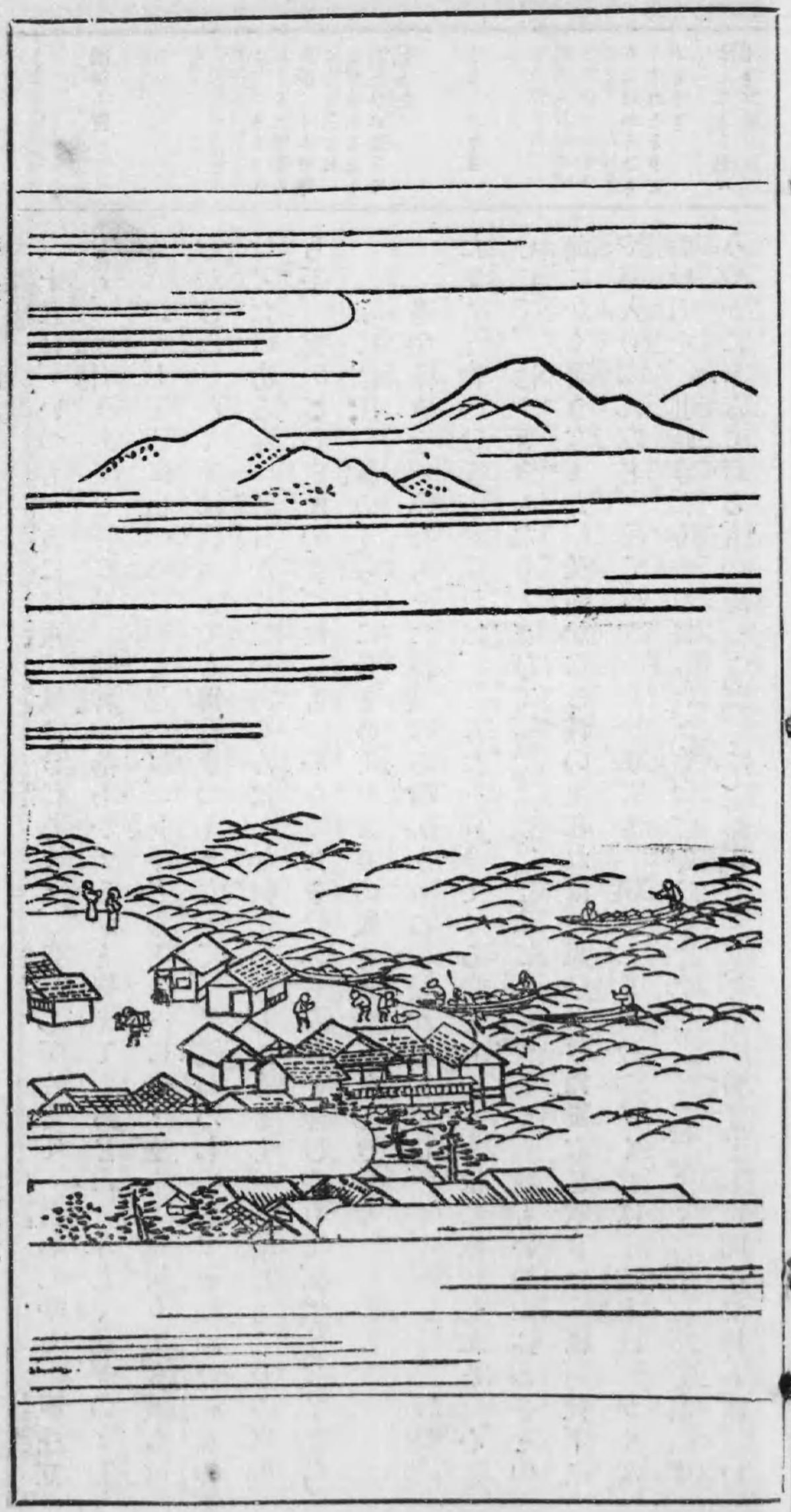
すゐばん―水飯、水ゐけのめし
くま―隈、入り込み
さをの歌―欵乃、卓氏藻林に「棹紅聲」といへるによるにや
夕だつ―夕立降る

たきたるが、苫の隙よりほのかに見ゆるもをかし。歸り入りてするばんなどくひて、みなみないぬ。

二十四日、今日はとくより舟にのるべしといへど、潮まだし、午の過ぐるほどといへば、ためらひ居るほど、物賣る者よびて、あづまにも故郷にも、幼なき子供のもてあそびにおくるべき物など見る。しばしありて、汐みちぬ、舟出すべきよし、舟人きていふ。益本も出できて、是より打ちつれて、舟に乘る。あるじの人ふたりも、おくりして舟にきたり、いとまこひ、行くさきの祝などいひて立歸らる。やをらこぎ出したり。

ふるさとに待つらむ親にしらせばやけふ此浦を舟出しぬとは

しばらく漕ぎゆきて、すこしくまある入江に舟とめぬ。まだ未の過ぐるほどなり。風あしければかくなんといふ。いとせばき所にかゞまり居る。是を常の住家とせば、いかにわびしからましとぞ思はるゝ。あまた泊りする舟どもならびゐて、さをの歌うたひ、かひ吹きなどす。わづかに見出したれば、よべとまりし方は、早多く隔りつ、其かたは夕たつけしきに見ゆ。いくらばかり來つらむといへば、こぎ出でし所よりは三里ばかりまゐり候といふ。かたしく袖の枕の下に、なみの音たかく聞ゆるも、哀れにおそしろ。



鳴神―雷

かくてをあらんは―をは強勢の助辭、こんな事をして居るはながめふしぬ―物思ひに沈みて臥したり

ひま―すきま

そこはかとなき―これととりとめもなき

ゆゝしき―忌々しき

二十五日、いつも明方には東の風ふき侍るまゝ、舟出してんとて、苦おしやり、帆柱立てゝ、錨引きあぐる音など、鳴神の落ちかゝるかと覺えて、おどろ〳〵しく騷ぎのゝしる。かくしてこぎ出づるにやと思へば、舟子どもともへにやゝ立ちて見居りて、風なほむかひぬ、かくては武庫までも得行きつくまじとて、又錨おろしてとゞまりぬ。一夜のほどだにあるを、終日かくてをあらんは、如何にわびしからまし、古郷にもこれをば知らで、雲のけしき風の音づれにも、心をくだき給ふらんなど思ひやりて、ながめふしぬ。

なには江や蘆のうらはに舟とめてたよりの風をまつぞ久しき

身のうきを恨みてもまた難波なる蘆のかりねの長からぬ世に

たま〳〵物のひまより見れば、こなたへ向きてくる舟どもの、まほに吹かせたる、心よげにて、はや著きぬなりと喜びて、帆を引おろすなど、羨しく、我もいつかふるさとの地にかく著きなまし、又遙かなる波の上なれば、思ひかけぬ風など吹きたらば、此下に や落入りなんなど、そこはかとなき事ども、煩はしくいひつゞくれば、益本は、かくなおぼしそ、其時きたりぬれば、思ひの外にかゝるせも有りける物をとおぼし喜ぶまで、すみやかに事なり侍るものを、さるゆゝしき事仰せらるゝを、舟子どもに聞かせ侍らば、い

六十四卦―易の卦

心あらん人に見せばや―「津の國のなにはあたりの春の曙」

くし―屈し

上れおぼえて―上に鳴ると思はれて

ふとちとと―我劣ちとと

そこらとよみあへる―大勢騷ぎ合ひたる

かに腹だちて、いみおそれ侍りなむとてわらふ。げに六十四卦の變通さま〴〵なるも、時といふ事ひとつをなん、大事にし侍ると聞きしかば、などいひ慰む。かくて又あすの曉を待見むといふ。いつしか明けなんと思ひて、苫の隙よりみれば、曉かけて出づる月影、うす曇りて、浪にうつりぬるも、春の曙の心地して、なほ心あらん人にみせばやとぞ思はるゝ。やゝよこ雲のたなびくころ、かなたこなたの舟ども、例の聞きわかぬ事どもいひかはすめるは、すはや出でぬるならんと、頭もたげたれば、益本も外に出でて見きくに、なほ西の風のみ吹きて、舟出す事叶ふまじとぞ、おの〳〵いふ聲す。こは如何なるにかと、心もくしはてゝおもへど、すべきかたなし、けふも猶かくて暮すは。

廿六日なり。夕つかた遙かに見えし山の端、雲おこりて、海のうへやゝくらくなり行くと見るは、夕立のこなたに來れるなり。墨の如くなる雲、俄におそひ來りて、神なり光みちたる、たゞこの舟どもの上におほえて、すさまじきけしきなれば、舟どもおとらじと、とま引きおほひもあへぬに、雨降り出でて、風ふきまぜて、物の音も聞えわかず、浪もいとたかく打ちそひて、舟の内にもりくるとまの雫、いとわびしさ、いはむ方なし。舟子ども小舟に乘りて、綱引きなほし、錨おろしそへ、そこらとよみあへる、はやちと

いふ風ふき出でなんやと危がりいふ。舟もかなたこなた漂ひめぐりて、しづ心なし。戌のすぐる頃、雨はれ風やみて、神もとほく去りぬ。いでやさまざまに世を渡るわざども の、やすからぬ中にも、かた時がほどに心を摧き、身を危くして、うきものは舟人なりとぞおもひしらるゝ。雲さり星見えて、更行くまゝになほよく晴れわたりぬ。すこしまどろみたるに、曉ちかく月も出でぬ。

まどろみたる―うと〳〵と眠りたる

浪まくらあかつきちかき山の端に心ほそくもいづる月かげ

なにはがた風待つふねのかぢ枕いくよあし間に浮寐しつらん

明け行くまゝに、例の舟出しつべきよそひするを、又此度もいかゞなどおもふに、誠にこぎ出しぬる、いとうれし。風も僅かに吹きて、おもふ樣にはあらざめれど、あまり久しきにわびて、先武庫までとこゝろざして出で行くなり。

月も出しほの―月の出づる頃しほの満ち來るをいふ

ふき送るなにはの浦のおひ風に月も出しほのあけがたの舟

ひる過ぐる頃、武庫につきぬ。風又かはれり、しばしこゝろみむとて、舟とめて追風まつ。申の時ばかり風よくなりぬとて、又こぎ出でて行く。北の風つよく吹きて、帆は斜になびきて、船も傾きながら、疾くはしり行く。生田の森も此あたりにや、とはまほし。

かならずいへ―こゝが須磨ですと必ず教へよ

わかぬまに―わからぬ内に

ほのか―帆、仄か

ともすれば―やゝともすれば

津の國のいく田の森にいまもなほとふ人ありや秋のはつかぜ

須磨、明石を過ぎん時、かならずいへと、女していはすれば、ほどなく須磨の浦といふ。風いとあらくふき出でて、浪も高し。

打ちそふる浪の音にもしられけりすまの浦かぜ秋立ちぬとは

そこともわかぬまに、はやく明石にて侍ふといふに、おどろかれて、

いとはやも須磨の浦波うちすぎてあかしの沖に出づるふな人

いと遙かにみえしあはぢ嶋も、いつしか後に成りぬ。

行く舟のほのかにみえしあはぢ嶋せとの追風ふき過ぎにけり

瀬戸をすぐれば、際もなくたゞへたる海のおもて、はるゞおそろしげにて、ひまなく起つ波いと高くうち重りて、日もくれかゝりぬ。舟はともすれば打ちかへしつべく、浮沈みて、乘る人もたふれまろびなんとす。友舟もみなちりぐにふかれ行く。

舟人もむねうちさわぐなみかぜは響のなだに心して吹け

女はわがきぬのすそを捉へてよりふしぬ。

乘風一葉幾浮沈　萬疊奔波蒼海深　這裏難持古賢敬

例は―ふだんは

むとく―一向效能なし

汐むかひ―汐の舟に向ひ來るをいふ

無人岸上說無心

なほおなじさまにて、飛ぶが如くに過ぎ行く。暮れはてゝ星の影浪にうつりて、玉のゝるとぞみゆる。高砂といへど、くらくて能くも見えず。

なみの音松のひゞきも高さごの尾上のかねは聞きもわかれず

爰を過ぐる頃、風すこしなぎて、浪もやゝ靜になりぬ。とくゐじまに到りなむとてこぎ行く。風かはりて、西の方より吹出で、此舟ゐじまにも、え行きつくまじといふを聞きて、益本も立出でて見る。かしこにいとくろう見ゆるは何ぞと問ふに、舟の泊りたるにやといふ聲す。近くなるまゝにみて、舟にはあらず、小さき島とぞいふ。此かげにしばし風しづめてといひて、錨おろして舟をとゞむ。例は舟いるべき湊にしもあらねば、なほ漂ひやまず。とばかり有りて、風又北になりぬとて、喜びてこぎ出す。明方ちかく繪島にいたりぬ。

松が枝のみどりを浪にうつしてや繪島が磯の名をとゞむらん

二十八日、斯て夜も明けぬ。風は何方よりも吹かで、帆もむとくなればとて　引き卸してこぎ行く。やうやく室津にいたりて、汐むかひぬれば、しばし止る。昨日は一ときが

間にあまたの所を吹過ぎぬるを、けふは追風もなければ、一里ばかり行くも、あるかぎり力を出して艪を押すなり。揖保の郡網干といふ所も、我國の君領じさせ給ふ地なり。その前なる海をもおし渡る。くれ行く程に、汐よくなりぬ、追風の吹きなば、唯一わたりのほどに、わが御國につきなん物をといへど、たゞ和ぎに和ぎてしづまれば、ありとあるをのこども、艪を取りて歌うたひつゝ、よもすがら漕ぎ行く。あかつき近くなるまま、又引汐になりぬといふ。舟はこぐ方にはゆかで、流にひかれてしぞくやうなれば、力を盡してもふようなり、爰に船繋ぎてんといふ。大きなる舟の、右のかたに漕ぎくるより、こなたの船にいふやう、船つなぎ給はど、我もこゝにとまり侍りなん、あかつきに出で給ふをりは、さきこえ給へといふ。心得さふらふとて、かなたこなた錨おろす音してしづまりぬ。いづくの誰としらぬものの、たがひにかくいひあへるも、なさけ有りておぼゆ。

二十九日、夜明けてみれば、牛窓なりといふ。

世を渡る身をうし窓の明けくれを漕行く舟のうへにてや見ん

今日はいととく讃岐につきなんといへど、なほ同じさまにて、風なかりしかば、棹もや

ありとあるーある限りの
しぞくーー退く
ふようーー役に立たぬ
さきこえ給へーー其旨御聞かせ下さい
うしーー憂し、牛

すめずこがれ行く。さこそいへ、近づきゆくまゝ、もとみし方の山どもかず〳〵見えて、いとうれし。備前の國にゆく舟路なりといふ方も見ゆ。沙彌島、鹽飽島など、そのかみ朝夕に聞きし所ども、いまぞ目にちかく左右に見る。君の御城、山の間よりはるかにさし出でたる、みどりの松、白き壁、けざやかにて、九年を隔てゝ今またあふぎ見る、めづらしく、嬉しさたとふべき物なし。そこのほどぞ我親の住家ならむと、益本と共に見て歡ぶ。はや岸に著きなむとおもふに、又汐のみつるほどを待つとて、眞島の島のかげに舟とめて、ゆふべを待つほど、千歳をすぐすこゝちす。いつしか父母妹などに逢見んほど、いかならんと、心ときめきして、なにも〳〵思ひわかれざるまゝ、硯もとりやりて、はらから共にとくつきなん事をのみいふ。

けざやかーけは發語、さやかはつきり
そこのほどーあの邊
心ときめきしてーー胸もどきー〳〵して

井上氏女通書

歸家日記　終

井上氏名通、京極備中州刺史家臣儀左衛門之女、幼而慧敏、讀書賦詩、兼通和歌、夙以雅才聞焉。刺史母夫人召之武江、使侍左右有年、英才名籍甚、一時喧傳。先妣素善倭歌、聞通之才喜寄書、唱酬往來、交情甚厚。母夫人下世之後、嫁三田茂左衛門、歸于讃州丸龜。此一冊其紀行之作也。女子之有才藻、而閨操貞正、若通者近世所罕覩也。況先妣之遺愛莫過焉。故書之以傳之云。

元祿庚辰仲秋日　　跡部良顯跋之

正德六年丙申正月穀旦　　皇都書林　六角通御幸町西街　柳枝軒茨城信清　繡梓



水上すみてながるゝ河も、おちゆくするゑとなりては、やう〳〵あらぬ蘆芥にけがれて、つひにもとの清きすがたをうしなふ事あり。詞の道もまたかくのごとし。上れる世のみやびかなりし手ぶりも、あまたの年なみをわたりては、いつしかとさとびたるならはしごそ多くはいで來にたれ。かれいにしへはみなもとなり、今はすゑなり。その源にありては、もとめずともおのづからに清みゆくながれに從はむ事はやすかるべきを、後にありては、あくたをはらひて、ことさらに清き瀨をたづぬるわざなれば、いとかたしともかたしや。わが友清水濱臣のぬしは、詞の學に廣く、文つくるみやびに心ふかき人なるが、この比たけ女が道の記を得て、おのれにかたらく、女房の日記といふもの、今の世にもやむごとなき殿のあたり、おくまりたる宮のうちなどよりもれつたへたるには、心にくきかたに人のおもへるたぐひもこれかれあれど、よく見もてゆけば、これはしもと取り出でていふべきは猶少し、しかるを此道の記を見るに、いたくも書きけるかな、世のかいなでの類にはあ

らずといふを、かへさひよみてあぢはふれば、けにも詞の源をよく汲み知りて、清きみづぐきの跡をぞとどめたる。今このなずらひをいはむには、いにしへの女房のなかにこそもとむべけれ。さるは蜻蛉紫にほはしき筆ずさみにもはぢず、また更科十六夜のあてなる口つきにもおとらぬは、いとこそめづらかなれ。そも〳〵いかなりし人のむすめぞと問ふに、そはくはしくもしらねど、そのかみよるべなき露の世をかこちて、はかなきふせやの月にうたへるうかれめの流なりきとなん聞きつるはといふ。さはいへ、むぐらにとぢられたらむあたりに、かくまでかぐはしき花はいかでかおひいでけむ。もしはもとのねざし賤しからぬが、よにはふれたる、玉淵がむすめの類にはあらぬにや。

平春海

さゝなみの屋のあるじ、ふみのうみにあさりして、よにめづらしき玉に貝に、かづきいづるわざにいそしかるが、このごろひとつの玉をなむえたりける。そのたまは、わたつみの神のいつけるとしもなく、あまのあかるたまのつくれるにもあらず、となかのいくりにまじりたりければ、なみ〳〵のあまならましかば、たゞに見過すべきを、しらなみのやへをりの上をかしこしともせず、やしほぢのしほのうづしほをわけ、千ひろのそこひをきはめてしも取り得たる眞玉になむ有りける。かくいそしきあまにしもあらざらましかば、もにうづもれて、知る人もあらじを、よにあらはれいでしは、この玉のさきはひといふべくなむ。にしごりのをぢのはしがきにつきぬれば、なにをかいはむ。たゞことゝはぬま玉にかはりて、よろこばしさのひとことを、ことあげするのみ。

橘千蔭

# 庚子道の記

武女

女は云々―禮權弓下「婦人不越」疆而弔」人」あまの子―朗詠「白浪のよする渚に世をすぐすあまの子なれば宿もさだめず」さそふ水―古今雜下、小町「わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」うちとけて―後撰戀五、「こひしくばかげをだに見て慰めよわがうちとけて忍ぶ

女は疆をこえずとこそ、ふるき書にもいへ。されどそはうるはしき人の上なめり。あまの子のよるべなき身は、さそふ水にまかせて、西へ流れ、東へさすらひて、つひの終さだめかねぬるぞ、あはれにあさましきわざなる。しかりとて如何はせむ。此春は故郷のあづまの花に催されぬ。七年あまりなれし人々のなごりも大かたならねど、なほおやのおはさん方に心いそがるゝを、かのうちとけて忍顔なる心になんあると、人の思ひくたさんも、さすがにやさしう、はたわづらはしきすぢなりけり。かくいふまでは、なほ尾張のくに名古屋なりき。二月二十日あまり七日のあかつき深く旅立ちしに、細うかすかなる月の、霞のそこに見えたる、れいよりもことにあはれなり。

あすもまた見つゝを行かん月ながら此あかつきは涙おちけり

がはなる」くたさん―けなさん　やさしう―恥しく

琵琶の音に云々―治承三年妙音院太政大臣師長公を尾張國井戸田へ流罪の事、又熱田明神公の琵琶の音に感じたる事など盛衰記、平家物語等に見ゆ

古き道の記―増基法師の遠江の道の記、藤原孝標女の更科日記などに見えたるをいふ

つく―ことづく、依頼す

八橋―伊勢物語三河の國八橋といふ所にいたりぬ（中略）その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり云々

ひぢかさ雨―俄か雨　六帖「いもがかど行過ぎかねつひぢかさの雨もふらなんあまがくれせん」久方の雨といふ枕詞より轉訛せるならん

難波わたり―更科日記にも「難波わたりにくらぶればなどめでたくうたひたり」と見ゆ、古謡也

だみたる―訛りたる

ひたくけぬ―慣みなくなりたる意

しり給ふ―治め給ふ

草のかきはも云云―治平の世にさる事あらんや

熱田の鳥居濱にいづるほど、夜あけにけり。井戸田といふ所は、いにしへやごとなき人の、しばし住み給ひしあとなり。琵琶の音に神のめでたまひけんなど、いとかしこし。鳴海をすぐとて、

うきにさへなれて鳴海のあまたゝび浦の濱路を行き通ひぬる

といへど、今は浦づたふ道はおきて、上野の道のなほ上をぞゆきかふことになんなりぬる。尾張と三河とのさかひ、志賀須香といふわたりせしよし、古き道の記どもに書けれど、今はさるわたりありとも見えず、境川とて細きながれのあるに、土橋ひとつかけたり。これまでおくりにとて來し人のかへるに、尾張にその人のもとにとて、文かきてつく。

うかりしも今ぞ戀しきしかすがに住みこし里を出ぬと思へば

としごろ尾張をすみうくのみ思ひしに、三河にかゝる程は、さすがに名殘も惜しかりけり。ふみのことばにも、志す故郷にとくつきてなど書きしを、れいのわびしき心よと、あとにさへ言ふなるべし。八橋は中將のいこひ給ひし所なり、今もかきつばたの咲くにかあらん、道のついでならねば、よそになして過ぎゆくものから、

かきつばたへだつもあやし心にはかけつるものをぬまの八橋

二むら山はあとなりけん、宮路山は此あたりなるべけれども、矢矧の里すぐるほどより、名さへなつかしからぬひぢかさ雨とかふり出でて、簑つけし馬いづらなど、從者ども立ち騒ぐほど、いぶせき籠のうちにありければ、ものも覺えず。藤川といふほどより、日もくれしなるべし。御油の宿に宵すがりて著きぬ。こゝには女どものあまたありて、たはれ男の心とるけしきなり。難波わたりなどうたかにもあらで、たどだみたる聲して、さかしらに口迅なるものいひ聞ゆ。

おのづからみもひたゝけぬ旅やかた恥しと思ふ人しなければ

あなかま、女のほこりかなるは、人のにくむにをといふ。二十八日つとめて御油をいづ。吉田といふ所の橋をわたれば、左にをかしき山の見ゆるを、人にとへば、石卷山とぞいふ。このあたりしり給ふ君のうへに、もし不思議の事あらんとては、此山の鳴る事ありとぞ。草のかき葉も言やめし世に、ある事にかはとあらがうて過ぐる人もあり。高師山は文字にかきけるがいみじう目だたし、いづれの山に何をか敎へて、さる名をばおひにけん。又みやこさへまだしと思ふに、山の櫻咲きたるもあやし。

と論じて通る人もありと也、祝詞の文句に取るたかし山―夫木　爲家「たかし山ゆふこえはてゝやすらへばふもとの濱にもしほやく見ゆ」
白菅―枕冊子、「渡は白のわたり」今の白須賀也
荒江―今の荒井ろく―祿、褒美　かづけさせ―賜ひ

板田のはし―萬葉十一「をはりだの板田のはしのこぼれなばけたよりゆかんなこひそわぎも」

濱名川―夫木、澳、土御門院小宰相、第二句入汐さむきと有り
荒江―荒井

客舍云々―原句「客舍幷州已十霜、歸心日夜憶二咸陽一、無端更渡二桑乾水一、却望二幷州一是故鄕」をこなり―馬鹿らし
舟こぎりて―同舟の人一同、伊勢物語の句にとる
曳馬の宿―濱松　ねのび―子日　繁伸

道いそぐをちかた人もとまりけりたかしの山の花のしたかげ

潮見といへる坂の上よりは、遠江のうなばらはる〳〵と見わたさる。たかし山ふもとの濱とよめるは、此わたりなるべし。馬おふ男のかたりけるは、十年ばかり昔の事なりけり、難波よりあづまへかよふ舟の有りしに、この白菅のみなとちかくにて、あらき風にあひ、舟は岩にあたりてくだけつるに、帆ばしら楫などの折れたるにとりつきて、十一人乘りたるもの、一人もしづまでたゞよへるが、日數十九日經しとぞ。二十日にあたるあした、荒江の沖にてつりするものどもの見つけて、あはれがりて、おのが舟にたすけ乘せ、關所にまゐりてかう〳〵と申しつれば、よくもつかまつりぬとて、公まできこえ上げ、ろくなどかづけさせ給ひけり。さてかの舟人どもの中にも、老いたるが一人なくなりて、殘はみな事なくながらへつゝ、今なほ難波にかへり住みて、年毎にかの釣人のもとに消息し、むくいすとなん。けにかばかりの不思議の命もあるものにやあらん。濱名の橋は跡だにさだかならず、過來し里の名に橋本などいふ所のあるや、昔のなごりならむ。板田のはしならば、せめてけたよりも行かんを。

名のみなほ聞きこそわたれ東路のはまなの橋は跡だにもなし

小宰相の君の歌に、「濱名川入しほ遠き山おろしにたかしの沖もあれまさるなり」とよみ給へるも、此所なるべし。たかしの濱、高砂の沖などは、和泉にあるをぞ歌にはよめる。また濱名の橋は入江にかけられし橋なれば、濱名川とよみ給へるもいかにぞやなどいふ者のありし。さはれくだれる世の人のいかで古への事をばさだむべき。荒江ふねにてわたる。けふは風もなく、わづらはしからず。唐に賈島といへる人の、幷州といふ國に久しう住みなれて後、都にかへりのぼりける時、桑乾といふわたりすとて、思ひつゞけたりしからうたの、今身のうへにあひたるをふと思ひいでて、いといたうあはれにて、いくたびか誦しけるに、文字五つ六つかへたれば、惡う聞ゆるも一つは興あり。

客舍尾州已七霜　歸心日夜憶二東陽一　無端更渡二新江水一
却望二尾州一是故鄕

かく誦するををこなりとて、舟擧りて笑ふ。なにかさのみはおとしめ給ふらん、才も不才もみな故鄕ひとつはもたるをといふを、又笑ふもをかし。舞坂につきぬ。なほ行き行きて曳馬の宿にやどる。

ひめ小松ひくまの野べのかり枕げにねのびする人ぞおほかる

いぎたなく―寐坊なること、玆は寐ざう惡き義に聞ゆ

濱松の音は―「ざゝんざ」とはやす也、足利義敎公富士見に下向の時、こゝの松のもとにて濱松の音はざゝんざとうたひて酒宴せりとぞ名づめて、颯々松といひ、野口村の田圃の中にあり。

まじめ―源氏紅葉賀に見えたる女

みさかなには―備馬藥呂、伐家

「わい〳〵んは、とはりちやうをもたれたるを、大君きませむこに何よけん、みさかなにはひさだをるぜよけむ」

道につかれて人々のいぎたなくしたるを見て、忍びやかにかくつぶやけば、例の口さがなさよとて、今宵も制す。引馬野ははやくより濱松ともいふなり。げに濱べの松どもの、おほく生ひたりしが、風にふかれて颯々となる音のいみじうめでたく聞ゆ。人のかしづくむこぎみなどの來り給ふに、酒のみたちて、濱松の音はとをのこどものうたふは、この所よりのことならんかし。

濱松にあらしふく夜はことさらに大君きませいざ二人寐む

女ともだちのわかくじちえうなるは、かほうちあかめて、なほわびし、かゝるそゞろごとは、源内侍などこそいひつれと惡むに、あらず、よのつねの人こそものはぢはすべかめれ、あそびの者の上らうらしきは、いまやうならずとて、みさかなになによけん、あはびさだをかかぜよけんと歌へば、何につけても皆をかしやとて、ほゝとさへ笑ふ。二十九日、濱松を夜深に出でぬ。雨ふり出でて、よこざまにしぶくめり。あけぬ程、わびしさいはんかたなし。天龍川わたるとて、

舟さして雲の水脉ゆくこゝちしぬ名もおそろしき天のなか川

圓位上人のはづかしめられ給ひけんむかし人はいかに、棹の雫ならでもたもとは濡れぬ

圓位上人―西行法師、天龍のわたりにて乘合の人にうたれたるよし、西行物語に出でたり

毛をふき―漢書武帝紀「吹毛求疵」

承久のむかし―承久三年七月中御門前中納言宗行此宿の柱に、題したるをいふ

光行朝臣の云々―海道記に「さよの中山にかゝる（中略）此所はその名ことに聞えつる所なれば、一時のほどに百たびたちとまりて打ながめゆけば」云々とあるをいふ

水おちて―東坡後赤壁賦「山高月小水落石出」



べし。見附の宿、

さらでだに毛をふき疵を求む世に見附といへる里の名ぞうき

懸川葛布おほし。

かけ川にさらす葛布かすならぬ身のうはぎにといざ求めてん

承久のむかしを思ひいづるに、菊川いとあはれなりや。袖しきかぬるとよめる歌のあるに、けふは雨さへ降りて、げに私の旅ならば、やどらまほしきなり。

今もなほかやがのきばに雨もりてむかしおほゆる菊川のやど

小夜の中山は名高きところなれば。今いふもさらなり、光行朝臣のかき給へるものにも、いと面目あるさまに見ゆ。

齡はまだ三十がほどに往くと來と八度こえけり小夜のなか山

夕ぐれ大井川の水まさりぬれば、駿河へわたらで、金谷にやどる。

晦日、雨はれて日うらゝかになりぬ。河原へ出でて見るに、やゝ水おちて石いでたり。されどもとつ瀬わたるほど、今やさかまく水におちいらましと、おそろしさいはんかたなし。辛うじてむかひにつきぬ。後思ひ出づるだに、筆ふるへて、そのをりの事大かた

あうよりて―奥の方へよりて

式―延喜式神名帳

花のたよりにつけて―社頭に花の咲き匂へるにつけて始めて神社のあるに心づきしと也

柳さび、もろ眉！ともに烏帽子の名、柳佐比は無位社人等の著用、諸眉は摂家等の公達著用

宇都の山越―伊勢物語の越にとる

精進物云々―枕草紙「思はん子を法師になしたらんこそはいと心苦しけれ、さるはいと頼もしきわざを、唯木の端などの様に思ひたらんこそ、いとほしけれ。精進物のあしきをを食ひ」

たゞ春の日に―新古今春上、壬生忠見「やかずとも草はもえなんかすが野はただ春の日にまかせたらなん」けそう―顧證、あらは

かんざしも云々―禮内則に「女子十年不出（中略）十有五年而笄二十而嫁」

面影に立つ―其様子が目の前にちらつく

家もひろく―一門も栄えはびこり

はもらしつ。ふせ屋の板敷に尻かけて、しばしおくるゝ人まつほど、

大井川みづおとたかきよひ〳〵は岸のとまやに夢もむすばじ

とおもひやらる。島田の入口ひだりのかたへ、並木の櫻うゑわたして、あうよりて玉垣しわたしたる社の見ゆるを、いかなる神にかおはすると問へば、大井の神とをしへぬ。いづれの神をまつりけん、式などにのり給へるかしらず。幾度か廣前をすぎながら、花のたよりにつけて、今日なん見いでたてまつりたる、

なほざりのぬさとは見えず神垣にはるの手向し花のしらゆふ

瀬戸川をわたるに見ゆるを、烏帽子山とをしふ。柳さびなどのいやしきにはあらで、もろ眉のかすみにこもりたるが、いとをかしと覺ゆ。宇都の山越に、修行者二人三人あひたり。むかし物語のけしきにはあらで、馬に乘りて行くなりけり。法師などは、いつも徒歩にてやつれたらむが様よくやさし。此行者どもは肥えあぶらづきて、常に精進物のあしきをくふとは見えざりけり。彼にそどろなる文などことづけたらば、物ゆかしがりて、己まづ開きても見るらむとおもひやるも、罪ふかくや。山の岨に菫のさきたるを、

やよ菫こゝろにまかす旅ならばひとよはねなんうつの山べに

みやま木の中に櫻の咲きたるを見つけたるは、誠にしるべ得たる心地して、めづらしくも哀にもぞ覺ゆる。散りて谷川にながるゝ様、はためでたし。

雲と見え雪とちり行くはてはまた花のなみたつ宇都の山がは

丸子の宿のうしろの山に、火の高くもゆれば、うちおどろかれて、あれは如何にと問へば、蕨のため燒くなりといらふ。たゞ春の日にと思はるゝに、風さへ吹けば、いと心もとなし。

春の野に下もえいそぐ早蕨をさのみは人のやかずもあらなん

阿部川のほとりより暮れかゝりて、賤機山もけそうには見えず。

鶯のこゑのあやめもわかぬまではやくれそむるしづはたの山

こよひのやどりは江尻といふ所なり。そのかみかんざしもせざりしほどにて、伯父なりける僧にぐして京へのぼりし時、此宿に伯父の僧のしれる人あるが、三保の松原見せし事ありき。家のうしろより舟さし出でて、富士は更なり、伊豆、駿河、海越に信濃の山山さへ見えわたる景色、今も猶面影に立つ心地す。松原のうちには、三保の御神のみやしろおはす。祝などの妻子具したるが、家もひろく、從者などの多くて住むなり。よそ

すゞなるめ云云―飛んだ思ひなする、めに目を見るの目と海布とを掛く世の中の云々―白氏文集太行路「巫峽之水能覆舟、若比人心是安流」の意にとる

神の御厨―祭祀の料とすべき神社所有の財産をいふ

ふんやのすけ云云―圖書助相當正六位下

もたる―持ちたる

三保は姫神―或書に引ける駿河風土記に依るに祭神御穂津彦命御穂津媛命、御穂津彦は大巳貴命、御穂津媛は其妃なりといふ、二神出雲國三穂ケ崎よりこに遷座し給ふ故に三穂の神と名づくと也

屋のむねより云云―「賀茂大神をさし奉るなるべし、その上し山城風土記に委しく見ゆ」と原本の頭註にいへり

おとすげし―年が上なりし

殘月云々―元政法師身延道記に、此詩七言古詩にて、起句「殘月送吾清見關、面頭猶見三穂邊」とあり

こゝろぶと―心太、ところてん

奥―奥州

折―今の時候

今めきたる―當世風の

すそご―上をぼかして下の濃き染め方

鹽尻といふ名の云々―伊勢物語に富士を形容して「なりはしぼより見し樣は、海原の中にさゝやかにさし出でたる所なれば、さこそ心ほそう、すゞろなるめのみ見るらんと思ふに、そこに到りて見れば、さもあらざりけり。波の音風の聲などこそ騒がしけれ、それも世の中のわたり苦しきにくらべては、いつもなぎたる心地こそせめ。神の御厨の、昔より寄せられたるあれば、朝夕のけぶりたゆることなしとぞ。宮司は太田といへるが、ふんやのすけにて、六位のものなり。娘一人もたるを、いたうかしづける樣なり。客人のある時は、必ず此娘に箏すゝめて、其夜もひきけり。呂律のしらべにこそあらね、筑紫箏の賤しげなるも、鄙には有りがたう、珍らしう聞ゆ。三保は姫神におはすればこそあれ、彼屋のむねよりおよび給ひけん神などのあたりならば、親のいかに心もとながらんとをかし。娘は己に三つ四つもおよすげしやうに覺えたれば、嫗にやなりにけん、いかに緣などさだまりて、子などもたるか、それと迭にものなど聞えしことはなかりしも、旅寐の物寂しきにつきて、かゝる人の上さへ思ひ出でられてこそなつかしかりしか。三月朔日、江尻をいでて、興津のあひだ、かの名だたる松原見えたり。

清見がた霞のまより見わたせば浪にたゆたふ三保の松ばら



深草の上人の、母をぐし奉りて身延へまうでゝ給ひしに、「殘月我をおくる清見が關」とつくられしは、からうたなれど、えんに聞きなされて、まづ思ひ出でらる。今は波のみ關もりて、むかしのあとはなけれど、猶心はとまるなり。蒲原へかゝる山道の左のかたに、岩もる雫のしたゝるを、清げにものにうけて、こゝろぶと賣る者あり。此水は九郎義經の硯の水といひつたへぬ。冠者にて奥へ下り給ひし時、此水のもとにて、都への文など書い給ひきと、まのあたり見しやうにいふを、皆人いみじがりて、折はまだ寒けれど、心わかう水のむもありけり。浮嶋が原より、富士の山ちかく見ゆ。いたゞきには雲のたなびきて、肩のほとりより雪いと白うかゝり、裾はすべてみどりに見ゆめり。今めきたるすそごの几帳など立てたらん樣の、筆にも言葉にもいひつくしがたきけしきなり。鹽尻といふ名の、あてにも聞えぬを、京極中納言のにくしと思ひ給ひけんも理なりや。

ちりつもる山てふ山をかさねてや名高きふじの峯となりけむ

かくて千本の松原を見やりつゝ、沼津の宿に屋どる。二日は關をこゆとて、夜ぶかく宿をたちて、星の光やゝしらむころ、伊豆の國府につく。三嶋の神の御社の前にしばしいこふほど、女はさはりがちにてえ詣でず、心ばかりのぬさ奉るついでに、

しりの様にたむ有りけりる」といふを釋して、定家郷伊勢物語勘物に「事凡卑也不可用之」といへるをいふ　さはりがち―兎角さはりがち―多くて、此時月經なりし也、和名抄に「月水俗云佐波利」　みしま―見、三島　何某の僧正―金葉、權僧正永縁「きくたびにめづらしければ時鳥いつもはつねのこゝちこそすれ」この歌によりて初音僧正とよばれし事袋草子に見ゆ　緣の林―賦を緣林といふ事後漢書光武紀に見ゆ、世に知らぬものは即ち賦にて、凡て文のあ

行き歸りみしまの神の宮よりもふりぬるものは我身なりけり

はこね山に入るに、初音が原といふ所をすぐ。枯れたる杉のむらだてるうちに、鶯のひなどもの巣だちたるが、多くなくをきくに、春ははやおくれたれど、猶めづらしき心地す。何某の僧正にきかせ奉らましかば、郭公ならでも覺すらんよなどいひて、すける人々は歌よむもあるべし。みつやなどいふあたりは、緣の林しげりたる蔭をたのみて、世に知らぬ者の、旅行く人をわづらはせしこと、昔は有りしにこそ。今は里人の家居もあまたたち續きて、道ひろき御代なれば、心ゆるして、馬の上、輿の内などにある限りは、ねぶりてさへも行くなり。山中といふ所に糸櫻の見ゆるを、

玉くしげ箱根の山のいとざくらあけなばいかゞ夜のみぞ見む

といへば、月の夜などはこの歌もあはれならんとて笑ふ。げに旅にていひ出づることは、常のに今ひときは劣りて我さへ覺ゆれど、後引きなほさんもものうくて、さて置きしなり。午の時ばかり關にいたる。山のかひにはくぎぬきしわたし、關屋には弓やなぐひなどきら〳〵しう置かせたれば、ことなき身にも胸つぶれ、手足さへぞふるふ。かしこき影とたのみつる笠も扇もとられたれば、つくろはぬおもてに、ふくだみたる髪のこほ

や也　くぎぬき―柵の類　かしこき蔭―枕草子の文に取る、力と頼みたる意　ふくだみたる―ぶく〳〵になりたる　あえてけり―びつしよりになりたり　あそびくぐつ―遊女、傀儡師、本文の筆者武女は遊女の流也　節はさつき―枕草子「せちは五月にしくはなし」とある文による　空さへ醉へる―菅家文草卷五、花時天似醉序に「春之暮月月之三朝、天醉于花桃李盛也」　巳の日のはらへ―上巳の節　鹽木―鹽を燒く

れかよりて、いかに見ぐるしからむと、汗あえてけり。さはいへあそびくぐつの類は、人のほかなる定ありとて、いさゝかのさはりもなく通し給ひつ。嬉しとやいはまし、悲とやいはまし。今日は坂あまたこゆるに、山駕籠も不要なりとて、歩み苦しき石の上を、徒歩にてたどりけるまゝ、いといたう勞れ困じぬ。畑、湯本、風祭、小田原、節はさつきとかや。されど彌生の三日こそ心もはなやぎて、桃のにほひに空さへ醉へるけしきは、あやめの長き根も、かけて及ぶまじうおぼえたれ。早川の瀬わたるほど、巳の日のはらへおもひいでて、

早川にくだす鹽木をあまの子の身のかたしろと人や見るらん

川をわたれば、酒匂といへる里なり。こゆるぎの磯ちかき苫屋の内にも、ひゝなあそびするをとめどもは、桃、山吹の花などこちたきまで瓶にさし、けふの日のくるゝををしと思へる樣なり。野に出でてはゝこなどつむもあるは、今日のもちひの爲なるべし。七年のむかし此所を過ぎけるは、九月九日にて、別れ來し親はらからのことなど思ひ出でて、悲しかりしに、今日は一二日のうちに逢ひ見ん事をおもへば、うれしきあまり、心さへときめきして、それとなくうち笑みがちなるを、かたへなる人らは、ものぐるほしきに

やなども思ふらんよ。明日は府にまゐれば、公私の用意ありとて、男のかぎり、皆戸塚の宿にといそぐまゝに、一人のどかにも行きがたくて、同じ様にやどりにつきぬ。三日の夜より雨ふり出でて、つとめても猶やまず。金川、河崎、品川などいふ驛々もたゞ過ぎにすぎ來て、芝にまゐる。こゝより大路のさま、たかき賤しき袖をつらね、馬車たてぬきに行きかひ、はえ〳〵しく賑へるけしき、七年のねぶり一ときにさめし心地して、うれしさいはん方なし。その夜は御館にありて、三月五日といふに、ふるき家居にはかへりぬ。いふかひなけれど、親族のかぎり、近はをばいとこなど待ち集りて、とりどりに何事をいふもまづおぼえず。幼き妹の一人ありしも、いつかねびまさりて、髪などあげたれば、我方には見わすれたるを、かれよりうちいでんもつゝましくやありけん、をばの後にかくれて、なま恨しとおもへる氣色に見おこせたるまゝ、猶心得ずして、そこにものし給ふはいづれよりの客にかおはす、ゆゝしげなることには侍れど、過行きはべりし母のおもかげに、あさましきまで似通ひ給ふめるはと問へば、かれはうつぶしになりて、つらももたげず、をばもはなせまりてものいひやらず、皆はと笑ふにぞ、はじめて心づきぬ。かくて盃あぐるほど、老たる父のさゝ目にいますが、やがてまる

鮒の新かたし　ろ―形代、身の形を作り罪咎を被ひ負ふせて流しやるもの
はくこ―ひきよもぎ
ときめきして―どき〳〵して
ものぐるほしき―氣がふれたる
ねびまさりて―立派に成人して
うちいでん云々―言葉を掛けんも恥しくてや
あさましきまで―餘りなるまで
つら―顏
はなせまりて―恐しさのこみ上げたるをいふ

り給へり、と妹のいふ。

庚子道の記　終

いでやむかしよりあそびくゞつやうのものの、言の葉の道にその名きこえ傳れる、世々に數少なからずなむありける。そがなかにも、おふけなく勅撰をけがせるたぐひをいはゞ、古今の白女、後撰の檜垣、後拾遺に宮木、詞花に靡、續詞花に阿古麻呂、千載は戸々、新古今は妙、玉葉は初若など、又さらぬ後の冊子どもにも、撰集抄に江口の尼がくちすさびを載せしより、盛衰記の侍從、湯谷、平家物語の祇王、承久記の龜菊、曾我物語の虎がともがら、皆人にもしられ、時にもゆるされしなるべし。しかはあれど、たゞ一つ二つよみ出でたるが、人の耳にとまり、鳥のあとに殘りつたはれるのみにして、はかゞしくしるしおける物らも見きゝおよばず。さるはおのづからみやびたる世のならはしにひかれて、をりにふれしすさびわざなるべければこそあれ、たれかは歌の林を分け、詞の泉をくみて、深くしも心に思ひいれたるならむや。かの檜垣のおうながやうに、家集さへ今に殘せるは、まれらなる事になむ。こちよりて二三百年がほど、みやび事のやうゝおとろへ來にしより、宮のうち、殿のおまへなどに、めしまつはせる女房だちすらも、物がたりぶみめけるものつくりいでたるなむをさゝ聞えぬ。いとちかきころ、なにがしのおもとが松陰日記とかいふなるふみかきつゞれるを、今の世のめつらしき事には常々いふめれど、あまりくだくだしきに過ぎて、ひとわたり見るだに目のいとまたへがたくおぼゆるを、それはた此頃の女房、たれひとりまねびも得つべきあらむ。こゝに此一卷かき日記せし武女といへるは、享保のころほひ、いとさかえ花やぎたまへるそれの殿の、うつくしみ時めかさせたまひし白拍子にてありしとぞ。それがはじめをはりさだかにも聞きつたへねばしらず。今この筆ずさびを見るに、たゞに言葉うるはしく書きあやなせるのみにあらず、その心高くおもひあがりて、されたる口つき、かの紫の物語、清原のさうしなどを、よく腹にあぢはへずして、いかでかはかくまでうまくしもいひおほすべきや。よりて思ふに、いにしへのあそびくゞつどもにもおとらじ、今の世のなま歌人たちにもまさるべくなんおもひめでられぬる。かくあまりにをかしくもめづらしくもおぼゆるからに、いとまのひまゝ、引歌や何やと、赤き青き墨して、かたにかしらに筆そへおけるを、さらに清くかきあらためて、板にさへゑ

りてむと思ひなりしより、今年文化といふ年の四とせ、ながつきとをかまりみかの夜、清水の濱臣、しのばずの池のみぎはなる、さゝなみの屋のおばしまにより居て、月影にたどたどしき筆をとりて、そのよしいさゝか書きつくるになん有りける。





# 伊香保の道行きぶり

倭文子

若者墨一筆

大明元年二月十五日に書る。伊勢国にて又也

うら〳〵と明くる朝よりしもよ、物のけはひ改りて、大路も遙かに霞むものから、清う見渡さるゝに、振りはへつゝ行き交ふめる袂どもの、とりぐ〵になまめかしう覺えて、先こそ野邊の遊はゆかしけれ。やうく〵咲くと見し間にうつろひもて行くを眺めつゝ、散る花の心のいそぎを知るく〵も、菅の根の長き日影にならひて、物おだしう、萬の事も忘るゝ樣にて、徒にのみ過いなんは、あやなの業なめりと思ひとれど、遠き野山を分けむことは、知らぬ霞の心もおぼつかなくてあるに、猶思ひたつ事の侍るめるついでに、かみつけ野の伊香保なる出湯あみてんとて、母刀自のそゝのかし伴ひ給ふれば、彌生の十日まり一日になん出で立つ。又親とか云ふべくおぼゆるわたりより、送り聞えて、伊香保風引き給ふなよ、猶雪も消えぬあたりと云ふをなどありて、

けはひ―氣色、樣子
霞むものから―霞めどもなほ
振りはへつゝ―古今集「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ」
菅の根の―長き
の枕詞
物おだしう―心がおつとりとして
あやなの―あやなき、つまらぬ
出湯―温泉

母子の草―原野に自生する草、ひきよもぎともいひて三月三日の餅の中に交へ搗くもの、母と子との旅寐に掛けたる事いふまでなし

みかのもちひ―三月三日の草餅立ちの急ぎに―旅立ちの仕度に取紛れて、むち鳥のは立ちに掛る枕詞

いとによる―古今集「糸によるもの物ならなくに別路の心細くもあるかな」

もはゆるかな―もろそけ―もろそか、粗末し―一夜寐ぬべし―萬葉「春の野に菫摘みにと來しぞ野をなつかしみ一夜ねにける」

公より云々―扇鈴をいふ

をこになりて―はか〳〵しくなりて

雲のまよひ―雲の立つに途を迷ひて、新古今「一聲は思ひぞあへぬ郭公たそがれ時の雲のまよひに」

むすび―掬ひ上げ

遠近人―遠くの人近くの人、誰彼

そこはかとなく―どこといふ事なく

人來―鶯の鳴き聲、古今集詞書歌「梅の花見にこそ來つれ鶯のひとく〳〵といとしも居る」

よしなしごとはすれど―つまらぬ口はたゝけどたづきも知らぬ―「をちこちの

野邊はまだ夜はの春風さむからし母子の草の枕からすな

と侍り。實にみかのもちひも時過ぎつれば、今は假寐の枕にやと思ふもをかし。人々心ばへあるも多かりけれど、むら鳥の立ちの急ぎに、はかなき跡をも留めずなりぬるはわろかりき。父のみのさりげなうもてなし給ふがさらなれば、いとによる物ならなくに、そがひに心ひかれつゝ、かへり見すれば、梢ほのかになりにたるを、たどことに、

父にわかれ母にしそへる心をばゆくとやいはん歸るとかせん

と云ふ程に、何時しかも田舍だつ家居の、おろそけなる竹垣もめづらしう、武藏野は菫の色濃きところなりけり。見はやしつゝ行くに、おのがじし一夜寐ぬべしなどはいへど、玆は過ぎて、大井てふ驛に宿りぬ。朝けの駒の鈴の音して行くは、我も勇む心地せり。昔公より賜ひたるをならしつらんがうつりて、さらぬ馬どもの頭に、小くてかくるにやと、知らぬ事を云ひ定むるもをかし。空少し明りたるほど、春の野の朝露に、淺綠なる梢どものほの〴〵と霞み渡れるは、たとふべきものなんなき。人めなげなる垣ほの櫻の、わび顏にうつろふがをかしうて、守りゐたるを、主と覺しくて、手なふれそといふべき氣色してあめるを、をこになりて、

惜むともたゝん嵐は如何にせん散る花ごとに手をやさへまし

と覺ゆるも、何時の程にか路行き人の心にはなりにけん。入間の川を渡り行くに、山寺の鐘の音聞えて、哀なる雲のまよひに、いかで遲れけん、ほのかに聞ゆる鴈がねを、人人あはれがる。

わかれには田のもの鴈もわびぬめり心よりにし三吉野のさと

となん云ひて、さかもとてふ所の山の尾上に、山吹のいみじう咲渡りて、岩間行く水の音なひも、こよなう心行くけしきしたれば、人々よりてむすびなどす。猶かくてやはとて行くに、元より道知れる人しもなくて惑ひたりけり。遠近人の行交もあらず、山人のつま木のみこゝ彼處にこりすてたるが、すゞろに覺束なく心細し。たゞ鶯のそこはかとなく木の深き方に鳴くを、かゝるをりは呼子鳥こそたより有る心地せめと人の云ふに、實に人來と厭ふはことの外の心にも有るかなど、よしなしごとはすれど、たづきも知らぬとのみ唱へられつゝ、それが中に、年有が、

こしかたもこの行末のおく山の奥にも春のうぐひすぞ鳴く

いたくなわびそなど云ひつゝ、男どちは事ともせず、辿り惑ひて里に出づ。今宵はしま

たづきも知らぬ山中にぼつかなくも呼子鳥かな」

日數とともに―日數が重なると共にほど〳〵しき―へこたれてしまひさうになるあらはに拜まれ―開帳なるべしたのもし人にて―力にしてかげもり―影森、大宮の西南一里、武甲山の下

望の夜―十五夜

さゝやきたる―私語したるつぶ〳〵と―ありありと

ぶの寺に籠りぬ。日數とともに尊き御寺どもを行きめぐるが、峯高く谷深ければ、心がまへすれど、路の狹き程は、あまたゝびほど〳〵しきにも、經の聲々山彦も答へあひて、いとこそ物の悲しう覺ゆる折なれ。此度は此寺々の御佛のあらはに拜まれ給ふとて、あるとある人、老たるも若きも、杖をたのもし人にて縋りたる、よそめもいと苦しきや。暮れゆく程、しものかげもりに宿りなんとす。妙見山と云ふ峯より、望の夜の月のさし登りたるは、此世の物とも覺えず、母刀自、

春の夜の花ににほへる月影の妙なる光いまこそは見れ

年有、

嶺高き霞のひまに影もりの里の名しるき春の夜の月

行き〳〵てさゝのと云ふ寺にもなりぬ。此御佛は、つかうまつりつる殿にむかへいれ奉れ給ひてしよなど、覺えつるまゝにさゝやきたるを、そこなる法師のとく聞きて、さらばとて彼の姫君の御ために奉れたまひし、御はたや何やと取う出てけるは、いみじう哀れにて、有りつる御さま、つぶ〳〵と思ひ出づるも胸ふたがりぬ。

露深き笹野の奥に分入りて今日はた袖をぬらしつるかな

ことにも出でず―口に出しては

いはず千鳥の云々―よろめく貌

ゐひずり―笈摺

巡禮者などの背に著る一種の薄布のそでなし

むづかしかれば―うるさくあれば

わたる瀬川―渡瀬川、今は「わたらせ」と讀めり

きれ―女みこ

雨づつみ―雨を避けて家に籠り居ること

足曳の―山の枕詞、直ちに山を指していへり

空に知られぬ―新古今集「櫻散る木の下風はさむからで空に知られぬ雪ぞ降り

と覺ゆれど、かの耳ときがうるさくて、ことにも出でず、おほかたに物して立ちぬ。きく水寺と云ふらむあたり、平かなるにも、皆人なやましうて、足は山邊なれど千鳥のあとふむらん樣にてぞ行く。水泳てふ寺に、おひずりてふもの納むるとて、よに田舍めいたる女の、ひとつ所に寄り居てさへづるが、かしがましうむづかしかれば、此處もさるべき程にていでつ。わたる瀬川てふ川は、武藏と上つけ野のあはひにぞあなる。をちかたの雲にまがひて見ゆるは、信濃なる淺間の嶽と、この心ざすなる伊香保嶺なりとなんいふ。いづこともなく遠ざかひの名所とのみ聞きつるを、かく見やるぞあはれなる。來と來て妙義の御山に參る。きねが鼓音あやしう、少女子が打ふる袖もゆゑよし有りげには見えねど、さすがにをかし。立出でなんとするに、今も降りぬべき雲のけはひすれば、雨づつみしなど人々のゝしり聞えて行くに、いづこともなく風のさそへるは、如何にやなど云ひて、ふと見やるに、足曳の遠き近き、雪と覺しきまでの櫻なりけり。里吹く風に亂るゝは、空に知られぬなど云はれて、過ぎもやられぬを、人は暮れぬめりと云ふ。さかし葛城の雲かは、いかでなど云ひしらふ。

散る花を衣手ごとにつゝみもてかゝる山路の思ひ出にせん

ける」

うしろめたし―不安心なり　如何にぞや―如何も即泊め申す　譯には參りすまい　さく枕―歪枕、笹いほに寝ぬる意にて旅寝の事　いもねられず―熟睡もなし得ず　しのくめの云々―夜の明くるも待ち兼ねて出發せり　かちゆのぼる―徒歩にて登る　いづこ云々―呻吟し　の邊から―何がしざるか　何がしが嶽―淺間山　わたり―邊、それ、伊香保の沼

と覺ゆるまゝに、つか短き筆をとうでて、そこの石に書きたるを、刀自も其かたへに、

よしさらばちりかひ曇れ櫻花やつるゝ袖のいろにほふまで

道もたどゝしかるを、思ふ花によりては恨みやらで、やゝ里になりぬる程、雨少し降り出でて、行先うしろめたしとて、そこなる伏屋に、如何にぞやなどいなめど、しひて留りぬ。ましばのかきほもなにも、やれくつがへりて、影あらはなるに、軒さへもりていとわびし。更行くまゝに、玉水あはれに音するを、ならはぬさゝ枕はいもねられず、いとど袖の暇なき心地して、まことにうしと思へば、しのゝめの空もまちあへずて出づ。あきまの里てふあたりは、夢の樣にて過ぐ。榛名の山はいと神さびにたり。指を立てたらん如き巖多くて、峯のよそめなど、繪にしもまだ見知らぬさまなり。かゝる所はとて、おりてかちゆのぼるに、えもたへねば、傍に寄りて憩ひゐたるを、三人四人によびつゝの ほる女の、あな心うや、いづこばかりよりぞなど問ふがしたしまるゝは、足柄の關の山路ぞ覺ゆる。何がしが嶽は霞みて烟も見えわかず。伊香保の沼と聞ゆるは此わたりとかやいへど、知るべもなし。此大神の御手洗とて、いとゝ大きなる沼のあるやそならん など、人々おしはかりに言ふめり。かくてゆあむべき所に至りて、兎角する程に更過たり。よべわびしくて、やみのうつゝにて明せしかば、今はと打やすめたるものは、身じろきもせず。日たけて起出でて見るに、葎の青うおひなりて、しどろなる垣根のなかば隱せるも、折にふれてあはれなり。外面の梢どもの中に、櫻の一木まだ散らでたてるを、皆人花より外になど云ひてまもる。年有が、

伊香保風加何なる人の教へてかこの花ばかり吹き殘しけん

あはれなど言ふ程に、木のもとにわらはべ數多より來て、長きしもとどもをもて打散すめるは、帳のかたびらおほはまくし給ひけんをさなごもおはせしぞかしなどいひて、人人にくむ。

吹く風のさそはんよりもいはけなきこの下に散る花は恨みじ

とたはれごとは云へど、心はゆくよしもあらねば、二人三人立ちいでて山邊を行くに、昨日見つる花は半まり散り過ぎて、綠深くなりぬるは、春も暮れはてぬめりとて見やるに、遠方の峯のいと白きは、花にだにしもあらで、雪なりけり。

奥山は花よりのちの雪もあれば雪より後の花も見てまし

ふと思ふ事を歌の樣に云ひなせるを聞きて、或人、六月の望迄待ちつけつとも、其夜ま

やみのうつゝ―くらやみの中の物事又は心亂れたる時の現象の意にいふ、こゝは所謂輾轉反側の意なるべし　花より外に―金葉集「諸共に哀と思へ山櫻花より外に知る人もなし」　しもと―つゑ

いはけなきこ云云―幼き子の花を散すは恨むまじ、こは子と木とを掛くまり―餘り　花よりのちの―花散りて後までもなほ消え殘りたる　六月の望云々―十五夜、萬葉集

人丸「富士のねに降りつむ雪はみなづきのもちに消えては其夜降りつゝ」の歌による

しろひ―騒ぎ

ゆくりなく―思ひ掛けず

衣更ふべき時―四月一日の衣更へ

しるし―記念

ひし〳〵と―落雷のはげしき音を形容したる也

すいがい―透垣

夜はすがらに―夜通し

た降らんには甲斐無らましやなど、いひしろひつゝぞ行く。此かたへにある寺は、ゆあみする人を守ります御佛のおはすと云へば、参りたり。御前に短册に書きたるものはとて、取りて見れば、

秋ふかき山の紅葉を手折つゝ手向けんとすれば幣とこそ散れ

となんある。おもほえず珍らしければ書きつ。ゆくりなく雨の降り出でつるに、あわただしくて立歸へる程止みたり。今は衣更ふべき時にもなりぬれど、猶ありしまゝなり。

今日ぞとて更へなばさすがつらからん花の香しめし旅の衣を

しるしになど覺ゆるも、さすがに旅のなさけなりけり。或夜さり雨風烈しう物騒しき心地するに、神さへおどろ〳〵しうなり出でたるぞ、思ひ掛けねば打驚きて、堪へねばふとうつ伏したる儘に、頭の上とも何とも思ひ敢へず、ひし〳〵としつるは、魂今ぞ失せぬると思へり。偖暫く暇有るにきけば、只此すいがいのあなたに落ちたりけりと云ふに、おそろしなどは云ふも更なり。世の常にだにもあらず、かうしも人少なかれば、夜はすがらに、心ぎもの消えうする事數多度なり。朝けに、氣色やみたり、見よと云へば、はしに出て見るに、かなたの嶺は墨を磨りかけたる樣にて、雲のまよふこそ物おそろしけれ。

ごほ〳〵―雷の音の形容

今しも―今頃の時候にても、しもは強辭

きさぐり物にして―手でもちやにしながらむべ語りするは云々―尤もらしく話をするはいやなものなれど

あらぬ響―とんでもなき響、雷鳴をいふ

くし―屈し、氣がめいり

つま―端

されば よ晝つかたまたごほ〳〵となり出づ。かくてはとて、家長の住む所へ皆うつろふめるにも、すべて生きたる心地やはする。申の時過ぐる程には止みつれど、名殘なほけ畏しうて、起居ん心地もせずなん。今しも寒き所なれば、大きなる平るろりに、榾とて枯れたる木の太らかなるが、長さ三尺ばかりあるを三つ四つ打ちくべたるが、暖に火のおこりて、烟も無ければ、人々そこに圓座してあめり。主の翁髭をまさぐり物にして、むべ語りするはうたてあれど、かゝる時には賴もしき心地もせられて聞きをるに、此湯の水上は、此處より見ゆる高嶺より落つる水の、火石と云ひて岩二つあるに觸れて、かく湯となるぞ、いと怪し〳〵などいふのみぞ耳留られたる。夕つかた空も晴たれば、もとの所へ歸るに、かの櫻はいと哀れに亂れたり。

伊香保風吹く日吹かぬ日しのぎ來てあらぬ響に散れる櫻か

とぞ獨りごたるゝ。今はくし果てわびしかれば、湯あむわざさへ物うくて、されたるおばしまのつまのいはの上におりて、つく〴〵と眺め居たるに、楓の木の若葉色深くて立てるは、

なつ衣かへて程なき旅ながら憂きめに秋の花をこそ見れ

やうかへて―趣異なりて

ぬばたまの―黒の枕詞、烏は黒きより其枕詞として用ひたる也

ほど〳〵しう―はか〳〵しからずしてとれつたく

わはさかちじ―我はかけ離れじ

くゝだち―巫立、大根の蔓などの稱、菜をいふなるべし

今一つの物―

とのみぞ覺ゆる。辛じて八日に立出づ。そこらの家どもの軒に、みな藤の花を挿したり。此里にはいつも斯く習はしたりと云ふ。實にやうかへて、郭公も聲洩しぬべきものなりけり。今朝の空氣色よからず。

浮雲のかなたこなたに立ち迷ひおぼつかなくも何地行くらん

と云はれたるを、誰もさ思ひわぶる程にて人々哀れがりけり。斯て行くに、ぬば玉のからす川を渡る。よに早き水に逆ひてのぼる舟どもは、棹もさしあへぬにや、下り立ちて引くなる綱手のくるしげなり。野田のわたりも水の速きに、舟の得耐へず下るめれば、引渡したる綱を手操にくりつゝ渡すを見るは、ほど〳〵しうなんある。しもつけ野の佐野の舟橋は名のみ残りて、其川だに何れならんといふ。

たが中の佐野の舟橋さのみなどかけ絶ゆるまで取り放しけん

わはさからじと云ひつるこそおふけなきなめれかし。佐野の何がしが家居とや、繁き木の間に深う見ゆ。岩舟出づるなど云ふ尊き寺を拜み廻りて、夕つかたに宿とりぬ。實によきくゝだちなど調じたるを、なはあれど今一つの物のありげにもあらざめりなど云ひて、男どもは笑ふを、あなかま、みゝなし山かはなど云ふ人もあり。此家の刀自は此頃旅

酒、さかなといふ「な」はあれど今一つの物はなからんとなりあなかま―あゝかしましし、しいツと云ふに同じく他の言を制する言葉

みゝなし山かは―先きの人はつんぼならんや、聞えぬべきをとの酒落

酒ほしみたる―酒をほしがりたる「今一つの物」といひたるだに―下に「示させ給へ」など補ふべし

立ちて、娘なるぞさかし人なりける。傍に古びたる草紙引き散らしてあるを、徒然なるまゝに取りて見るたるに、如何にをかしき御心ばへもあらんと思ふたまへらるゝを、かきやり給ふらん御手ならひを見聞えばやなど、小き男の童して云ひ出せるを聞くに、彼酒ほしみたる男、にはかに口閉ぎなどするもをかしかりき。さるは誰が云ふならんと覺束なくて、鄙の長路の寞に、さるべき心ばへどもも、袂の下りとともに迷ひ果ててなん侍る、御もとにこそおはさめ、旅の心も慰めんに、こよなかるべし、かたはしをだになど答へやりつれば、暫く有りて同じ童、小き紙に書きたるをもたり。見れば雨のうちに郭公を聞くてふ題にて、

五月雨は事とふ人もあらざるにつれなく過ぐる山郭公

又戀とて、

思ひきや霜夜のとこに松蟲の音をのみ鳴きて歸るべしとは

となん。此松蟲は蟋蟀をふと書き損へるにもやなどいふ人もあり。とまれかく情ありげなる人ありけりと、怪しうて問へば、此童のはらからなりけり。思ひかけず、人ゆかしう覺えて見やりたるに、いたくきたなげなるものを著て、何にかあらん彼姉と囁いてい

せな—夫
ゆくりなき—突然こゝに來りたるにて別の縁もゆかりもなき道のつちに云々—つちは面、道中の疲れにて心屈したればその勇氣も出でずして
つとめて—翌朝されば—それ御覽遊ばせ、蛙の鳴くは雨を呼ぶなりといふ我言の的中をはこる也
たけきわざかは—えらい事ならんや
ふたち—二荒、日光山をいふ
のたふびし—宣ひし
まねびやらん—形容すべきさうぞく—裝束
ゆゑ〳〵しき—重々しく由緒あり
すめらぎのおほん使—勅使
武藏の大城云々—將軍家よりの上使
みあらか—御社
かゞやかし—氣きり恐し
我かと行きて—古今集「秋の野に人まつ蟲の聲すなり我かと行きていざとぶらはむ」
聲—郭公の鳴く聲
いさや—否然らず
をぐらかす—心をかきくらさし
木ぐれ—木の下闇
神—雷鳴
むくつけき—きびの惡き

にたるは、せななりといふに、見驚くばかり似げなくぞ侍るは、いかなりける事にか。さるべき人の時失へるならんと思ふに、悲しうさへ覺えられて、ゆくりなき道行き人といへど、一夜の宿もさるべきにこそと思へば、問ひ慰めばやなど思ふ物から、道のつちに心くしにたれば、甲斐なくて靜りぬ。つとめて急ぎ立つにも、よに名殘多くて、又こそ尋ねきこえなん世もあらめ、彼所へも立出で給へかし、何てふ所尋ねて、必ず宿り給へよなど云ひて分れつるが、人していはせつ。

この宿も心はとめつ郭公つれなくすぐると思はざらなん

とて行く〳〵猶如何なるにか斯く迄は思ふらんとあやし。道のつちの小田どもに、蛙の聲々なくも、何となく哀に聞きなさるゝを、こは雨を呼ぶなりなど、供なる人のいふを聞くには憎くなりぬ。頓て降り來れば、さればよといふ。何のたけきわざかは、よきさが言合せたらんをりは、如何ばかりほこりかならましなど、人々苦しき物から笑ふ。かくしつゝ過ぐる中にも、ふたらのお山こそあれ、今は二荒てふ字のこゝをもて、日光の宮とまうすとかや、古事しれる人ののたふびしなり。此お前はまねびやらん言葉もなし。年毎のおほん祭のさうぞくとて、事々しきさまにしもあらず、ゆゑ〳〵しき淨衣姿何となく床しげにて、はたすめらぎのおほん使の、又武藏の大城よりとておはせしなど、さるあら山中に、紫も赤も綠も、みあらかの玉に黃金にきらめきあひたる、いと尊くかたじけなし。近きわたりの人々物見んとて、かぎりしらず立ちわたる中に、旅の宴かどやかしかれどいかゞはせん。夕づけて淸たきてふほとりを行くに、松に掛れる藤の散りがたになりてをかしきを、をらばやとてある人の、

たれをかもまつにかゝれる藤の花思はぬ風のとはゞあやなし

我かと行きてなど云ひ居たる程、五月待つ間の聲ほのかなりつるは、僻耳にやと、其處なる人に問へど、さなりと云ふも、又いさやなど答ふるも侍るめれば、如何ならんと辿られて、

やよやまて深山出づなる郭公この初音しもをぐらかすべき

と詫びぬれど甲斐なし。今はとて立歸る山の木ぐれの夕ばえに、神とどろとなり出でて、すゞろに心細う覺ゆるを、葉隱に二聲なんふりでたるは、いとむくつけきもの紛しの忍び音よとは思ふ物から、さすがに聞得にけるに、先の覺束なきをさへはるけぬる心地すめり。此處は黑髮山とも云ふと人の語りければ、

はるけぬる—晴らしたる　いはけなき—幼けなき　なりはためけば—ごろ〳〵とはげしくなればさめ—うすちぎそこよろぼひたる—澤山見すぼらしく立ちたるむね〳〵しう—重立ちたるらしくゆゑはゝげ—ゆゑありげかしあるじゆかしう—主人の人柄も奥ゆかしく　けさう—化粧　おほどか—おほやうにこせつかずあなづり—あなどりくゝだち—前の大根の時の一條人わるかちん—きまり悪からんうるまのしまの—千載「おぼつかなうるまの島の人なれや我ゐちむるを知らず」うるまの島は琉球にて言葉の通せざるにいふ　えれんじかねて—我慢がしきれなくなりてだい—憂、食膳　夜のもの—寝具　物ごりに云々—前に話の通ぜざりしにこりて二度と會ひもせぬ故所につけて問ふべき事も問ふ能はずして明したり　したゐまるゝ—つひこつそりと笑を催さる　きゐる—かすむ、くらむ　しりへ手にいぬる—どん〳〵後方に走り行く、舟の速きさまそがひ—うしろの方　そがひに見ゆる—萬葉「つくば

振り分けの黒髪山のほとゝぎすまだいはけなき初音なくらし

とおぼゆ。雨降出でて、此度はおどろ〳〵しくなりはためけば、集へる人々濡れそぼちつゝ、足を空にて亂行くは、物見る心もさめにけん、室の八島はえ尋ねずなりぬ。衣川てふ邊に宿り求む。そこらよろぼひたる家どもの中につけては、少しむね〳〵しう見えて、庭の木立、遣水の心ばへなど、ゆゑはゝげなれば、入立ちてむかひ居るに、あるじゆかしう覺えらる。刀自もさや有りけん、せうそこいひ入れたり。三十ばかりの年ならんと覺しき女あるじの、けさうしつゝおほどかにて立出づるは、田舍びてもあらず、あなづり難うはづかしげに思ふに、過にし佐野のくゝだち思ひ出でて、かくても心の情や如何ならんとうち思はる。靜まりてとりなし云ひたるに、愛敬づきたる口つきよりは、言葉こそ得も聞きわき給へ難かりけれ。如何にせんと思ひ煩へど、人わろからんと思ふ給へらるゝに、刀自はようういらへし給ふが、此方の事をしも知らぬ顔なるは、うるまのしまのとおぼゆるを、彼方もえねんじかねて逃げていぬ。如何に思ふらんと、我さへはしたなう、いとかたはらいたき業なりけり。今宵は同じだいも淸らに、夜の物も、程經給ふ旅の料は珍らしからじとて、ようしたるをかしなどしつゝ、情ある人には侍るものを、物ごりに二度とだにたいめもせねば、處につけて問ふべき節をも、すべなくてあかしぬ。此處はさのみ名殘惜むべきよしはあらず、只彼うるまの島ぞしたゐまるゝ。かゝるもはた旅の心やりなめり。そこの川より、やがて舟漕ぎづるに、水いと〳〵早くて、目もきるやうなれば、うつし心もうせぬ。岸の上行く人、松の木立もしりへ手にいぬるかと見ゆるが、空の雲さへぞそがひに流るめり。からうじてさるべき處よりのぼりて行くも、猶浮きたる心地せり。人々も心まどひやしけん、道まどひたり。徒に小松の生ひたる野原を遠々に過ぎつれば、筑波の山を遙に見つけたり。さて櫻川に到りぬ。是はみなの川に流れ會ふめり。とばのあふみは何地などといへど、しる人にあはねば口惜し。筑波ね近うなりぬ。そがひに見ゆるとよみけんあしほ山も實に見ゆ。山のみこそ世に昔より今も變らぬ物と思ふに、何とはなくて哀とみやらる。ま草苅りて歸るあげまきどものあるに、しるべさせて、麓の里に宿れり。終夜寐もいらねば、峯より落つらん水の音松風にたぐふに、花たちばなの香も折々通ふは、昔の言の葉覺えて哀なり。かゝる時郭公はいかで訪はぬにやあらん、たゞなるよりは思ひ殘す心地せられて、やをらおきてむかふに、月は朧なるが、二つの峯は見えて、何となく心細き程、遙になのる聲するは、

ねのそがひに見ゆるあしほ山あしかるともがさね見えなくに」あげまき―角髪の子供　昔の言の葉―慈鎮和尚四季の今様に、「花橘もにほふなり、軒のあやめもかをるなり、夕ぐれざまの五月雨に、山郭公なのりして」　ちはひ―さきはひ、我に幸を授け　たゝずまひ―様子　筑波根云々―「筑波根のこのも彼のもに影はあれど君がみ影にまさず影はなし」「筑波山は山しげ山茂けれど思ひ入るにはさはちざりけり」二歌による

いつ聞きしよりも哀と覺ゆるを、歌よむべき心地もせず。かく更けたる夜に、しらぬさかひなるをと思ふも、心細さやるかたなくて入りぬ。此峯には、女神男神なんおはしける。神もちはひ給ふにや、今日はいと晴れて侍れど、岩のたゝずまひなど怖しげに見ゆれば、峯までは登らずなりぬ。母刀自、

餘所にのみ見てや過ぎなん筑波根の神のみ前にたてる白雲

とぞある。我も伏し拜みて、

筑波山やまの雫に立ち濡れてあふぐに高き峯の姫神

おとに聞えしみなの川は尾上より落るを、年有、

みなの川岩に碎くる白波は峯より落つる花かとぞみる

とて、男は高根も何も立越えて、ほこりかにて歸りぬ。さて幾日かも此峯を見つゝ來にけんとて、同じ人、

筑波根をこのも彼面に見つゝ來ては山しげ山今日ぞ分けぬる

となん。其夜も此近き里に宿りて、ほのぐと明くる頃出でて、かへりみすれば峯は白雲ところ〴〵にゐて、朝日にほへるけはひ、似なうきよらなり。ふと或人故郷出でて今日

とはは―十日、二十日　をよび―指　歸らまく―歸らまはしく、歸りたく　もだしくて―氣も落ちつきて　復や來ん―また來られやうもなければ、序にゆつくり見物せんしをゝにて―びつしりと繃れて　枕がみなれば―枕もとに打ちひびくなれば

は幾日ぞと云ふに、早うとをはたと云ふも餘れるに、今更に驚かれて、すゞろなる事にも有るか、人は如何にをよびを折りて待ち給ふらんものと思へば、俄に立歸らまくなりぬれど、母のぐし給ふには、よろづおだしくて、猶復や來んなどぞ思ふ。あはの大神の社と云ふ有るわたりより舟に乘りて、鹿島へとて行く。風立ちて波かしこう打寄せたるに、浮島とか云ふ岸に著きたり。雨さへそゝげば、苫の雫に袖もしをゝにて、如何にせんいかにせんとのみ云ひあへり。

世の中はかしこき波を過ぎ來ても身の浮島に猶ぞよりける

とぞ云るゝ。やう〳〵そらの氣色やみつれば、舵取端ぎつゝ漕ぐに、申の時過ぐる程に鹿島に著く。世に云ふめる要石、高天原のまなし川など教ふる物から、さる事は目も留らぬが、たゞ大かたの樣ぞ、實にふりにたるあたりとおぼしくて、見どころ多かれど、彼波風に魂失ぬるけにや、しるさんも物うくて、たゞ、

鹿島なる浦の荒磯神さびて波の白木綿かけぬまぞなき

とぞ云ひたる。此處は入海にて、長閑なるべう覺しきに、終夜波はたゞ枕がみなれば、目もあはすべきよしなし。耳馴れぬ音のかしがましきには、寐ぬ物から思ひやる事も

足がり小舟―足輕（アシガラ）小舟なるべし、輕くして疾き小舟の稱といふ

程にを―程に早く取らん、をは強勢の助辭

うきめ―憂目に海布を掛けて刈ると續けたり　松―たい松

みるめならで―あまの縁にていへる洒落　居なみ―居竝び

なし。明けぬればやがて舟立ち、、、向ひなるいきすの浦は、海士の子供の磯傳ふも近く見ゆれど、足がり小舟ならねばや、巳の時ばかりに寄せたり。海士の住む宿もけしきばかり見えて、青海原は遙に秋の木の葉を浮べらんやうに、百舟漕渡りつゝ、心ゆくあたりなり。宮居もいと神さびて、昔べの故ある事とかや聞きつれば、くはしう問ひも見もせばやと思ふを、風たゝぬ程にをなど急ぐには、所をしも見置かば、後にもこそとてなん。又香取へ行くほどの舟にて見れば、ほのかなる沖の小島に、白き鳥どもの立ちゐるは、波かあらぬとぞあやまたる。この舟寄する程に、波いと高う立ちて、舟こぞりて濡れつ。宮居拜みて、又漕ぎづるは怖しかれど如何はせん。

夏ごろも香取の浦のおきつ波かゝるうきめもかるやあま人

とぞいはる、宿るべき處まではえゆかで、松ともすべう闇くなりゆくはすべもなし。かぢ枕して明さんも、立ちこん波の心うしろめたしとて、あやしうすゝけにたるあまが屋に、みるめならで宿を借る。哀にわびしき事かぎりなし。程なき處なれば、皆居なみつゝ、袂のしほれなどあし火して乾すも、いとやつれゆきて、ともに海士人の姿に異らぬにやと思へば、

鳴く一聲に―古今「夏の夜の臥すかとすれば時鳥鳴く一聲に明くるしのゝめ」　さることに―樣子變りてさるかたにさうぞき―田植は田植だけに其向にそれ〳〵洒落こみて　鳥いよ〳〵白し―杜甫「江碧鳥逾白、山青花欲然、今春看又過、何年是歸年」　よご―草の名に夜子の意を掛くゐぐ―千陰の說に「東國にてはことといひ土佐人はゐぐといへり、葉は蘭に似て小さく、根は白く小き芋ありて味少しゐぐし」かみづふさ―上總

浦波に濡れにをぬれし袖よりもあまがほしけん衣からばや

とぞおもほゆ。鳴く一聲に明行くも、なか〳〵樣かはれるところのあさけをかしう見ゆ。やがて追風よしとて漕出づ。沖行く船どもの眞帆を引きて、舟子どもうたひつれつゝ、いみじう心地よげなり。今は陸にしなり行けば、何時の程もなくさまことに見えて、さなへとり〳〵うゝるは、里もとどろに賑ひて、おのがじしさるかたにさうぞき、ならべる笠どもの白きが、青きなへの中に見ゆるも涼しきを、鳥いよ〳〵白しなど、男どちはずしあへり。田歌を聞けば、

よごをひろふと畫田は植ゐずあだし男の夜田をはふ

とうたふを、皆人打はやしつゝ行く程に、萬葉にゐぐとるとよみしとかやは、ゐぐはへの事にて、田などに多きものなり、かみづふさ人は、よごといへるぞと、賀茂のぬしの云ひたふびし事、ふと思ひあはせられて、只なるよりは興あり。又おほかた謠ふものは、五つ七つのことばして物するを、此田うたは、本を七つ七つ、するを七つ五つと云ひとぢむるよ、こも一つのはうしなるべし。夕つかた一むら里のかきほに、夘の花のいと多く咲きつゞきたりけるを、又も波のたち來る心地するはと云ふに、こよなの物ごりやとて、

賀茂のぬし—眞淵　はうし—拍子　道ゆきづと—道中のみやげ

袖のまよひ—袖のころび、和名抄に「紕萬與布　繒欲」壞也」　つくましう—恥しう　にほどりの—枕詞　つめ—集め　物から—物ながらも



人々笑ふ。今は明日ばかり歸りつきなんと云ふを聞くに、物あらたなる心地せられて、道ゆきづとも思ふばかりはなかるをなど思ふも、今更めきたり。紅の花多く見ゆる里あり、

紅のするつみはやし染むるとも袖のまよひは隱れしもせじ

とのみ覺えて、見知れる人めつゝましうなりぬ。にほどりの葛飾わたりには、ゆかり有る人侍れば、今宵は其處にとて行くに、其邊なる松原の見ゆる程、いはん方なく嬉しきも、故郷に變らぬ松風のおとづれも、此處には有りぬべう思へばなり。さるははかなういひ思ひし事を、かく書きつめたるは、人笑へなる業ながら、己が物から、後見んには心慰む物とぞ聞きしゆゑ。

伊香保の道行きぶり　終

都—京都　あからさまに—かりそめに、つひ一すまかりまうして—ふ暇乞ひして　道行ぶりに—旅行の途上に　なはざり—通り一遍　ことわり物し—辨じ　行く手云々—旅ならずとも考へ得べき事なるべけれど　なぐさ—なぐさめ

# 旅のなぐさ　或は西歸といへり

賀茂眞淵

久しくもなりにけるかな、都の誰彼いとむつまじくなりにたるにつけて、おもへども猶こひしきものは、故郷にぞあなる。いでやあからさまにゆきて來なんとて、やむごとなき御わたり〳〵、まかりまうして、卯月の末にたちぬ。稲荷の神づかさなる、非藏人なる、其ほか一人二人、關までとて送る。此たびは道行きぶりに見えたらん所々書きつめて、やむごとなき御わたりにも奉れかし、なほざりならんは何のめづらしき事かあらん、ふるき名所などのよこなまりいふなどを、ことわり物したらんや、わろからじとあるに、げにも古きことは、行く手ならでもかうがへつべかめれど、旅のなぐさに心ゆかん時書きつけんずるは、ねぶりさますわざならんとて。

山科に御廟野といふ野あり、その所の山ぞ天智天皇のみさゞきなめる。山しなの鏡の山

額田王の御歌―萬葉卷二「從二山科御陵一退散之額田王作歌一首」とある長歌

やまとぶみ―日本紀

日嗣のみこ―皇太子

おきて〻―掟てて、命じ定めて

かぎり云々―墓側に奉仕すべき期間も經過して各自分散する時の

ひがこと―僻事、間違

あらぬこと―飛んでもない間違

に此みさゞきあるよしは、額田王の御歌にぞあなる。うべも圓なる山のかたちなれば、さは名づけたるにや。さて此すべらきは、御馬にのりていでましゝに、行きませる所をしらず、沓の落ちたる處を御さゞきとせりなど、紹運錄といふものに書けり。すべて此ふみはあとなしごとのみ多きぞかし。やまとぶみに此みやまひあつしくませる時、おほとののうちに日嗣のみこをめして、後の御事をのたまひおきてゝ、かみあがり給へることと見え、萬葉集に、御やまひしたまへる時の大后のみやの御歌も、かみあがり給ひて後のもあり。かのみさゞきに御墓仕せるつかさ〻の人そのかぎりはてゝあがるゝ時の、ぬかだの王の御歌もあれば、近江大津の宮にかみあがりまして、此山にをさめ奉り給ひしこと疑なし。又ざうゝろくには、田原の天皇とも申し奉るとあるよ、それは此すべらきの七柱にあたれるみこを、志貴のみこと申せしが、光仁天皇の御父にましましゝかば、追崇みて春日の宮の天皇と御諡奉り給ひ、田原といふ所に御陵のあれば、田原のすべらぎとも申し奉りしを、正しき史をもうかゞはで、ひがことしけるなり。さて天智天皇は後の御世の法をさだめさせ給ひなどして、あるが中に尊ければ、七陵のうちにて、たえず御つかひの立ちぬべきことなど、物にもみゆるを、世くだりぬれば、さるあらぬことをも申すにや。つかさ位のひくきにしへの歌よみ人の、たゞしきふみにも見えぬなどを、さま〻にいひさわぐなるも、げにうべなりけり。やゝもすれば世の浪風しくめるが、治りて後いでたる人のさかしらするぞかし。

つた事

浪風しく―浪風しきりに起る、世の亂るゝをいふ

さること―如何にも然あるべき事

## 見二近江海一晩頭還來作歌

ゆふだたみ手向の山をけふ越えていづれの野べに庵せむ子等

とあり。是は昔ならの都より近江にかよふには、宇治川を渡りてあごねの原といふ原より、山科のいはたのもりなど過ぎて、相坂を越ゆるよし、萬葉の長歌に見えたり。また萬葉に「齋禮」とも「祈」とも書きて「たむけ」とよめるは、今手向することなるを、すなはち體にいひなして、其神ともするが故に、貫之のぬしは、手向をいのりともかゝれしなるべし。又或人は、俗に山のたうげといふは、國のさかひのみね、あるはあら山のいたゞきなど通る人の、そこにかならず手向する事なれば、そこをやがてたむけといふを、連聲にてたうげといふなるべしといへり。さもあるべし。又貫之家集に、あひしりたる人の物へ行くにぬさやるとて、

體―體言

連聲―音便

玉鉾の―枕詞
ひきもの神―下文の説の如くひきもは神（引裳か）にて、禊を投げ捨て給へる時に成れる神の意なるべし
あはきが原―櫃原
かの人の歌―次に引せる「これやこの」の歌
上にあやしげなる―非常に見すぼらしき
長明―鴨長明

行くけふも歸らん時も玉鉾のひきもの神をいのれとぞおもふ

といふ歌あり。此ひきもの神も道の神とはおもはるれど、後には聞えぬ御名なり。古今集に、下の帶の道はかたゞ〳〵別るともと有るを、顯昭律師の説もあしからねども、或人のいはく、いざなぎの大御神あはきが原にて御帶をなげすて給ふ時に、なれる神の御名を、道のながちはの神といふ、これぞ道のかみにて、そのものだねは御帶なるがゆゑに、下帶の道とはつゞけたるならんといへり。此ことより所あめり。同じ御神御褌をなげすて給ふに、なれる神の御名をちまたの神といふ、此はかまをひきもともいふにやとおもへば、ことの次にいふになん。

こゝに蟬丸の社とてあり。めつぶれたる人なりといへるはひがことなり。後撰集のかの人の歌に、あふさかの關に庵室作りて住みけるに、行きかふ人を見てとはし書あればなり。さて宇治物語に、博雅の三位といひける人は、木幡とかやに目つぶれたる法師の、よにあやしげなるに琵琶はならひけりと有るは、別人なるべし。又良少將の和琴ならひに通はれけるよし、長明無名抄に見え、淸正集に、ある所にて琴など彈きて遊ぶに、夜更けて月も入りぬ、うちの人々も入りぬる音しけるに、琴をしらべていだしたるに、

あがまへ―あがめの延言
あふさかの―下の句「行方知らねば侘びつゝぞぬる」
えぎ―延喜
つとめて―翌朝
かなしの宮―悲し、四の宮
腰の句―第三句もてあそぶ本―小倉百人一首の類

あふ坂の關路に年はへぬれどもけふのしみづや名をば流さん

と有るなどは、より所めきたり。又延喜第四の皇子なりといふは、いと〳〵あらぬことなめり。皇子にましまさば、いかに出家し給ふとも、蟬丸とのみはかくべき。さらば朱雀天皇の御爲にも、村上天皇の御ためにも、御兄皇子なるを、後撰集にあがまへても書かざるをも思ふべし。歌のさまも延喜より前のものと聞ゆるをや。又或説に、古今集にある、あふさかの嵐の風はさむけれどなどいふ歌を、此作れるといふつけそへごとを誠として、えぎの御よはひのほどをおして、御子にあらずといふは、道ゆく人に問ひて境を爭ふたぐひなり。又逢坂に四の宮あることは、延喜よりまへのことなるべし。小町家集に、四のみこうせ給ふつとめて風吹くに、

今朝よりはかなしの宮の秋風やまたあふ坂もあらじと思へば

是は今の四の宮川の事と聞ゆといへる説はよし。又、

これやこの行くも歸るも別れつゝ知るもしらぬもあふ坂の關

といふ歌を、よくとき得たる物のなきにや、此腰の句を、後撰にも素性集にも、わかれつゝとあるを、わらはべのもてあそぶ本どもには、わかれてはとあなり。歌よく心得ぬ

そちがき―暗書

てにをは―助辭

木路―紀伊路

かれもこれも云云―契沖は諸事に通曉せる僧なるが會者定離の說は初めと終との句意に叶はずして採らずとの意

人のそらがきしてあやまれるにこそ。素性集はおほつかなき物ながら、もとより別れつつと有りけんより所とはなれり。相坂はまぢかく都に出入るところなれば、行きかひしけきを、行くものも歸るものも、知るも知らぬも、別れつゝ逢ひつゝするは、是や此あふ坂の關なりといふを、關の名によせて、知るも知らぬもあふといひかけ、さてつゝは上におきて、下の逢ふといふ詞にもくばりて心得る古の句の例にて、わかれつゝあひつゝといふてにをはなり。いとふるき歌の此たぐひをかうがへ合せて知るべきなり。又此五文字を心得かぬる人もあるとかや。萬葉に、越ニ勢能山一時阿閉皇女御作歌、

これやこの倭にしては我こふる木路にありとふ名におふせの山

河閉皇女は元明天皇にましまして、總給ふ御夫は日並皇子尊なり。

これらを思ひ合すべし。また蟬まろの歌は會者定離の心なりなどいふを、契沖といふ法師は、かれもこれもしれる法師なるが、はじめと終との句の意にたがひもとれりとてとらずなむ。末の世にはことの心をばよくもしらで、佛の道のみ崇めるが故に、みだりなることをのみいひよせぬるを、定家卿の書き給へる物には、歌ははかなくのみよむことゞそ、やゝもすればのたまひける。まことにしかなり。凡そ歌の作りざまには、たゞ

うちかへして―反對にひっくりかへして

懷風藻云々―懷風藻は奈良朝の漢詩集にして我國最初の詩集也其中なる藤田連陽春の一首に「近江帷帝里、神叡踞神山、山靜俗塵寂、谷間眞理等、於穆我先考、獨悟關芳緣、寶殿臨空構、梵鐘入風傳」の句あり

ちによみくだせるあり、句をへだてゝ心をかよはせるあり、上下にわかちてことをおけるあり、うちかへして心得べきあり、よくそれにしたがひてとくべきなり。右の歌は、一の句と五の句にかけ、二の句は四の句につらねてこゝろ得、三の句はまた五の句へかけて見べきなり。三十一字にて思ふ事をさまゞにいはんとすれば、いつもたゞちにのみは、句のおきがたきなめり。

比叡の山は、傳教大師のひらかれにたりと人の思へども、懷風藻をみれば、いと早くより寺はありけり。日えの社を日よしといふはあやまれり。ふるきふみに日枝と書きたり。しかも古は、よしをばえしといひて、吉の字をばえとよみけるなり。古事記の歌に、みえしぬのえしぬと有るを、後にはみよしののよしのといへり。住吉をもふるきものにはすみのえとのみ有るを、吉の字をよしとのみよみならへる人は、いとことざまにやおもはん。ふるき物をみて知るべし。ひえの山のふもとにます御神なれば、ひえの神といはんぞことわりなりける。

あふみのみかみ山は、和名抄に、此國の野洲郡に三上、爾保、篠原の鄕などあり。延喜式には此神社を御神と書かれたり。和名抄に三上と有るは、ことばの同じことなれば、さも

さゝ波の―下の句「荒れたる都見れば悲しも」

しぐれもいたく―「白露も時雨もいたくもり山の下葉のこちず色づきにけり」古今集

鈴鹿山―後撰、下の句「しぼなれけりと人や見るらん」

書く事もありけるなり。それにつきて、萬葉に、さゝ波のくにつみ神のうらさびてとあるを、或物に、日吉の御神大物主にましませる故とあれどもおほつかなし。此山を御神といふは、國つ神のましませる所なれば、その郷をもみかみといひ、その浦をもさはいふべきにこそ。此海のかたへに爾保の郷あれば、其方ならでも、にほの海といふごとく、志賀の大津の方にても、ことによりてはみかみのうらといふにこそ。

もる山は、草津の驛の美濃路にかゝる所をもり山といへば、貫之のぬしの、しぐれもいたくとよみけむは、それならんと思ふに、同じぬしの集に、竹生島にまうづるに、もる山といふ所にてとて、歌のあるをおもへば、右のもり山は、京より此島にかよふ行く手にあらねば、いづこにかあらむ、猶考へていふべし。

鈴鹿山いせをのあまのすて衣といふ歌、過ぎにし比、やんごとなきわたりにても、ある家に問ひ給ふに、明らかに答ふることあらざりき。東萬呂うしに、ある人の問へりしに、きはめてしれざる事なり、しかれどもしひていはゞ、これは伊尹朝臣の歌にて、女のもとにきぬを脱ぎおきてとりにつかはすとてとはし書のあれば、みづからをたとへて、やがて男の海人といふにやあらん、さても猶、すゞか山とていせをのあまといはんつゞけも

しばらくさる事―まあ兎に角尤もの事

あがりたる世―上代

伊勢人はひがことしけり―夫木抄に見ゆ

こゝろ得ず、すゞか川とあらば、此川は瀬の多ければ、五十瀬といふ國の名にいひかけたるのみともいふべきをなどぞ答へたりける。今おもふに、海にもをといふ事のあるにや、なるをといふ所もあり、水脉といふ詞もあれば、猶かうがへば、より所も有りなむや。

神風の伊勢といふことは、崇神天皇の御時、天照大御神をこゝにいはひまつれるよりのことのやうに、顯昭などはいひつれども、此ことばは神武天皇のおほん歌にはじめて見えたれば、かの風土記に、伊勢津彦の八風を起し給ひしよりのことゝあるぞ、しばらくさる事と覺ゆるに、是又神武天皇の前いくほどもなき事と見ゆれば、やがて神武天皇の冠言葉におきてよませ給はんもおほつかなし。とにかくにいとふるく神代よりのことばにて、伊勢の國にのみいふべきならねど、神武の初めていせとつゞけさせ給へれば、其例によりて、後々は此國にのみいふにや。いとあがりたる世のかうぶりことばは、たゞ一ことにつゞけたる多し。猶いふことの多かれど、こゝには殘せり。

庄野の宿過ぎて幾里ばかりにかあるらん、泉川といふあり。鴨長明が、

伊勢人はひがことしけり津島よりかひ川ゆけば和泉野の原

とよみたるいづみ野はこゝといへり。此國にはいかなるにかひがことといふことのあるらん。清輔朝臣の書ける物に、いせ物語のことをいふとて、ひが事を構ふる故のよしにて、いせ物語といふ、伊勢は僻といふ故なりとあり。げにも此物語のことによくかなへる說なりけり。堀河院百首の池といふ題にて、藤原忠房朝臣、

いせならばひが事ぞとも思はまし大和なるてふみまさかの池

とよまれたり。此ことちかきほどの諺などならば、題詠の歌にはとり出づべくもあらねば、いとふるくよりいひ來れることなるべし。西行法師の歌にや有りけむ、

伊勢人はひが事しけりさゝぐりの篠にはならで柴にこそなれ

ともよめり。今より考ふべきたよりもあらねども、しひていはゞ、二つの說あるべし。一つにはかの齋宮の犯され給ふことのまことにて、京わらはべのわざ歌に、それとはさで、いせ人はひがことしけりとうたひけるが、後までも諺に傳へしにや。又伊勢や日向の物がたりとて、これらの國人の一所にねたりけるが、魂のうつかりかはりてゆれば、伊勢人は日向に、日向人はいせに行きたりといふ事のあれば、そのことをやひがことといふらん。此二つのうち、齋宮の御事は、物がたりにあれば、似つかはしき所もあらんか。

伊勢人は―山家集に見ゆ

齋宮の云々―伊勢物語「君や來し我や行きけんおもほえず夢かうつゝか寐てかさめてか」の條をいふ

伊勢や日向のものかたり―諺草に「俗諺にあなたになたの一方ならぬ物語をいへり、神代に鈿目命、猿田天彦大神に問うて曰、汝何處に到りなさんや、對て曰、天神の御子は則ち當に筑紫日向の高千穂槵觸峯にいたりますべし、吾は則ち伊勢の狹長田五十鈴川上に到るべし、是より起る諺也」をこのこと―馬鹿氣たる事

かくろへごと―かくれたる祕密の事

似つかはしく―尤もらしく心をことになし―意味を變へ

さて此物語は、伊勢の御の書きて七條后に奉れりなどいふ事のあるにや。いと〳〵こゝろ得ぬことなり。二條后は七條后の御をばにましまして、七條后は延喜の七年にかくれ給ひ、二條后はおなじ十年にかくれ給ひければ、みなおなじ御時にましますを、ことに御姪の后に、そのましますほどの御をばの后のみそかごとを書きあらはして奉るをこの事やあらん。そのころ昭宣公のいきほひなどをもなどか憚らざらむ。むかしの事をいふには、咎なきに心安くて、心にまかせていひなすめり。時世のありさまをよく考へ知りてこそいふべき事なれ。又業平のみづから書けるなりなどいふも、いかにぞや。おふけなき事をも、其外にも道ならぬことをもなして、それしかりとみづからしるしおきてたれに傳へむとすらん。又心のうちのかくろへごとをば、あだし人のしるべからねばなどあるも、いかゞあらん。ふみつくるものの常として、有りけんことよりも、ふかくも似つかはしくも書きなすぞかし。又物がたりのやうをよく見しらぬ時世には、古今集より先なる物と思へる誤さへあるなり。此つくりざまは、あらぬ歌をもて贈答ともし、或は一こと二ことをかへて心をことにし、時世つかさ位などもことゞくくたがへて、その人にして其人のことならぬやうになせし物なり。およそ物語といふは、實錄にはあら

いもにこひあかの松原―見渡せば潮干のかたにたづ鳴きわたる

たまかづら―萬葉「人はいさ思ひやむとも玉葛かげに見えつゝわすらえぬかも」掛け影との掛詞也

物語―伊勢物語

とり〴〵に云々―様々に論ずれども

ぬを、人の口のはにかけて興にそなへんとの心にて、物語とはいふめるを、實錄のやうにさへおもひて、ことの證據にも引きなどせるは、いとこゝろ得ぬ事なめり。この事はこゝに用なきに似たれども、何事にもあしきいひならはしのありて、ふるき事いふに、これがために明らかならぬことのあれば、わらはべのためにいふなり。

あさけ川といふ川あり、是は朝明郡なるべし。萬葉にも、いもにこひあかの松原と、聖武天皇のよませ給へる所は、三重の郡にて、朝明にちかきよし、右のおほみ歌の左にしるせり。此行幸は天平十二年十月なり。おほみ旅寐の夜を、妹にこひあかすといふ心につゞけさせ給へり。むかしは吾をわれとはいはで、あれとも、あがとも、あともいひたれば、吾は明のこゝろにいひかけ給へり。いひかけの詞には、すみにごりを厭はざる事にて、たまかづら影に見えつゝなどのたぐひなり。

物語に、伊勢尾張のあはひの海づらにたつ波を見てとあるに、同じつゞきに、信濃なるあさまのだけの歌あるを、とり〴〵にあげつらへど、淺間の山の烟の美濃路より見ゆべきにあらず、はた伊勢尾張の海づらを行きて、美濃路にかゝるべくもおぼえず、たとひ業平此くだられしたびはおなじくとも、此尾張いせを過ぐる道行きぶりのことにてはあ

一つ―一連、同一個所

後撰集に云々―前に物語に云々といへると同一の歌にて「いとどしく過ぎ行く方の戀しきに淡しくも歸る波かな」といふ歌也

るまじきを、さりとてあだし所によしなく出すべからねば、こゝにならべのせたるにや。此物語には、同じほどの歌とおぼしきを、こと所にも出し、こと時のをも一つらに書きたる樣のこと多ければなり。後撰集に、あづまにくだるに、過ぎぬるかた戀しく思ひけるに、川のほとりを行くに、波のたちにければとあれば、此物語に、伊勢尾張のあはひの海づらと書きたるは、例の作りかへたる物なれば、さるたぐひもとり〴〵多きなめり。

催馬樂に

櫻人、その舟ちどめ、しまつだを、十まちつくれる、見てかへりこんや、そよや、さす歸りこんや、そよや、

ことをこそ、明日とはいはめ、をちかたに、妻さるせなれば、あすもさてこじや、そよや、しやすもさてこじや、そよや、

此櫻人をことなる說どものあれど、これはさくらといふ所の人をいふにて、難波人、須磨人といふたぐひなり。萬葉集に、

櫻田へたづ鳴き渡るあゆち潟しほひにけらしたづ鳴きわたる

とあり。和名抄に、尾張の愛智郡に厚田、作良、成海の鄕などつゞきて見ゆれば、熱田、

あはひ―間、境　むかへ見て―併せ勘へて

我せこに云々―萬葉にあり、此下に「梅の花とれとも見えず雪の降れば」あらぬ―あるまじき、間違ひたる

鳴海のあはひなどの海邊にて、さくら田もそこの田をいふべく、かれこれをむかへ見て、此國の所の名なる事を知れり。その舟ちどめとは、知と止と音のかよへば、其舟とどめなり。あゆちがたなどに、さくら人の舟こぎ行くらんを、その舟とどめよ、のりて島に千町つくりおきたる田を見てこんとなり。そよやは拍子のことばなり。さすかへり來んは、あすかへりこんなり。ことをこそ明日とはいはめとは、ことばにこそは明日とはいはめなり。ことにこそといふべきを、いにしへの詞はかよるたぐひ有り。古事記に、ことをこそ菅とはいはめ。日本紀に、ことをこそたよみとはいはめなどあり。をちかたに妻さるせなればとは、彼方に妻しある君なればなり。さるはしあのかへり左なれば、つづめていへり。せなは人をあがめていふ、いにしへのことばなり。君をも父兄夫をもすべていふなり。後の人はいもせといふことのみをおぼえて、せとは夫婦にいふとて、赤人の、我せこに見せむと思ひしといふ歌をも、あらぬことに引くめり。萬葉に、家持と池主とかたみにわがせことよみかはしたる歌などを見て、あがめていふ事なるを知るべし。こよにせなといふなは、そへたる詞なり。ふるくは兄をなせ、姉をなね、妹をなにもと、なの語を上にそへたり。さねこじは實不來なり。しやすもは、志也のかへりは左なり、

はうし―拍子

眞名に云々―眞字伊勢物語二卷、此書の眞僞、作者の如何につきて古來諸說あり、宣長は後世の僞書と斷ぜり、寶永二十年刊行す

たかゝ―方方、あちらこちら

さすもにて上のごとし。はうしありて諺ふ物は、すべて音便にてさる事の多きなり。物語に八橋のことをいふに、水ゆく川のくもでなれば、橋を八わたせりとあるをも、いかに心得てかいぶかしとする人もなし。眞名にかける此物語を見れば、水堰川の蜘手なればとあるを、水ゆく川とはよみがたければ、水ゐで川とよめる人もあり。堰をゐでとよむはさる事ながら、かくつゞけて水ゐで川といふ例もなく、詞の樣もいかにぞやおぼゆれば、よく考へ見るに、せとゆと少し字の樣の似たるに、筆消などせばまがひぬべし。されば水せく川とよむべし。凡川水を堰くは、苗代などに引きかけむため也。水行く川をせきたちて、其せきの上つかたにて、右左へ四づつ八つの溝をなして、横ざまに水をやれば、蜘の手の四づつふたつにて、八つあるが如くなれば、さてこそ水せく川のくもでなればといふなれ。其川ぞひの道の兩方にあらんには、橋も四づつ八つわたすべし。かゝることゐなかにはかたゝにあれど、一所に八つまでわたしたらんは、まためづらしければ、おのづから所の名ともなりにけんかし。

ぬき川のせゞのやはらたまくら、やはらかにぬる夜はなくておやさくるつま、催馬樂のぬき川のうたに、

二段、おやさくるつまはましてるはしも、しかしあらばやはぎの市にくつかひにかん、三段、くつかはどちかいのほそしきをかへ、さしはきてうはもとりきてみやぢかよはん、

ぬき川は美濃國にいづぬき川ありと、ある物に見えたれど、美濃の國なるをとりいでていふべき歌のさまにあらねば、三河にさる名の川あるなるべし。せゞのやはらはひぢりこなり。やはら手枕といはん料にて、あつぶすまなごやが下にといはん如く、やはらかにぬる夜はなくとなり。おやさくるつまとは、萬葉に、さのの船はしとりはなし親はさくれどといふに同じ。是は女のいふなり。つまは夫をさす。二段おやさくるつまはましてるはしもとは、おやのさくればあふ事もまれなれば、ましてうるはしく、其夫をおもふとなり。るはしもは、うを上略せるなり。ひとつの本にてる日はしもとあやまれるもあり。さてこれらも女のいふなり。しかしあらばやはぎの市にくつかひにかんとは、しかしのしは助字にて、しかあらばなり。矢作の市は、三河の岡崎といふところなり。かひにかんは、かひにいかんを、にの字を引きていへば、いの音のある故に、はぶきいふいにしへの例なり。又ゆかんをいかんといふは、拾遺集に、かめ山にゆくをいく藥とつ

ひぢりこ―泥、軟きものなるより手枕やはらかにの縁に用ひたる也

さのゝふなはし―「上つけぬさぬの船はしとり放し親はさくれどわにさかれがへ

拾遺集に云々―「龜山にいく藥のみありければ止むる方もなき別れかな」

行まはしき云々―桐壺の卷に「限りとて別るる泣の悲しきにいかまほしきは命なりけり」かねて―掛けて

此うちに―同じく催馬樂の中にの意、催馬樂は本文庫古代歌謠集中に收めたり



づけ、源氏物語に、行まほしき生まほしきとかねていへるたぐひ多し。さて是は男のいふ詞にて、しかばかり我をうるはしと思ふからは、行きかよふ料に、市にてくつかはんとなり。三段くつかはどちかいのほそしきをかへさしはきてみやぢかよはん、是は女のいふなり。ちかいは、和名抄に、線鞋を漢語抄を引きて、千開の久都とある千開にて、せんかいといふべきを、千かいと書きしを、ちかいとよみ誤れるなるべし。せんかい音なれども、此うちにとばり張をとも、大領のまなむすめともいへる例なり。又同和名に、絁綾兼用男女通著とあれば、女の料にちひさく作りたるもあるべければ、細しきをかへと、男の料なれども、女のこゝろにて細くやさしきを好みていふにや。又さきのは、男の通はんとて沓かはんといふを、女のわれもかよはんの心にて、女の料のくつかへといふにや。うはも取り著ては男と女のわかちあり、こゝのやう女のことばなれば、沓も女の料なるをいふなるべし。さてうはゝは裙をいふ。下裳は褶をいふ。褶を衣服令の集解に、枚帶とあるは、ひらみといふに同じ。ひらおびとひらみとはことば通へり。是を後にしびらともいふ。源氏物語に、しびらだつ物けしきばかり引きかけてといふは、夕貌の宿のしのびたること故に、上裳をばそぎて、下裳ばかり引きかけたるなり。此下にも、

だつ物―の樣なるもの

うはものすそになどもよめり。又男は袴のうへに褶を著くるが故に、俗にははかまのひらみといへり。或說に、褶をうはもとよむとあるは、男のひらみにまがひたるなるべし。みやぢは此國寶飯郡の宮道を、和名抄に美也知とよみたり。かのみやぢ山もそこなるべし。さて此女この鄕に住みける故にさいふか　他にありて通ふ道にても有るべし。矢作川は加茂郡のころものさとを經て、其上はさなぎ山の麓をながれ來めり。此川邊に豐川といふ里もあり。和名抄に、寶飯郡にいだせり。さなぎは、延喜式に、挾投神社とあり。今は景行天皇をいはひまつれりといへり。

遠江濱名の橋は今の新居のわたりの所なり。今もはしもとの里有り。されど今のわたりの所よりは南によりて、いと海のきはなるべし。これは書くべきもれ、有るまじきも書きまじへて、こともつどかず、いとくだくしかれど、たびのなぐさのみにしあれば、人わらへをいとはずなむ。

旅のなぐさ　終

寶飯郡―今「寶飯郡」

人わらへ―人に笑はるゝこと

# 岡部日記　或は東歸といへり

賀茂眞淵

あはれ都にありつる程は、あからさまながら年のはに故鄕に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里の遠に老いたるたちちねを置きまつりて、とみの事ありともいかでかしらん、しるとも如何でかとみにゆきいたらん、今やいかなる事かあらん、いかなる心にかますらんなど、人やりならぬ胸さわがれつること日ごとにありしを、世のさがはあはれなる物にて、うつたへに忘るとはあらねども、友がきもいで來て、高きいやしきゆきかひしけるに、二つなき心のまぎれやすくて過しぬ。此秋はいざなふ人さへあれば、いでや母をもをがみ、つま子はらからにも逢はどやとて、後の七月八日つとめてたちいづ。此あらましいふころ、人々別れをしむとて、からやまとの歌、一百ばかりもあらんかし。そはこと物にしるしつ。友がきの

都―京都　あかちさま―かりそめ　年のはに―年毎に　たはやすく―たやすく　とみの事―急の事　人やりならぬ―人にせしめらるるにあらず我心かちの意　さが―習はし　うつたへに―一概に　ゆきかひ―往復　後の七月―閏七月　つとめて―早朝　あらまし―豫定

なごりなきにしもあらねど、ちぎりおく日數いくばくならねば、先すゝまるゝ心にはいたしともおもほえず。品川の驛わたりは、海の面ゆほびかなり。夜の雨晴れて、白雲おほく海の空にかゝれるは、伊豆のみ崎と安房の大山となり。此所は袖の浦とぞいふなど、あをざかく奴のみだりにいふはをかしき物から　いづくにまれときあらひぎぬきん日までは、其名のゆかしきや。あさかぜいとゞしく身にしむに、

旅人は衣手さむししばし猶こゝろして吹け浦の秋風

關吹きこゆるなどよみけん思ひいでらる。富士の山はひつじさるの空にみゆ。是ぞおのがながむる方なるに、故郷人はこなたをこそと思ふもこたびはうれし。をちつとし東に來にけるほどに、

東路にありと聞つるふじのねを夕日の空にかへりみるかな

とながめて、かぎりなく遠くも來にけりとわびつるにはかはれり。六郷の渡は玉川にぞあるらん。和名抄に、此國に六座郷あり、同じ所にはあらずや。此水上に多婆川といふ里ありといへり。ことばのすみにごりにつけて、ふるき名なる事猶あきらかなり。さがみ川は今はばにふといふ。古の道はいと北の方なめれば、此水上やむさし相摸のさかひならん。菅原孝標が女の日記に、在五中將のいざことゝはんとよみける所は、むさしさがみの堺の川なるやうにぞある。されども武藏としもつふさのあはひにすみだ川のあるよし、古き物にはみな見えたるを、所の人の教へたるがたがへるまゝに、日記には書けるなるべし。凡そすみだ川といふ所こそ多けれ。古今六帖に、いづはなるあをとが關のすみだ川、と詠みしは、出羽の國にあるべし。辨基がまつち山夕越えくれて庵崎の、とよみけるは、きの國にある事、紀路にいりたつまつち山とあるにてもしるし。後の人はふるき書をよくも見ざるにや。すみだ川はむさしと下總のあはひにのみとおもひて、辨基が歌をもそこにつらね、今はそこに庵崎といふ名の村さへありといへり。ゆふこえくれてといはんほどの山もあらぬものを、こと好むものの、ともすればいつはり事をかまへて、古事をばうしなふものぞかし。かくの如き事は、うちぎきめきたれど、人に見すべきものともかまへざれば、旅のなぐさめがてら、ともなふ人にかたるを、古郷のつとにもやと書き付くるなり。ほどがやの宿すぐるほど、空くもりみ晴れみたゞならねば、雨づつみするに、しばらくして氣色やみにけり。藤澤のうまやにやどるらんとて行くに、しなの坂といふ坂をくだれば、田の上山もとなどに、濁りたる水いと高きは、こゝにし

ことものー別の物　なごりー別るゝ心殘り　ちぎりおくーいついつは歸ると約し置く　いたしーつらし　ゆほびかー幽雅　あをざかくーあんだ、篭具　ときあらひぎぬー解洗衣、萬葉「ゆふされば秋風さむし我妹子が解洗ごろも行きてはやなん」　關吹きこゆるー新古今「秋風の關吹き越ゆるたび毎に聲うち添ふる須磨の浦波」　故郷人は云々ー我は常に富士をながめて故郷を偲び、故郷の人は又これを見て此方を思ふと也、故郷は遠州日記ー更科日記　しもつふさー下總　まつち山云々ー萬葉、下句「すみだ河原に獨かもねん」　紀路にいりたつー萬葉卷四笠朝臣金村の長歌の一句　しるしー明か也　うちぎきーー打聽、人より聞きたる事を記錄し置くもの　つとー土産　雨づつみー雨やどり　山もとー山の根

ふるまひ―模様
つとめて―翌朝早く
夕つけて―夕方にかゝりて
聞きあかされて―耳につきて睡らずに夜を明しかひ―峡、はざま
三巴―支那蜀にあり、水東南流し曲三廻巴字に似たるよりの名
靈叢―支那蜀の地、李白「見説靈叢路、崎嶇不易行」
ふたがれり―ふさがれり

もいたく降りにけるなりけり。大山は今もふりぬべき雲のふるまひなり。此山ぞあふりの神にておはします。

藤澤や野澤にごりて水上のあふりの山に雲かゝるなり

つとめて驛をたつ。夜の雨に道いとあしくて、從者わぶめり。大磯小磯といふわたりは、よろぎがいそなるべし。夕つけて箱根山にかゝる。關まではくるしとて、畑といふ所にやどる。いとはや夜さむなれば、ねもいらぬに、瀧の音、鹿の聲、うちこめたる山の秋風、聞きあかされて立出でぬ。ほのぐと明けゆく山のかひよりかへり見れば、朝霧しろくたちわたれるは、海を見ん心地す。關こゆるほど、日さしのぼりて、湖の面のどかに見わたさる。かなたこなた山をめぐれる水の面は、三巴といふや似つらん。靈叢に擬したる人はたればかりなるや。其後いくそばくの人かのぞみ見けむ。此湖にさせる聞えなきぞあやなき。延暦十一年に富士の山やけて、石など飛びちりければ、足柄の道ふたがれりとて、初めて此道はひらかる。されども又の年、もとのあしがらにかへされける事は、書に見ゆるを、後又こなたをこゆる事になれるは、いつばかりよりならん。貞觀六年七年にもやけて、甲斐駿河の池など埋れしことあれば、其ころよりの事なるべし。富

いき―蒸汽
何がしのだけ―淺間嶽
さりあへぬ―途もよけきれぬ
荷前の云々―萬葉「あづまどの荷前の箱の荷の緒にも妹が心に乘りにけるかも」
雨ばかり―雨ぐちる
人面より起る―李白「山從人面起、雲傍馬頭生」
山人―仙人

士の烟の絶えしは、延暦のころよりたびゝ〳〵燒けし故なるべし。凡そ高き山には、水あり火ありて相うつ故に、鳴澤もありけんを、火終に大に起りて、岩をとばし土をちらし、水をたくはふるいきほひなければなるべし。山は火あるのみにては烟たゝざるか、寶永の比もやけにけれど、其前つかたに烟たちし事をきかず。水の火あるいはほにふれてたてるいきなるべし。何がしのだけもしかなりといへり。今はたゝずといへるをおもひ合すれば、貞觀の時にたえたるにやあらん。けふは何がしの國より貢物おくるとて、さりあへぬまで行きかひたり。荷前の箱の荷の緒にもなど誦してくだるに、ふりさけ見らるる海山の興あるにも、過ぎし比雨にこえし折おもひ出でらる。すべてみ山は雨ばかりあはれなるはなし。こゝかしこくゆりいづる雲の、うすき濃きに、山々はおもかげばかりぞみゆる。人面より起ると吟じてこえつる、苦しからぬにしもあらねど、あなをかしとみしはといふに、人々は例のひがこゝろにこそ、いぶせかるべき物ごのみなめり、龍にのるらん山人にやあつらへましなどわらふ。からうじて三島の驛に至る。ふるき歌にちの實の父とつゞけしは、木の實にて、此國にありといふ人のありしかば、問ひもとむれど見しれる人もなし。

ちゝのみなきぞ―郷里に母のみにて父なきを此地にちゝのみといふ木の實なきに掛けていふ

いぬ―午後八時

今―大寶令

今の五里―古は支那の里程になちひて六町一里とす

たより―便利

かちめいたる―唐風の

たゝずまひ―樣子

もだしぬ―作者

古郷のはゝその蔭はとひゆけどちゝのみなきぞ悲しかりける

けふは雲まよひて富士も見えず。原の宿わたりより雨ふらんとす。富士川は明日こそわたるべきを、水嵩やまさりなむ、夜をかけてだに蒲原の宿までいかでゆかんとて、夕つかたより立ちまよふ雲のあしとともにいそぎつゝ行くに、空晴れて、おもはざるに月さやかにいでにけり。

夜舟こぐふじの川とに霧はれて高ねにいづる月を見るかな

夕の雲のいざなはざらまじかば、かゝる所の月はみざらましを、心ありけりなどいひあへり。いぬのはじめばかり蒲原の宿にいたる。此驛は貞觀七年に富士川の東の野にうつされたるよし、史に見ゆるを、一とせ川水いたくあふれて、驛みなながれければ、今の所におかれたるなり。いにしへ令の時の驛は、阻嶮ならぬ所には、三十里ごとに一つをおくといへり。これ凡そ今の五里ばかりなり。今はさる所すくなし。かゝることにてうつしかへける故なるべし。遞送も五里にてはあまりにたよりあしかるべし。十一日さつた山をこゆ。なにがしの湖みるらんけしきおぼえて、からめいたる入江のたゝずまひなり。詩作らましを、年頃いはざりければ、なかなかにてもだしぬ。おきつの濱すぐるに、あまのまてがたといふ事、こゝにてぞ心得られしと、東萬侶大人のかたられしを思ひ出でぬ。げにもたゞといふ物を、縄して枕のかなたこなたにかけて、おのが肩にいなひながら、うちつくる波にさかひて、左右の手を縄にそへて　かたをうごかして汲むなり。古語にひだり右ふたつの手をまてといへり。又くみ來てはすなごにうちそゝぎて、又なぎさにおりたちてくむ、見るめもくるしく暇なし。古語よく意得たらん人に、猶くちづからいふべし。清見潟はなか〳〵言の葉もなし。夕つけてあべ川わたる。うす〳〵霧わたれる夕日の、さゞ波にかげろひて、駒のあがきにちり碎くる水の、するさうなどのわれたるやうにみゆるは、清少納言が詞おもひいでられて興あり。うつの山はいとさかしかれど、むかしの道にあらずといふぞ口をしきや。和名抄に、此郡に内屋といふ郷あり。今もさいへり。霧立ちていとくらし。

夕霧に行く先くらきうつの山うつゝのやみにこえまどひつゝ

くれ過ぎて島田の宿にやどる。あすはふる郷なりけりと心いそがれて、夜ふかくいでて大井川わたるほど、ほのぐと明け行く。さやの中山は朝霧わけんも珍らしかりなんとて、かちよりこゆ。菊川の里、むかしは驛亭にやありけん、右大將頼朝卿建久元年十一

ずして止みたり

あまのまてがた―後撰集に「伊勢の海のあまのまてがたいとまなみながらへにける身をぞうらむる」夫木抄にも用例見ゆ

すゐさう―水晶

清少納言が詞―枕草紙「牛の歩むまゝに水晶などのわれたるやうに水の散りたるこそをかしけれ」

かちより―徒歩にて

日野云々―此一條太平記の趣によれり

月十三日こゝにやどり給ひし事、物に見えたり。また日野右少辨俊基二たび東にくだりける時、かれいひすゝむとて輿を此宿の庭にとどむるに、轅をたゝきて、まもりの士をよびて、所の名を問ふに、菊川と申すといひければ、承久のいくさのをり、院宣書ける罪によりて、光親の卿を鎌倉に下しけるに、此宿にてうしなひけるを、「昔南陽縣菊水、汲二下流一而延レ齢、今東海道菊川、宿二西岸一而終レ命」と書きたりける、遠き時の筆の跡、今はわが身の上にやとて、

いにしへもかゝるためしをきく川の同じ流に身をやしづめん

とよみて、宿のはしらに書き付けられしとぞ。關東紀行といふ物には、中御門中納言宗行卿なりとあり。いづれかまことならんとも思ひわかねど、あはれなるむかしがたりをえ思ひすぐさで、人のしれる事ながらしるすなり。さやの中山はさや郡にあればなり。今の世此郡をさよといふはよこなまれり。續日本紀養老六年に、遠江國佐益郡八郷を割きて、始めて山名郡をおくと見え、延喜式に佐夜郡と書く。またかひがねをさやにもみしがといひて、末にさやの中山といひ、古く六帖に、

東路のさやの中山さやかにも見えぬ雲ゐに世をやつくさん

關東紀行―本集の中に既出せる東關紀行をいへる也

出名郡―遠江の一郡、明治に及びて磐田郡と合併す

かひがねを云々―古今集東歌也

新坂―振假名原本のまゝ、今「につさか」と通稱せり

記―枕草紙

むかへ―参照して

相摸―大江相摸守公資の妻、有名なる歌人にて其歌後拾遺以下の勅撰集に見ゆ

ねぎごと―願ひ事

新古今集忠岑が歌に、

東路のさやの中山さやかにも見ぬ人ゆゑに戀ひやわたらん

といへり、古はかゝる語勢多し。さればさやの中山といふにて、郡をさや郡といふべきをしり、さや郡といふによりて、さよの中山といふ誤をもたどすべし。下れば新坂の宿なり。すくのはてなる社を、今の世には八幡の社なりといふ。こは延喜式に佐夜郡己等の麻知神社とあるなるべし。はやく文德の御時、從五位下の神位になし給へるには、任事社としるされたり。清少納言が記にも、ことのまゝの明神、いとたのもし、さのみ聞きけんとやいはれんと思ふぞいとをかしき　とかきたるにむかへ見れば、ことのまちとあるぞおぼつかなき。さて鴨長明も、さやの中山のくちにあるなることのまゝの社、とかければ、其頃まではうたがひなかりけむ。和名抄に、此郡に山口といふ郷ありて、今もあれば、よくかなへり。是を此國の一宮なりといふものもあれど、周智郡小國社をこそ、古く一宮とはいひつれ。相摸のよみけむ歌の詞書にも、こゝとありしやらん。とまれかくまれ、此やしろねぎごと聞き給ふとて、人々のうちこぞりてたふとみまうづれば、ことのまゝなる社とこそいふべければ、行く手にをがみて過ぐるもたのもし。右の

あはー あれは何山ぞ

ーれしき瀬云々 うるれし涙に袖を濡するを也門によりー母が他國に在る子の歸るを待ちわぶるをいふ、戰國策に、王孫賈の母が賈に向つて「汝朝に出でて晩に來れば吾則ち門に倚りて望む云々」といへる故事

髪のよもぎー老いたる我が髪およづけー もよすけの訳、成人し

まことのいたれるー親子の至情まで一詣でこたみ一今度

かたはるかに秀でたるはあはがだけなり。

空たかくたつ白雲のあはが嶽あはとがめて見ぬ人ぞなき

懸川の宿わたり、ゆかりあるかたゞ〳〵おとづれて過ぎぬ。夕つけて天龍川わたる。むかしの歌には、あまの中川とぞよみたる。人々むかへにとて來つゝ、おい人の事なきよしまづいひて、いとめづらしとおもひたるけしきどもうれしくて、

まれに渡る天の中川なか〳〵にうれしき瀬にも袖ぬらしけり

くれ過ぐるほど、岡部の家にいたる。まことに門によりてまちうけ給ふ。いときなき姪どもなど、はせ來れども、見しらぬかほなればにやあらん、とみにもむつれず、なれしばかりの人々は、髪のよもぎは似ずなりぬめれど、くにぶりの詞のみやしるかりけん、いづれの所よりとは問はざりけり。つまなる人はたはやすく來べからぬ故あれば、先子をおこせたるに、年比へて見るに、およづけにたるぞうれしき。まことのいたれることとて、なつかしく嬉しとおもへるけはひもあはれなり。常はしたしからぬさへ訪ひ來て、日に〳〵かたらふに、庭のよもぎも露かわくひまのありげなり。こゝにまで來たりにければ、京にもと思ひぬれど、東にちぎりつる日數しあれば、こたみはえまうでぬを、やむごとなきあたりあしからず申入れ給ひねと、非藏人親盛などに文つかはす。

八月十日ばかり、民部少輔暉昌の家に歌よまんとするに、東にて、わがあらぬほどに、月前遠情といふことを人々よめりといひおこせつれば、すなはちその題を人々とともに、

いく千里月にむかひておもひやる心のはてや白川の關

おなじむしろに題をさぐりて、曉更荻風といふことを、

いかでたゞ夕のものと聞きつらんうきはねざめの荻の葉風を

藤原龍萬呂、ことしむ月ばかり身まかれりけるに、そのはかに高松山といふ所にまうでて、花など手向けて、松の茂れる中にたゝずむに、秋風のいと身にしむ心地すれば、

松たかき山のあらしの聲のみやそこはかとなく聞きて歸らん

その繼母なるもうせて、墓の竝びてあるに、同じく手むけつ。哀さいはんかたなし。

手向する心や野べにかよふらん折る花ごとに露こぼれつゝ

又藤原のくにあきらも此夏身まかりにたりと、東にて聞きて、おどろきてよみける歌の

身まかりー死に

聲のみやー墓の主の聲は聞くべくもあらねばと意を含めて見るべし

めかるればーあひ見ずに離れて居れば

あるを、國滿のもとにつかはす。

めかるれば疎ならひを思ふまに永きわかれとなりにけるかな

とむらひ―弔問し

くさ―種

のたまひつれど―折角の仰なりしかども

こよなく―此上もなく

まだきなる物から―この色の紙を用ふるには早き時候なれども

うけ―泛べ

とりまかなひて

その妻まさきは東萬侶大人の姪なり。なげきのほどおもひやられて、とむらひけるに、目もなきはらしながらたどりいでて、あはれなること物語するついでに、東にてさるべきことのはもあるらん、思ひなぐさみぬべきくさともなりなん、いとまには訪ひ來てかたり給へかしなどあれば、二日三日すぎて文つかはす。

のたまひつれど、さはる事のみありて、まうでも聞えなぐさめまゐらすべくも侍らず、これは野を分け侍るに折りつる花なり。

此秋は露のかゝらぬこと草をいづこに得てかなぐさめにせん

うすにびの紙に書きて、草の花をさまぐ〜あつめておくりけり。かへし、

いとど露けき秋に、うちしをれくらし侍るに、よみ給へる歌どものおもしろきを聞き侍らば、こよなく心なぐさみてまし。猶ひまもとめてとひ來給へかし。

いづこをか更にもとめん珍らしき人のことばの花ならずして

枯野いろめきたる紙に書きたるは、まだきなる物から似つかはしきや。

月のさかりは、水の面こそ物よりもわかね、濱名の橋の程遠くも近くも、月に舟うけたらんぞこよなかるべきとて、人々小舟とりまかなひて、入野の村の入江よりさしいでて、

―世話しとゝのへて

ゆはびか―幽雅

舞澤―今の舞坂、下文に其辨あり

はらゝに―ちらほらと、そこここに

氣賀―傍訓原本のまゝ今「ケガ」と呼べり

遠江歌―遠つあふみ引佐細江のみをつくしなれを頼めてあさましものを

たどる―不明確にて何處なちんと疑ふ

雄踏などいふ村右に見てさしわたす。この所はむかしの湖にて、遠つ淡海とよびしもこれによれらんを、今はうしほうち入りて、ゆほびかなる入海なり。西は高師山たかく雲間に見え、左は舞澤の松さながら波のうへにたてり。其西はかの濱名の橋かけたりけん所にて、今は大海にうちつゞきて、大船小ぶねはら〳〵に行きかひたり。右のかたはいく里ともなく、入江はる〳〵と見わたさる。其入江のおくぞ引佐細江なりける。さればその所の山の名を、大いなさ小いなさといひて、其あたり引佐郡にて、引佐村もあり。あらるの渡り波風あらきをりは、濱松の城の北より道ありて、氣賀の關こえてゆけば、此入江まぢかく見えて、けしきえもいはずおもしろし。これは萬葉集の遠江歌に、いなさ細江のみをつくしとよみしより、名だたる所なり。其比かのわたりの任にてすめる人か、あるは郡司などの歌なるべし。後の人は今の大道のほとりならでは、みやこ人などのゆきかふ道あらじと思ふより、舞澤より濱松へすぐる道の右の方なる蓮ある池の長きを、それにやといふもののあるは、むかしの樣をしらぬなめり。また濱名の橋かけたりけん所もたどる人多し。此所西は今のあら井の驛の西南につゞきて、橋本の村といふあり。これいにしへの驛なり。されどこれよりいと南へおしいでたる洲のありしなり。東は舞

夕ゐる―夕方となり居る

波をわけたる―波の間に立ちたる

澤の松原一筋、海と湖のへだてに西へさしいでて、橋本の宿と松原とのあはひ少しある所を、北の湖の水のながれいづる口に橋はかけたるなるべし。されば高師は濱名郡にて、白須賀と荒居との間、大道より北なる山をいふ。

高師山夕こえくれてふもとなる濱名の橋に月をみるかな

又、

高師やま松に夕ゐるかさゝぎの橋本かけて月わたるみゆ

といふ歌にて、高師山を越え過ぎて此橋本ある事をしれり。又、

高師山こえ來て見れば一筋の松原とはき浦の入海

とよめるは、舞澤よりさし出でたる松原なり。松原の北は湖、南は海なりけり。

たれうゑて海と川とをへだつらん波をわけたる松のむらだち

又東福寺虎關禪師紀行のこの所の詩に、「左海右湖同一碧。長虹含兩波瀾」ともつくりたれば、そのへだての松ばらに道ありて、天の橋立のやうならんに、その松ばらのはてと、宿とのあはひに橋をかけたるなりけり。文德實錄に、「濱名郡角避比古社の前、湖一口ありて開塞る事有り、ふさがれば民のわづらひとなれり」と見えたるも、こゝなるべし。さてあらゐは今は濱松の庄にて數智郡なり。湖の京ちかくあるにむかへて、此國をば遠つあふみと名づけ、あふみによりて、此あたりを淵の郡ともいふべければ、あらゐももとは濱名郡にて、橋をもさいふか。さらでも六條わたりにても、賀茂川といひ、妹脊山の中にながるゝ下にてもよし野の川といふが如く、濱名川の末にかけたれば、さもいふなるべし。橋は三代實錄に、

むかへて―對して

妹脊山―大和吉野川を中にして相對立せる山

水の上の濱下句「打消つ波もよりこざりけん」

黒木―きり出し皮をまくれて側ちぬ丸木

なゐ―地震

元慶八年九月朔。遠江國濱名橋。長五十六丈。廣一丈三尺。高一丈六尺。貞觀四年修造。歷二十餘年。既破壞。勅以彼國正稅稻一萬二千六百三十束改作焉。

とあり。しかるに重之家集に、「實方朝臣のもとに、みちの國へ行くに、いつしか濱名の橋わたらんとて來るに、はやう燒けこければ」とて、「水の上の濱名の橋もやけにけり」などよめり。又增基法師遠江道記に、濱名の橋くづれたるを見たるよしあり。又更級の日記に、「濱名のはし、下りし時黒木をわたりし、此たびは跡だに見えねば、舟にてぞ渡る」と書けり。此頃一度絕えて、又後につくられしや。詳に知りがたし。其後應永三年八月十日、波高くして橋かけたりしほとり打破られ、永正七年八月二十日、なゐふりて松原をふりくづしければ、湖大海ひとつになりぬ。それより所のもの今切のわたりとよびき

月にのりて―月に乘じて
しづ心なくて―心せわしくして
しるは―志留波、今白羽御前崎といふ邊也

かしこし―可畏
何か思はん―略解本其他概ね「こともかゆはむ」に作る
さゝれ―指向けられ
いとのきたる―遠く相距りたる
をし物の云々―食膳のおかず

たれるよし、老いたるものの物語に殘れり。舞澤を今は舞坂といふはよこなまれり。承久三年六月七日、北條實時舞澤の松原に宿ると東鑑に有り。かゝる事物語らふ程、盃とりく〳〵に醉ひて、から歌などいひつゝ、夜ふかく月にのりて歸りぬ。名だたる所々もとはばやと思へども、東にかへる日數過ぎなんと思ふにしづ心なくて、思ひ殘す事こそ多けれ。大の浦、長濱は、天龍川の東に大の江と云へる所の濱邊なり。しるはの磯もまた其東南にて、横須賀といへる所にちかし。むかしゆきて見たりしに、あら海の中に巖のはるゝ〳〵と磯よりならびいでて、しほのひぬれば、馬の背のごとくつゞきて、數々見ゆ。里人は七十五匹のこまかたといひならはし、其所の神をこまかたの明神とぞいふなる。かの遠江なだとて、舟人の手向し、かしこしとするは、此巖にあたる波のあらきによりてなり。萬葉集に、

あつけと相向ひて近き如く

とへたほみしるはの磯とにへの浦とあひてしあらば何か思はん

あらたまの―「きべの林に名を立ててゆきかつましもいをさきだたに」萬葉。

とよみしは、筑紫へさゝれたる此國の防人の歌にて、筑紫と遠江といとのきたるさかひなれば、古郷しのぶおもひのたへがたきを、かのつくしに有るにへの浦と、此しるはの磯は、をし物のにへと汁とむかひてちかきが如くあらば、物はおもばしを、名のみは相似てかひなきよしをいへり。とりわきてくにぶりの歌は、詞のひなびたれど、こゝろはいたりたるなり。これをさきもりの歌なることをわすれて、遠江にぬへしろといふ里のあるにおもひよせたるひがこともあなり。あり玉といふ里あり。これはかのあらたまのきべの林とよめる、此所なるべし。きべといふ名、今はなし。或人のおもへらく、貴平村といふぞ此ちかくにあなる、伎倍のかなに通ひたれば、それにやといへり。さこそあるべし。さて麁玉郡は和名抄に四郷にて小郡なり。和名に覇多郷あり。今此所にはたや村あり、これなるべし。又あり玉川有り。文德の御時、此川に三百餘丈堤かけたりなど史にあり。今は袖つくばかりの水なり。其村の西なる坂をのぼれば、三方が原なり。西東は三里ばかり、北南は一里あまりぞある。此南に犀ががけといふ有り。さて此野を引馬野といふに疑なきにはあらず。萬葉集に、天皇三河國にいでます時とて、

引馬野ににほふ萩原入りみだり衣にほはせ旅のしるしに

とあり。さらば三河にこそといふべきを、阿佛尼の、「こよひは引馬の宿にやどる、此ところすべての名は濱松といふ」と書き、關東紀行、富士紀行、また東鑑に、建長四年宗尊親王のくだらせ給ふにも、引馬の宿にやどりたまふこと見えて、むかしは疑ひなかり

阿佛尼―十六夜日記の作者

したしきかぎり—親しき人々一同
おほかなり—多くあるなり
此ごろこそ待れ—此頃こそ見所多く待れ
きり—霧の動詞きりがかゝりて

しなるべし。今濱松の北に、京へのぼる道を、引馬坂ともいひ來れり。おもふにこの野の北南は、やがて三河にちかければ、此行幸の官人の隣國にいたれる事ありてよめるなるべし。

二十日ばかり、京よりしたしきかぎり文おこせたり。親盛が返しに、

そこまでのぼりたりと、一條わたりにも聞しめしつるを、などて過し給ふべき事かは。近き年頃考へ給ひし古歌の註などもおほかなりときくを、東の海べたに拾ふべきあまの子もあらじかし。波のそこならんも、あまりにうもれにたり。殿わたりにも奉れ給はんかし。雲の上の月も此ごろこそ待れ。

など、こまやかにて、

都へと出でこし月の中ぞらにいかなる山かきりへだつらん

さやの中山はまことに心なげなりなど有り。立ちかへり、

おもひやれ月のみやこにへだてある身をうき霧のさやの中山

なか〳〵にゆきとまるべきにあらねば、吹く風にことづてゝのみあらむとぞ思ふ。月のほどもいつしか過ぎて、八月の末つかたより、雨ふりつゞきぬれば、東路の川てふかは

あとゝひ—法事
そのをりばかり—生きて居る當時の程に
かけまくも—口に掛けて申さんも
ふち—敷智、淵の意に掛く

あふれて、通ひたえにたりといへば、いたづらにながめくらさんよりはとて、國滿の家などにて、ふること物語など講ず。或日雨中蟲といふ事をもろともによみける。

雨の夜の長きうらみをつねよりもしめやかになく蟲の聲かな

人々のは事しげければもらしつ。おもひのほかにとどまりて、九月四日にもなりぬ。この日はさきの妻のうせにし日なれば、はやく住みける家にて、あとゝひなどして、墓にもまうでたるに、いつしか十七年にこそなりにけれ。あはれなる事、そのをりばかりおほえて、しほたれをるに、雁の鳴きければ、

ふりにける常世をしたふ雁のみは廻り來てこそ鳴き渡りけれ

わが氏の神は岡部の賀茂なり。ある時東麻呂大人みやこにかへるに、濱松によしありてしばらくいこへるまゝに、詣てよみける歌、

みづ垣やその神山の影うつす岡部の松はいく世へぬらむ

とぞありし。今おのれほどもなく立ちかへりなんとするに、まうでて奉りける長歌、

其かみの　事をしとへば　かけまくも　あやにかしこし　遠つ神　遠つあふみに
はかりなき　恵もふちの　郡なる　岡部の里に　山代の　賀茂の宮居の　新宮の